

# 資料

## 1. 住ま研ニュース

号数	発行年月日	文章責任	主な内容
1	H10, 02, 28	杉田 収	在宅支援／自立支援をめざして、第3回研究会案内： 遁所氏
2	H10, 04, 20	関谷伸一	バリアへの挑戦と家屋改造の実際：遁所氏、林玉子氏の講演内容概略、第3回フォーラム紹介：外山義氏
3	H10, 06, 30	水戸美津子	外山義氏の講演内容、山梨県立介護実習普及センター・甲府市障害者センター紹介、新メンバー紹介
4	H10, 08, 31	室岡耕次 斎藤智子	設計実務からの報告、長岡・越路町施設見学会報告（高齢者対応型モデル住宅、低床バス、長岡日赤、わらび園）
5	H10, 10, 31	安田かづ子	新大工学部牧野先生のGPS紹介、上越市冬期雪道状況
6	H10, 12, 18	山際和子	シックハウス症候群、第4回・5回研究会案内
7	H11, 02, 25	小林恵子	見附市消防本部金井氏の講演内容、シックハウス、飯豊町で住宅改良ヘルパー、ぶらり東京お勧め所
8	H11, 04, 23	水嶋和美	ダイオキシン、第4回フォーラム紹介：黒岩卓夫氏
9	H11, 06, 28	杉田 収	黒岩氏講演「看護短大の教員・学生にぜひ伝えたい事」内容概略、除雪車による除雪後の玄関先の雪
10	H11, 08, 31	関谷伸一	施設見学会報告「おらはうす宇奈月」
11	H11, 11, 04	斎藤智子	ショッキングな記事、ぼけ老人と家族への援助をすすめる会参加、桜桃祭案内
12	H11, 12, 10	森 光義	ゴミ問題、住宅見学会の案内
13	H12, 02, 07	青柳恵子	私自身の3年間のまとめ、大学祭「住ま研」活動報告
14	H12, 04, 24	小林恵子	第5回フォーラム紹介：阪東美智子氏、映画「続・住民が選択した町の福祉・問題はこれからです」感想
15	H12, 07, 07	杉田 収	投稿「アメリカ研修旅行から」水戸美津子、施設見学会大萱の里紹介、阪東氏講演内容、守岡氏の詩集紹介、グループハウス国府見学
16	H12, 08, 30	中田まなみ	直江津駅を見学して、大萱の里見学感想
17	H12, 10, 31	関谷伸一	投稿「作業療法と住環境の改善」長崎重信、ハンドル式上下可動流し台見学、在宅医療とME技術研究会、桜桃祭案内
18	H12, 12, 27	斎藤智子 中田まなみ	「住宅改修の道のり」K氏のプロフィール・改修までの歩み・ポイント・本人の感想、学園祭を通して
19	H13, 02, 20	佐々木 美佐子	投稿「やわらかい物差し（1）」南館恵理、身障者住宅研修会に参加しました、融雪マット実験結果、ソーラー発電、第6回フォーラム紹介：溝口千恵子氏

20	H13, 04, 23	杉田 収	投稿「出合いは財産」水野京子、関根先生の新築住宅設計検討会開催
21	H13, 06, 29	小林恵子	グループ築宅活動紹介、溝口氏講演内容、事故のため電動車椅子で生活されている M 先生宅を見学
22	H13, 08, 30	見田喜代美	投稿「大好きなおばあちゃんとの夏の思い出」見田喜代美、夏の施設見学会報告「介護福祉士会研修所見学、ユニゾンプラザ見学、グループホームからし種の家見学、県民会館遊歩道」、お知らせ：学生部の活動新聞記事に
23	H13, 11, 05	杉田 収	学生部の今年の「大学祭劇」紹介、第7回フォーラム案内：無雪道路、附属中での応援授業：室岡氏
24	H13, 12, 26	関谷伸一	雪さえなければ、上越地域の無雪道路化を考える、CHU 融雪システム見学ツアー案内、大学祭劇：入浴介護ってなに？
25	H14, 03, 08	斎藤智子	CHU 融雪システム見学ツアー報告、音声認識ソフトの問い合わせ
26	H14, 04, 30	杉田 収	新加入の先生方紹介（新潟県立看護大学開学）、ストレーター（住宅用昇降装置）見学、平成13年度研究・活動報告、14年度活動予定、学生部活動計画、上越市冬期雪バリア対策モデル情報、投稿「木陰」寺本希久枝
27	H14, 06, 20	佐々木 美佐子	住ま研が NPO？、K 氏宅訪問記、グループ築宅の研究会に小林（恵）講師が講師で参加
28	H14, 08, 30	関谷伸一	住まい相談の受付開始、施設見学報告（介護ロボット、山梨のケアホーム）
29	H14, 11, 05	小林恵子	第8回フォーラム：地域看護からみた住環境、第29回国際福祉機器展に参加して、桜桃祭：住ま研学生部の劇「住ま研ステーション」案内
30	H14, 12, 16	広田 愛	桜桃祭の感想、K さん O さんの住宅改修を見学して、住ま研会則案、外山 義先生の急逝、
31	H15, 03, 17	斎藤智子	「住ま研」が手作りの本を作りました、会員募集・入会方法、最近の住ま研活動報告、投稿「おせっかい」のススメ」広田 愛

第1号

# 住ま研ニュース

平成10年2月28日

発行：新潟県立看護短期大学「快適住まい環境研究会」

新潟県立看護短期大学に「快適住まい環境研究会」略して「住ま研」が発足したのは、平成8年2月のことです。全ての人の自立生活が可能のように、また誰もが安心して生活できる住まい環境の創造のために、をスローガンに掲げて短大教員5名の有志により設立されました。それから2年、2回のフォーラムと2回の研究会、さらにさまざまな規模の施設見学会を重ね、毎週木曜日に行っている勉強会も36回になりました。その間に研究会の仲間も増えました。研究会員は、学内の教職員を始め、建築士、作業療法士、理学療法士、上越市職員、高校教諭、病院看護婦、その他福祉関係者や市民で約30名です。看護短大の学生が主体の「住ま研」学生部も発足し、今までに行われた2回の大学祭では、内容のある研究発表を行いました。

## 「住ま研ニュース」の発行

研究会員の皆さんとは、年に1～2度フォーラム開催時にお会いする程度で、個々の会員の想いや提言は、会の運営に反映されにくい状況でした。住ま研が本当に社会に役立つようになるには、会員相互の情報のやり取りが必要です。そこで3年目からは「住ま研ニュース」を発行することになりました。まだ力量不足のため隔月発行から始めます。皆さんの意見発表、アイデア、困ったこと等の投稿を歓迎します。A4版用紙半分程度内にまとめて、裏面事務局まで送付下さい。このニュースは今後FAXやE-メールも利用してお届けしたいと思います。FAXをお持ちの方は番号を、またE-メールを利用されている方はアドレスをお知らせ下さい。

## 「快適住まい環境研究会」とは

「快適住まい環境研究会」は、誰もが安心して住める住環境の整備を目指しています。たとえば自分の家で介護してもらうには、どのように住宅を改造したら良いのか、その資金はどうするか、一緒に考え、研究します。また車椅子の生活になっても、高田や直江津駅から1人で友達や孫に逢いに出かけられるように、駅構内の改造を働きかけます。これからの私達の生活と、私たちの街のために、行政と連携しながら、住環境を整備する主体になれるように頑張ります。

下記の講演会を企画しました。ぜひご出席下さるよう御案内申し上げます。なお今回は講師に交通費とささやかな謝礼を差し上げたいため、参加費500円を御負担下さるようお願い致します。

### 第3回 研究会

日 時：平成10年3月19日（木曜日）午前10時30分から午後3時30分

場 所：新潟県立看護短期大学第一講義室

講演Ⅰ：演題 バリアへの挑戦 講師 遁所直樹（とんどころ なおき）氏

午前10時30分から11時30分 質疑応答：午前11時30分から正午

~~お昼の弁当を幹旋します。510円です。~~

~~必要な方は同封のハガキで申し込み下さい。~~

講演Ⅱ：演題 重度障害者を介護するための家屋改造の実際

講師 遁所彊二（とんどころ きょうじ）氏

午後1時30分から2時30分 質疑応答：午前2時30分から3時

諸連絡等：午後3時から3時30分

閉 会：午後3時30分

#### 関係書籍販売

期待せず諦めず一頸髄損傷の息子と共に— 遁所彊二著 近代文藝社 1500円

英国見聞考 遁所直樹著 広文堂印刷 1000円

#### 講師プロフィール

大学院生時代の頸髄損傷から10年、さまざまなバリアを乗り越え、昨年より国際福祉医療カレッジで非常勤講師として、また今春より社会福祉士として働く遁所直樹氏（35才、新潟市）と、彼を支える父親の遁所彊二氏です。彊二氏は理科と数学の教師を勤め終えられ、その退職金で直樹氏の障害を考えて自宅を改築されました。天井走行リフトや自動ドアを装備したお宅です。その改築体験談に「快適住まい環境研究会」の社会的役割とトライハウスの原点があります。アイデアいっぱいの住まいに2人で生活されています。時々お孫さんが遊びにきているようです。

~~会場準備の都合上、出欠席のお返事は平成10年3月12日までに届くようお願い致します。~~

問い合わせ及び原稿送付先：〒943-0147 上越市新南町240番地

新潟県立看護短期大学 「快適住まい環境研究会」

TEL:0255-26-2811 FAX:0255-26-2815 E-mail:sugita@niigata-cn.ac.jp

担当：西脇洋子、水戸美津子、関谷伸一、杉田 収

## 「バリアへの挑戦」と「家屋改造の実際」

**新**潟市在住の遁所直樹（とんどころなおき）氏と遁所彊二（とんどころ きょうじ）氏をお招きして、去る3月19日（木曜）、第3回の研究会が新潟県立看護短期大学で行われました。

お二人の講演は、「バリアへの挑戦」と「重度障害者を介護するための家屋改造の実際」というテーマで、午前と午後に分かれて行われました。当日は平日にもかかわらず、約40名の参加がありました。直樹さんは頸髄損傷による重度障害のつらい宣告を受けた後、そこから立ち直り、力強く社会参加に取り組んでこられ、現在は社会福祉士として福祉関係の専門学校の非常勤講師をやっておられます。その間に二度の海外旅行も経験されています。その息子さんを全面的に支えてこられた父親の彊二さん。お二人の胸を打つ具体的な内容の講演に、皆熱心に聞き入りました。身体の障害と社会環境の障害との二重の敵と真正面から戦ってこられたお二人の話は、著書のタイトルにもなっている「期待せず、諦めず」という言葉にすべて集約されていました。そして、戦いには創意工夫がいかに大事であるか、多くの実例を挙げていただきました。また、障害者に対して、いかに日本の環境がお粗末だかを知らされたと同時に、そのような環境の中でも何とか工夫して協力しようとしてくれる多くの人々がいることを知り、これからの励みとなりました。

遁所さんのプロフィールや著書については住ま研ニュース第1号をご覧ください。

## 「バリアフリー住宅のおさえつぼ とかくしあじ」

**国**際医療福祉大学教授の林玉子氏による講演会が、標題のテーマで去る3月27日（金曜）、新潟県建築士会上越支部の主催で、上越文化会館にて行われました。上記のテーマに、「人生80年、心や体が衰えても安全で快適に住み続けられる住まいづくりとは」というサブテーマがついていました。

林先生御自身も足が不自由ではありますが、まさにプラス思考、転んでもただでは起きない発想法で、バリアを次々と乗り越えておられます。先生のお言葉のいくつかをご紹介します。

- ・「道具」を使いこなせ。
- ・「道具」は「住宅」、「地域」、「都市」の各レベルでの対応がなければ生かされない。
- ・自立のための「平成三種の神器」とは、「車椅子・温水洗浄式便座・リフター」である。
- ・ハンディキャップとは、環境の不備によって作られる。
- ・福祉は住まいに始まり、住まいに終わる。
- ・自分の人生は自分で。
- ・バリアフリーからユニバーサルへ。
- ・常識はウソ。
- ・福祉という言葉も要らない世界へ。

（関谷 記）

## 第3回 快適住まい環境研究会フォーラムのお知らせ

第3回のフォーラムを、下記のように計画致しました。

今回は、スウェーデンの住宅環境に詳しい東北大学の外山先生をお迎えして、日本の住環境をどうすればよいか、皆で考えてみたいと思います。

お誘い合わせの上、ぜひご参加ください。

講師：外山 義(とやま ただし)先生  
(東北大学工学部建築学科助教授)

演題：「人生を最後まで歩みきるために  
—高齢社会のすまいとまちづくり—」

### <講師紹介>

1950年生まれ、'74年東北大学工学部建築学科卒業  
'82年スウェーデン王立工科大学で高齢者の住環境を  
テーマに研究を始める。

'88年王立工科大学博士号取得

'90年度日本建築学会奨励賞(論文)受賞

現在、東北大学工学部建築学科助教授

著書・「クリッパンの老人たち

—スウェーデンの高齢者ケア—

(ドメス出版 '90)

・「ストックホルムの建築」(丸善 '91)

・「スウェーデンの住環境計画」(鹿島 '96)

会場：新潟県立看護短期大学  
第1合同講義室

日時：'98年5月8日(金)  
(本学開学記念日)

午後1:30～午後4:00

主催：快適住まい環境研究会

### <問い合わせ先：事務局>

新潟県立看護短期大学内 快適住まい環境研究会(代表：杉田 収)  
〒943-0147 上越市新南町240番地

TEL：0255-26-2811(代) 0255-26-1170(直) FAX：0255-26-2815

E-mail: sugita@niigata-cn.ac.jp

平成10年6月30日

発行：新潟県立看護短期大学内・「快適住まい環境研究会」

(文責：水戸美津子)

## ◆ 第3回研究会フォーラムを去る5月8日に開催！！

東北大学工学部建築学科 外山義助教授により、「最後まで自分の足で歩み続けるために」というテーマで、スライドを使用しご自身の研究実践からのお話をいただきました。

以下は、先生がお話された内容の一部をまとめたものです。

- ・バリアフリーと言われるが、最大公約数的解決方法はない。
- ・すまい → 住宅と施設の両方を含む
- ・高齢者の側から、自宅から施設に移ることの意味を考える。  
在宅から病院 → 生命力がしぼんでしまったって感じ。  
プロセスで生命力がしぼんでしまったりする。  
主人公（障害者、老人）の声を聞いているか。

<人と住宅>

- ① 作り手と使い手が変化している。  
作り手はどんどん専門分化し、使い手はどんどんしろうとになっていく。
- ② 人生の長さ、サイクルが変化している。  
一生のうち25%の時間は家にいる。  
介護の意味の変化 → 生活の自立を支えること、生活を支援することへ変化している。

- ② 人が老いてゆくこと一人間の側が変化している  
年間2,000人位が住宅の中で死亡している（浴室、転倒）

<住まいとQOL>

- ・生命、生活、人生（生き甲斐）に住まいの質がどのくらい影響を与えるのか。
- ・住宅は住んでいて住まいになる。

<施設の中の4つの領域>

- ・プライベートゾーン、セミプライベートゾーン、セミパブリックゾーン、パブリックゾーン  
「人と出会いたいという意欲は、ベースが保障されて初めて出てくる」

<ノーマライズしていくことの意味>

ノーマライズされていくのは自分たちの方ではないか。高齢者の側からみていく視点が必要。  
「富山のおらハウス」作り手と使い手の接点——地域と風通しよくつないでおく施設。

＊ ＊以上がお話の一部でした。著書に「クリッパンの老人たち—スウェーデンの高齢者ケア」（ドメス出版 '90）、「ストックホルムの建築」（丸善 '91）等があります。

◆ 今回のニュース担当の水戸は、今年の4月から山梨県へ移動しました。まだ、県内の状況はよくわかりませんが、バリアフリーや住宅改造に関連した施設を少しずつウオッチングしています。その中から今回は2つご紹介します。

### 1. 「山梨県立介護実習普及センター（福祉プラザ）」

“高齢社会は、おとしよりや家族だけでなく県民みんなで支えあうもの”という考え方を広めるなかで、介護に関する知識や技術を学ぶことを目的に平成9年に建てられたもの。設備は①介護機器・福祉用具の展示：ここでは見て触れて試してみることができ、価格もついている。

主な展示品は杖・歩行補助具・車椅子、リフト、トイレ・おむつ、ベッド・マット・クッション、衣類・ねまき・靴であった。販売はしないが、相談でき業者を紹介してくれる。保健婦と作業療法士がいる。日常生活動作を助ける具体的な用具が多かった。展示品のいくつかはリースで、できるだけ新しいものに入れ替えていくとのことである。②モデルルーム：天井走行リフトを使用

した、居室から台所（可動式台所）、トイレ、浴室へと移動し、使用する方法を提案していた。介護機器・福祉用具展示の同じコーナーにあった。バリアフリーモデルハウスの簡略版といった感じだろうか。③介護実習室・調理実習室を備え実習できるような設備が整っている。まさに、大学の実習室のような光景か。④その他：各種講座を開催している。“介護の心を啓発する講座”“介護者を支援する講座”“関係者の資質向上をめざす講座”があり、看護大学の教員（看護系以外の教員も含めて）がかなり協力している。また、相談と情報提供として福祉用具や介護方法、在宅福祉サービスの利用方法などの相談にもなる体制ができています。

運営は山梨県社会福祉協議会がしており、この他に保健・医療・福祉・教育関係者や地域の人達も運営に協力しているとのことでした。

## 2. 甲府市障害者センター

この施設は、今年4月にオープンしたばかりでした。身体障害者福祉センター「かりん」と精神薄弱者通所授産施設「ポプラ」が入っています。身体障害者福祉センター「かりん」は1階にあり身体障害者ディサービス事業、ボランティア活動の支援、身体障害者関係団体の活動の支援を主な事業としていました。精神薄弱者通所授産施設「ポプラ」は、18歳以上の知的障害者の自立した生活を目指して、日常生活訓練や、授産活動を通じての職業的自立への訓練を行うとのことでした。1階に授産施設で作られた作品の展示と販売のコーナーと彼らが運営する喫茶室がありました。ただ、オープンしたばかりなのでまだ十分に活動するまでには時間がかかりそうな感じでした。設備はかなり立派なものでした。甲府市社会福祉事業団が運営していました。

\* 2つの施設を見学しての感想：施設設備の整備とともに運営面に関してはネットワークづくりが大切、ということを実感してかえってきました。私も新潟県から出てしまいましたが、今後とも違った視点からの情報提供が出来ればと考えています。

### ◆新しくメンバーになられた方の紹介

本年度になり、3人の方が新しくメンバーに加わり活動を一緒に行っています。新しい方の自己紹介をしていただきました。今後ともよろしくお願いします。

\* 小林恵子先生：三島郡は三島町の出身。

高校卒業後、学生時代を新潟で過ごした後は、相川・三条・新潟・十日町・新潟・上越と引っ越しの連続です。保健婦として療養者のお宅を訪問させていただく度に住宅というバリアにどれだけ健康が阻害されているかと実感してきました。でも、その頃、住宅環境はなかなか踏み込めないものと思っておりました。ところが、10年前に東京や神奈川の保健所等で住宅環境改善への取り組みがされていることを知り、是非、仕事として取り組んでみたいと思うようになりました。その後県内のあちらこちらで住宅改善の学習グループができ、そして、今、私たちに求められている役割は住民への啓発と必要とした人がいつでも、誰でも使えるような住宅環境のシステムづくりではないかと感じています。

\* 安田かづ子先生：青森県出身。

結婚以来8回の転居を繰り返し、それもアパート住まいばかりで、住まいに主体的に関わってこなかった気が始めていました。また、転校の多かった息子が「僕の故郷はどこだろう？」と自問するのをみて、住み方を考えたいと思い研究会に入りました。今後取り組んでみたいことですが、家族であっても、個人の空間はテリトリーとして大事にされるべきと思います。しかし、現在は、それがあまり尊重されていないように感じます。そこで、各個人のスペースの確保の必要性と、そこを他人が犯さないルール作りが可能かどうか考えてみたいと思っています。

\* 斉藤智子先生：柏崎市出身。

一言！：在宅で障害を持って生活している高齢者が寝たきりになりやすいのは、やはり移動の問題が大きいからではないでしょうか？高齢者や障害を持った方が、子供が、大人が本当に安全に安楽に暮らすことができる家とは、またそれを阻害している要因は何か、明らかにしていけるといいな、と思っています。

住ま研に入って住宅だけでなく周辺の住環境の大切さも痛感しています。これからは自分の住む街が本当に住みやすい街か、そういう目で歩いてみたいと思います。

平成10年 8月31日

発行：新潟県立看護短期大学内・「快適住まい環境研究会」

文責：(有)ハート1級建築士事務所 室岡耕次

\* 実例1：高齢者夫婦2人住まいのトイレ改造です。

< 要望 > 夫(76才)が脊柱管狭窄症により足が不自由な為、車イスで使用できるように現状トイレを改造したい。

< 改造内容 > 廊下床より4cm程上がっているトイレ床を廊下床と平らにする。  
現在の小便器、洋便器を撤去し、新たにウォシュレット付洋便器を設ける。  
トイレ内の両側に手スリを設ける。

< 対応方法 > 老健施設「くびきの」に一時入居しているので、施設内のトイレにて車イスから便器への移動を実際に見学し、本人にとって適切な手スリの取付け方法を探りました。

< 感想 > 住ま研で研究中の「トライハウス」の必要性を痛切に感じました。手スリの位置や型を決めるのに、とりあえず今ある設備を使い本人に確認しながら想像の範囲でしか検討できない為、果たしてこれが最適な状態なのか分からないからです。またこちらがいろいろと聞いても本人が恐縮してしまい、大体のところ妥協してしまうからです。  
なんとかして「トライハウス」の実現を!!

\* 実例2：次の2点をテーマとした住宅の設計です。

1. 現在社会的にも問題になっている、人体に有害な化学物質等が含まれている建築材料を、どこまで使わずに家を造ることが出来るか。
2. 建築主が初老(奥さんはもう少し若い)の夫婦2人暮らしの為、可能な限り自力で自分の住まいに住み続けられるようにしたい。

< 対応 >

テーマ1について

現在建築業界で一般的といわれている建築材料で、人体に有害な化学物質を含んでいる材料がいかに多いか改めて認識しました。一般的な木造住宅で、建方(柱、梁の構造材が組み上がった状態のこと)終了までが大旨、害な材料ですが、そこから建物が完成するまでは、経済効率だけを優先させれば、ほぼ100%有害といわれる物質を含む建築材料で家は造られてしまいます。

でも、その気になって探せば結構いろいろ安全な材料はあります。早い話が、壁に土を塗っているのが一般的だった頃の作り方に戻ればよいのです。ただし、少々コストアップになるのですが、それがどの程度なのかも含めて設計中です。

テーマ2について

高齢者対応住宅ということ、まだその年齢より少し手前の住人に対して、どのようにして話題にすればよいのか戸惑っていましたが、幸い奥さんの方からその関係の話が出た為、それをきっかけに打合せを展開出来ました。設計の考えとしては、今必要なものとそうでないものを分類した後で必要になるだろうものに対しては、その時点で症状を確認した上で、適切な対応が簡単に出来ることを前提にした設計を、考えています。

以上、実務からの報告でした。

## 『すま研』 in 長岡 見学会報告

( 文責：県立看護短大 斎藤智子 )

去る8月6日(木)に、『すま研』のメンバーと有志が集まり、総勢32名で、長岡市内および越路町の施設見学に行ってきました。今回は、その時の様子をレポートします。

見学場所： 長岡市 高齢者等対応型モデル住宅  
低床バス体験乗車  
長岡赤十字病院  
越路町 高齢者総合福祉施設 わらび園 (特別介護老人ホーム、在宅介護支援センター、  
デイサービスなど併設)

今回の見学会は、“住まい”と“住まい環境”について考えようと、県内では、先進的に低床バスの導入や市営の高齢者対応型モデル住宅の設置等に取り組んでいる、長岡市内の施設・設備を見学してきました。

昨年オープンした新長岡日赤やH8年3月に越路町に移転した「わらび園」なども、見学コースに入れ、少々盛りだくさんの見学会となりました。

それぞれの施設についての概要とそこでの感想についてまとめてみました。

- この施設は、モデル住宅と地区福祉センターの2つの機能を持つ施設で、福祉関係職員が、常時2～3名おり、いつでも住宅改造のほか福祉に関する相談を受けつけるような体制になっていました。

モデル住宅は、玄関の段差解消機(車椅子用リフト)をはじめ、階段昇降機、ホームエレベーター、移動用リフト、可動式調理台などの機器類やさまざまな介護用品が展示されていました。

このモデル住宅の建設には、1億2千万円もの費用がかかったとのことでしたが、1つ1つの機器類の金額を見ても、高額なものが多く、便利だからと言っても簡単には取り入れられない現実も見たような気がしました。

福祉機器はさまざま開発されてきてはいますが、それが本当に必要な人に有効に活用されるようになってきているのか、機能的にも経済的にも考えなくてはならない部分もあったように思いました。

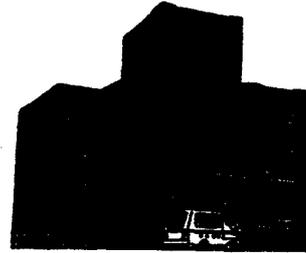
- 車椅子で参加のメンバーをはじめ、それぞれ低床バスを体験しました。今回初めて低床バスに乗るというメンバーがほとんどで、高齢者、障害者や子供などすべての人にやさしいバス!!と期待して乗車しました。

低床バスが走っているのは、市内循環線の一部で、通常のバスに混じって約40分～1時間に1本の割合で走っていました。バスは乗車口が、通常のバスより広くとってあり、乗車口の足元からスロープが手動で、出てくるようになっていました。内部は車椅子が1台乗せられるようになっており、車椅子での利用者がいると、乗務員が、スロープを出すところから車椅子を固定するまで、介助してくれるようになっていました。

車椅子でもバスに乗れる、ステップが低く乗りやすい、というのを実感することができましたが、①バスの停車の仕方によって低床のメリットがあまり生かされない場合もある。(歩道にできるだけ近づいたほうがよい)②車椅子で乗車した場合、スロープを出すところから車椅子の固定までの時間がわかりすぎると感じた。③車椅子が1台分しかなく、先に乗客がいた場合乗れない。等の問題点も発見しました。せっかくのすばらしいバスなので、もっと利用しやすいように、改善していけるといいな、と思いました。

- ・ 玄関は行ってすぐのホールの広さと明るさにまず驚きました！明るい雰囲気のホテルというのはいいものですね。院内全体を見学させていただきましたが、外来等の表示の工夫（大きさ、見やすさ）、雰囲気作りの工夫（植木、オブジェなど、採光）病室の窓の工夫（ベッド上で寝たままでも景色が見える）など随分ご利用者のことを考えた作りになっていることを感じました。

参加者の感想では、「医療の設備が整っているホテルという雰囲気」「Hospital」の語源である「Hotel」の意味が分かった」など、デザイン性、機能性を加味した病院に感心しました。



- ・ 高齢者総合福祉施設ということで、特別介護老人ホーム、デイサービスセンター、ショートステイ、在宅介護支援センター、デイホーム、ホームヘルプサービスなど福祉サービスを総合的に提供する施設になっていました。

老人ホーム部分を中心に見学しましたが、まず驚いたのが、「臭いがしない」ということでした。オゾン0.05ppm（規制値は0.1ppm）を常時全館に送ることにより、館内の脱臭・殺菌を行うというシステムを採用しているため、とのことでした。規制値以下とはいえ、オゾンの身体への影響はないの？という少しの疑問を持ちましたが…。

消臭対策と共に各室から中庭に出られるようになっている造りや採光、トイレ、洗面所の工夫など随分に入居者の居住性を考えた工夫がされていました。

ここには、一般の方も利用できる喫茶・レストランもありましたので、気軽に尋ねていくこともできるようでした。

というわけで、概略をレポートしました。

参加者の方には、それぞれ感想を書いていただき、ありがとうございました。

1日で4ヶ所という欲張り見学会だったため、各見学場所ともかけあしの見学となった感もあり、参加者の皆さん、多少お疲れ気味だったようです。

今回参加されなかった方も、された方もそれぞれ、関心を持ったところ、またゆっくり見たいところなどあったら、訪ねてみるのもよいのではないかと思います。



来年、また夏の時期に「すま研」メンバーらで、このような見学ツアーを開催したいと思います。

福祉に先進的に取り組んでいる市町村、「ぜひ、ここを見てみたい。」という施設などの情報・見学希望がありましたら、「すま研事務局」まで、ご一報ください。

併せて、「すま研ニュース」への投稿、情報提供などもお待ちしております。

すっかり秋の気配ですね。皆さん風邪などひかないようにお気をつけ下さい。





平成10年10月31日

発行:新潟県立看護短期大学内・「快適住まい環境研究会」

文責:安田 かつ子

## ◆◆◆ 音声による地理情報案内システム勉強会 ◆◆◆

去る10月1日 新潟大学の牧野先生が当研究会においでくださり、現在先生が開発中の福祉機器についてお話をしてくださいました。その内容を紹介します。

### ◆ 牧野 秀夫 先生 新潟大学工学部情報工学科教授

先生の研究内容

- ・福祉機器の開発・製作で、商品化(売れる商品)まで視野に入れたものである。
- ・現在、GPS(全地球測位システム)と携帯電話を用いた携帯型位置案内装置によって、音声による地理情報案内システムを提供することに取り組んでいる。

GPSを利用した当案内装置の概要(TVで放映されたものをもとに説明がなされた)

- 小型GPS——約 500グラムで、PHSの大きさ。電池は単4を 4 本程度。
- 音声情報は合成音でなされ、PHSからイヤホンで聞く。
  - ・今どこにいるのか知りたいとき、正面の建物がなにかを知り目印にすることができる。
  - ・音声は合成音であるため、外国語にも対応できる。
- 問題点
  - ・位置確認のための、デジタル化された地図(地域情報)が、各所に必要——利用できる地域を広げるためには、ボランティアによるパソコン打ち込みが必要。(機能充実の為にパソコンを携帯すると、13Kgの重量負荷がかかる。)
  - ・地図メンテナンスが必要
  - ・衛星を利用した位置確認のため主に屋外の利用となり、高いビルに囲まれたところや、アーケード下、室内では使えない。
  - ・誤差がある——例えば曲がり角の位置に50mの誤差が出ると、誤った方向に行く可能性がある。
  - ・道の状況(段差や穴)はわからない。

先生からのお話は、先端技術と福祉分野というお話で、とても有意義でした。会場には、視覚障害者の方もおみえになり、熱心に聞いておられました。

## 県立看護短大の大学祭でGPS体験!

牧野先生のご厚意でGPS装置をお借りし、「住ま研」学生が大学祭のイベントとして実際に使用してみることになりました。当日は、この機器に関連した説明、展示もする予定です。

その他に介護の実演、景品付きクイズなども企画されており、研究会メンバーが現在準備に励んでいます。

県立看護短期大学 [桜桃祭] 11月21日(土) 9:00~15:30

大勢のかたのご来場をお待ちしております

### ◆◆◆冬期に向けて、雪道の状況を考えてみませんか◆◆◆

住まいと環境を考えることの一環として、「希望する時に、希望する方法で、安全に目的地まで移動する」ための条件はどの程度整備されているのか、とくに降雪時はどうかを知る必要を感じ、道路行政関係者から冬期の歩道除雪についてお話を伺いました。

現在の行政の取り組みと、これから体験する今年の雪の状況から、冬期の歩道について考えていきませんか。

#### ◆上越市土木課補修係長 竹内 修 さんのお話(6月22日、7月28日の2回伺いました)

##### 1、除雪ネットワーク——毎年除雪計画書を策定する

- ・冬期道路交通確保除雪計画書
- ・冬期歩行者空間確保パイロット事業計画——雪道(ゆきみち)計画、歩道除雪計画  
歩道除雪機購入の補助を受ける為上越土木事務所(建設省)に毎年提出する

##### 1) 冬季道路交通確保除雪計画

①現在国・県・市がそれぞれの計画を持ち、実施している。国、県、市道共に、車道・歩道別の除雪計画が組まれている。

\*それぞれ、車道除雪をしているからといって、同じ場所の歩道除雪をすることはかぎらない。

②上越市内の国・県・市道全体の除雪状況を、総合的に検討し調節する機関はない。

##### 2) 歩道除雪計画

①現在(H9年)業者委託除雪 33・3Km、直営路線 15Kmの計 48・3Kmについて計画・実施。

全歩道の除雪ではなく、重点地区に限ってするため地域差がある。

小学校、病院周辺が主であるが、2年前から中学校周辺も計画に入れている

②除雪能力——業者委託＝除雪機借り上げ3台 貸与の小型ロータリー3台  
直営路線＝除雪機1台

③除雪時間に2種類ある。

- i 早朝7時30分までにする区間
- ii 日中～夕方までにする区間

この他に、当日の降雪状況に臨機に対応している。

##### 3) その他

①希望の町内会に小型ハンドロータリーを貸し出しており、昨年は13町内が貸し出しを受けた。自分たちの町内の除雪を老若力を合わせてやっていく過程は、ロータリーを御輿と見立てた冬のまつりといえないではなく、新しいコミニティーの創造につながっていくのではないかな。

②上越市には各種市民モニターの中に、除雪モニターがあり色々な意見、苦情が活発に寄せられている。

③交差点の雪の壁については、その区間の担当業者の処理態度にまかされている。今後、市でも除雪状況把握につとめる。

以上のような内容でした。7月28日は前夜記録的豪雨が有った後で、土木課は徹夜で道路状況把握に当たりとても忙しい雰囲気でしたが、係長さんには丁寧に対応して頂きました。

この冬「家から——希望する場所まで」の移動について、引き続いて考えていきませんか。

「除雪計画書」については、安田が持っていますので、ご覧になりたい方はどうぞお申し出ください。

#### 「住ま研」トピックス

上越市福祉のまちづくり条例検討委員会が、10月7日に発足して、委員長に当会の杉田先生が就任されました。任期は来年3月31日までです。ご意見等ある方はどうぞ先生までお寄せ下さい。

# 住ま研ニュース

第6号

平成10年12月18日

発行：新潟県立看護短期大学内・「快適住まい環境研究会」

文責：山際 和子

今年もあとわずかです。新しい年も、明るい希望のある社会となることを願っています。  
今回は、最近話題となっているシックハウス症候群についてお知らせします。

シックハウス症候群は化学物質過敏症とも呼ばれ、ここ1、2年ほどマスコミに取り上げられています。この問題は、オイルショックによって誘発された室内環境汚染問題、シックビルディングシンドロームの一つです。それまでのシックビルディングシンドロームは、建物の気密化による換気量の減少や、新建材やOA・HA機器の導入による新しいタイプの汚染物質の発生などのように、建物やその付帯設備や家具調度などといった建物、設備などのハード面の変化によって生じたものであるのに対して、シックハウス症候群は、そのようなハード面の変化に加え、住居者の体質や生活様式といった人間側の変化が大きな鍵となっている点が特徴です。

まだ研究例が少なく、定まった見解がでていない段階です。そうはいつても、数百はくだらないといわれる揮発性有機化合物やホルムアルデヒドに対してすべてをケアすることは不可能です。その中で最も有力な化学物質が、ホルムアルデヒド、トルエン、パラジクロロベンゼンなどです。

発汗異常・不眠・不安・下痢・心悸亢進・皮膚炎など幅広いです。

室内の化学物質の濃度を極力下げることに意外にありません。症状は通常の人が異常を感じる濃度の10分の1から100分の1程度の濃度でも発生するということがなかなか難しいことです。具体的には、ホルムアルデヒドなどの化学物質を含まない合板や集成材を使う・天然の無垢材を使う・内装材は化学物質を含まないものを使う・内装材を構造材に貼るための接着剤は化学物質を出さないタイプにする・計画的な機械換気をする、などです。

住宅部品PLセンター（電話 0120-668-066）・インテリアPLセンター（電話 03-5474-1071）・化学製品PLセンター（電話 0120-886-931）などがあります。

国としても厚生省・建設省・通産省・などがこの問題に対応をはじめています。

☆からだの科学 通巻第204号1999年1月号（日本評論社発行）を参考にしました



## 第4回研究会のご案内

下記の講演会を企画しました。先月、見附市消防本部と県建築士会三南支部見附ブロック有志の方でモデル住宅の模型が完成しました。救急のプロと建築設計のプロの共同作業でできた住宅は、安全とバリアフリーがドッキングした新しい形の住宅です。今回はこの住宅設計に参加された救急隊員の方より火災や救急事故から見た住まいづくりについて講演していただきます。皆さんでこの新しい住宅について考えたいと思います。

日時：平成11年1月14日（木曜日）午後4時10分から午後6時

場所：新潟県立看護短期大学 第四講義室

講師：見附市消防本部 警防課長 金井 良夫 氏

演題：「高齢者にやさしい住まいづくり」

### 第5回研究会のご案内（予告）

日時：平成11年3月4日（木曜日）午後6時から午後7時

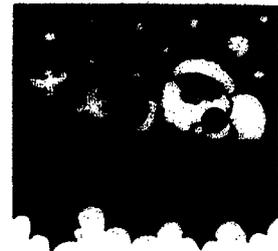
場所：新潟県立看護短期大学

講師：ユニチャーム株式会社 市川 真 氏

内容：おむつの種類・歴史

紙おむつの素材と機能

おむつのあて方技術のポイント など



### ひとこと

1年間の育児休業中にベビーカーに子供を乗せて外出しながら今までは感じなかった自動車の排気ガスの多さや道路の段差に気づきました。きっと車椅子を使用している方も同じ様なことを感じているのかしらと思いました。

最近、自宅の増改築の時に内装材のカタログをみましたが「ホルムアルデヒド除去」の壁紙のページはわずかでした。今後はどのようになるのでしょうか。（山際）

#### < 問い合わせ先・事務局 >

新潟県立看護短期大学内・快適住まい環境研究会（代表：杉田 収）

〒943-0147 上越市新南町240番地

TEL: 0255-26-2811 (代) 0255-26-1170 (直) FAX: 0255-26-2815

E-mail: sugita@niigata-cn.ac.jp

平成11年2月25日

発行：新潟県立看護短期大学内・「快適住まい環境研究会」

(文責：小林恵子)

\*第4回研究会を去る1月14日に開催しました。

テーマ：「高齢者にやさしい住まいづくり」

講師：見附市消防本部 警防隊長 金井 昌夫氏

日常の救急・火災出動体験から感じた疑問をもとに、救急事故の実態を新潟県建築士三南支部見附ブロック会に情報を提供し、平成10年3月に建築士会と合同の高齢者にやさしい住まいづくりについての研究会が発足しました。以下、講演の概要についてお知らせします。

平成7年から家庭内救急事故が救急出動全体の半数を超えた。中でも、高齢者の事故が目立ち、死亡率の高い風呂、トイレなどの密室における病気がらみの事故と、困った時に助けを求めにくい高齢者のみの世帯を考えると、現在、関心の高まっているバリアフリー住宅だけで死亡事故が防げるのか疑問を持った。

そこで研究会の中で消防側が提案したポイントは次の4つである。

- (1) 一刻も速く密室の異常を知る工夫と浴槽段差の改善
- (2) 食事中の窒息事故や様態の急変を見逃さないよう、いつでも家族と一緒に気軽にくつろげるような寝たきり者の部屋の工夫
- (3) 冷蔵庫やテレビなど大型家電を動かさない高齢者のために、トラッキング火災（トラッキングとは、電気コードのプラグを長い間コンセントに差し込んだままにしておいたとき、プラグの表面にチリやホコリが溜り、それに電流が流れて熱を発生すること）を防止するコンセント設置位置の工夫
- (4) 一人暮らしや高齢者世帯の安全を守る工夫
  - ア 来訪者や隣人との接点を増やす間取りや敷地通路について
  - イ バイタルサインの分かりやすい建物配置や間取りについて
  - ウ 緊急連絡通路の設置について



以上をもとに、建築士会との研究会を重ね、平成10年11月9日（119番の日）、プランの発表セミナーを行った。

（長年、人命救助に携わっていらっしゃる立場から、一人一人の住まいや暮らしに配慮した具体的かつ力強いお話は十分過ぎるほど説得力があり、取り組みの大切さを改めて実感させていただきました。また、最近TV等でも、高齢者の入浴中の病気や事故の特集もされておりますが、設備を含めた入浴の仕方を工夫するような働きかけが重要と感じました。）



\*上田市Iさん宅訪問記

昨年12月17日、住ま研メンバーで、脊椎損傷のため住宅改造されたIさん宅を訪問させていただきました。Iさんの居室には専用の浴室・トイレが隣接し、ベッドから天井走行リフトで移動でき、また、縁側から車椅子で直接居室に入れるよう車椅子昇降機も設置してあり、ご本人、家族の負担が軽減されるよう様々な工夫がされていました。しかし、改造にあたっては相談する窓口が分からず、時間もなく戸惑いも多かったということで、改造後、実際に生活されている様子を間近に見せていただき、参考になったと同時に考えさせられる訪問でした。（斎藤智子先生からの感想です）

## シックハウス対策

前回の「住ま研ニュース」に続いて、この話題を取り上げます。

新築の家に入居したりリホームしてから、どうも目や喉が痛い、頭痛や吐き気に襲われる…。建材や壁紙の接着剤などに多用されている揮発性有機化合物（VOC）による室内の空気汚染物質が引き起こす、そんな「シックハウス（病んだ家）症候群」が注目されている。

### 新潟市保健所で相談事業

シックハウスの「主犯」とされる揮発性有機化合物ホルムアルデヒドにより、健康被害を受けたと感じる人を対象に、1998年度から相談事業をスタート。職員が相談者の家を訪問し簡易検査方式で濃度測定をしている。昨年暮れまでにあった20件の相談では目や喉への刺激、アレルギーを訴える声。20件の相談のうち、ホルムアルデヒドの室内空気基準（WHO：0.08ppm）を測定値が超えたケースは14件有り、中には5倍近い家もあったという。発生原因を証明することは難しいが、壁材、家具に使われた揮発性有機化合物やシロアリ駆除剤など建材以外にも原因はあるらしいという。

対策として、「原因を取り除くことが第一」で家を建てた業者にどんな建材を使ったか聞き「思い切って原因の壁紙をはがすこと」も必要であるが、もう一つは「換気」。「症状がなくてもこまめな換気」が重要である。（平成11年2月9日新潟日報より抜粋）

## 山形県飯豊町での住宅改良ヘルパーの養成

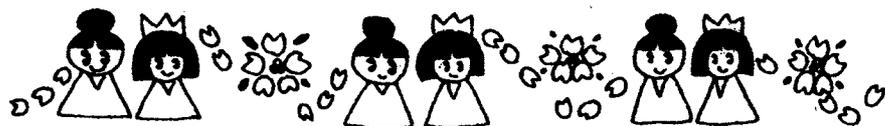
（住宅改良ヘルパーとは耳慣れない言葉ですが、山形県飯豊町独自の取り組みを紹介します。）

保健福祉医療のチームの中で、住宅改良に関する相談助言を適切に行ってくれる建築関係者が必要ということから、町が公募した1級2級建築士に対し、平成8年度に住宅改良ヘルパー養成講座を開始し、平成9年度から4人が非常勤職員として活躍している。その具体的な業務内容は、身体障害者・寝たきりの方などの日常生活用具給付事業や住環境に関する相談、給付後のメンテナンスなどとなっている。たとえば、入浴補助用具の申請があった場合は、実際に保健婦と住宅改良ヘルパーとで訪問し、入浴動作を見せていただく。用具を給付して済むのか、それともホームヘルパーなどの人と用具を組み合わせるのかをケアカンファレンスで検討。その結果、用具で大丈夫な場合には、スタッフがオーダーでその方にあったものを制作することもある。

（以上、保健婦雑誌（医学書院）1998 12の特集「健康な暮らしを守る住まい」から抜粋）



## ぶらり東京！！住ま研お勧め処



\*東京都福祉センター（JR飯田橋駅すぐ）

財団法人東京都地域福祉財団が福祉機器の利用によって、高齢者や障害をもつ人達の自立と社会参加を促進するとともに、介護者の負担が軽減できるよう、東京都における福祉機器のサービスの中核として設置され、福祉機器の情報提供・展示相談、区市町村・民間事業者への支援を行っています。（2月に山際先生が見学されています。）

\*東京江戸たてもつ園（JR武蔵小金井駅からバス5分）

昔から住まいはどのような変遷を経て、現在のような住まい方になっているのか、いろいろな建築様式の住宅の復元・展示から振り返らせてくれるところです。

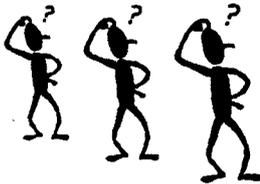
（昨年8月小林（恵）が見学しました。）

第5回研究会のご案内：平成11年3月4日（木）午後6時～7時

テーマ：紙オムツの科学

講師：ユニチャーム株式会社 市川 真 氏

関心のお持ちの方はご参加ください。（無料）



発行：新潟県立看護短期大学「快適住まい環境研究会」

(担当：「学生部」地域看護学専攻科 水嶋和美)

## ダイオキシン ～畑にトウモロコシは植えられるのか～

「所沢のほうれん草」は売れるようになったのだろうか。あの事件以来、「ダイオキシンは、ポリ塩化物質（主にプラスチック製品）を家庭焼却程度の低い温度で燃やすと発生する。」とが、「ダイオキシンを含む環境ホルモンは、精子の数の減少や、子宮内膜炎の原因になる。」といった情報が盛んに報じられた。そこで、今回は「快適」の一步手前、環境の「安全性」という観点からダイオキシンについて調べてみた。

### 《ダイオキシンの害ってどんなもの？》

\*()内の数字は参考資料のページ番号です。

ダイオキシンは飲食・接触・呼吸によって体に入り、主に肝臓や脂肪組織に蓄積される。また、母親の胎盤・母乳から子どもに移行することが分かっている。有害作用としては、肝機能の低下（だるい）・免疫機能の低下（病気に罹りやすい）・ホルモンバランスの崩れ・クロロアクネ（皮膚の美観）・学習能力の低下・中枢神経の障害が、懸念されている。こうした作用は、生物の種類・生活環境等によって異なるため、動物実験だけでは分からないが、ベトナム戦争で使われた枯れ葉剤による影響調査から、催奇形（例：ベトナムちゃん・ドクちゃん）・発癌性は実際に認められている。(p534~538)

### 《普通に生活してて大丈夫なの？》



今のところ国では、健康を保護する上で維持されることが望ましいレベルとして、「健康リスク評価指針値 5pg/kg/日(体重1kg 当たりの1日摂取量=5ピコグラム)」を設定し、さらに指針値を低減していくとしている。(1pgは1兆分の1g) また、同じ条件で検査値を比較できるよう、調査方法のマニュアルを作成し各地の調査を進めている。ちなみに国内の平均暴露量は 0.3~3.5pg/kg/日で、高い値が予想されたゴミ焼却施設の間近でも 1.8~5.1pg/kg/日であった。(p546~548)

### 《ダイオキシンの汚染状況を調べたい！》



最近、相母から「隣の畑から緑色の水が流れて来ている。どうやら隣の家の人が、いつもゴミを燃やしている所からみたいんだけど、トウモロコシを植えてもいいかね。」と相談された。そこで私は、市役所の生活環境課に相談をし、(財)上越環境科学センター (TEL:0255)43-7664 というところを紹介して頂いた(杉田先生からも紹介して頂いた)。連絡をすると「ダイオキシンの検査は1サンプルで30万円~で、期間は1カ月かかる」ということだった。また、「結果が出ても、国のダイオキシンについての基準が暫定的なものなので、結果が出ててもどうこうできない。」ということだった。ちなみに検査のための助成制度も無いという事で、検査はあきらめた。今、その畑には花の苗が植えられている。

“環境ホルモン” “ダイオキシン” に敏感な私たちですが…、皆さんの家庭ゴミの分別はきちんとしていますか？「私の近所は、「ビニルゴミ」位いなら、まだバンバン燃やしてるよ。」なんて話を聞きました。また、「ゴミの分別や出し方に關心を持ってもらおうと、収集所の立ち合い管理を町内持ち回りに、それもあるべく家庭内でも毎回運う人に出てもらおうという取り組みを始めた。」という話も聞きました。

“私たちにできる事・すべき事”をもう1度考えて見ましょう。

(参考資料：1999年度版産業と地球環境/政府関係資料集)

## 第4回

# 快適住まい環境研究会

## フォーラム

### 特別講演

「看護短大の教員・学生にぜひ伝えたいこと」

講師：黒岩 卓夫 先生

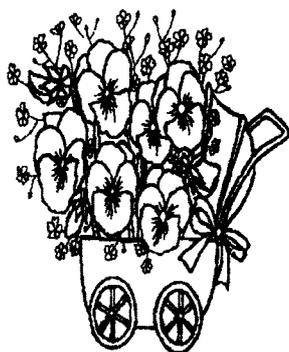
(大和町萌気園診療所所長)

日時：平成11年5月8日(土) 本学開学記念日

午前10時から12時

会場：新潟県立看護短期大学 第1合同講義室

参加費：無料 どなたでも参加できます。



#### 講師プロフィール

昭和12年長野県に生まれる。東京大学医学部卒、ゆきぐに大和総合病院院長を経て現在浦佐萌気園診療所所長。新潟では地域医療医療・保健・福祉の一体化を実現、大和方式と呼ばれる。現在、全国地域医療研究会代表、南魚沼郡医師会長、在宅ケアを支える診療所全国ネットワーク代表。

主な著書に、地域医療の冒険(日本地域社会研究所)、医者の子から7人の子どもたちへ(教育史料出版会)などがある。

介護保険の導入に伴い、**「一般のかたにもぜひお伝えしたい」**講演です。

\*当日、黒岩卓夫先生の書籍を販売いたします。

主催：快適住まい環境研究会

(紙面作成：「学生部」看護学科3年 青柳恵子)

平成11年6月28日

発行：新潟県立看護短期大学「快適住まい環境研究会」

(文責：杉田 収)

皆さんお変わりありませんか。快適住まい環境研究会（住ま研）の近況報告と除雪についての一つの意見（オピニオン）を提示させていただきます。

演題は「看護短大の教員・学生にぜひ伝えたい事」ですが、黒岩先生がこれまで地域で実践してこられた医療・福祉のお話しと今後の在宅医療の方向が主な内容でした。大勢の住ま研研究員の皆様からも御参加頂きました。ありがとうございました。当日は看護短大の教員・学生を含めて55名の参加者でした。フォーラムは齋藤智子看護短大助手（住ま研幹事）の総合司会のもとで齋藤学長より黒岩先生をご紹介頂き、小林恵子看護短大講師（住ま研幹事）の司会で進められました。

**視野の広い看護婦・看護師をめざして欲しい**これが黒岩先生の講演の核でした。参加した短大の教員へも同じ想いでの講演と受け止めました。講演の流れは、ほぼお配りしたレジメのとおりですが、注目しました点は医療と宗教を考える活動です。人生の最後を心安らかに迎えられるための宗教の役割を考えてみる必要性を話されました。看護学生の教養の一部に「生と死を考える機会」が必要と思いました。

その他「医と食と農」のこと、「医療は誰のためにあるのか」という基本的な姿勢など、多くを教えて頂きました。

以前にもお知らせしました「自分のいる場所を知る装置(GPS 装置)」の利用法を新潟大学工学部の牧野研究室と共同研究が始まっています。遙か上空の人工衛星3個の情報から、地球上の自分の位置を緯度と経度で正確に知り、そこに地上の地図を重ねて自分の位置がわかるものです。私達の仕事はコンピュータに必要な地図情報を打ち込むことです。先般牧野先生と教室員の皆様が看護短大にいられて打ち込み方を教えて頂きました。これから実際の打ち込み作業が始まりますと大勢の人手が必要と思われます。地図上に、いかに細かに良い情報を書き込むかによって本装置の有用性が決まります。学生部員とともに、手ぐすねひいて牧野先生から次ステップの連絡を待っています。

快適住まい環境研究会は新潟県より研究費を頂戴しています。それで年1回著名な講師をお招きしてフォーラムを開催し、また研究員の通信費、旅費の一部補助、書籍の購入など、当研究会を支える重要な資金になっています。例年40～50万円の研究費です。住

ま研の活動は毎年報告書を作成し公表しています(新潟県立看護短期大学紀要 第2巻、115-119, 1997, 第3巻、111-117, 1997, 第4巻、185-189, 1998)。今年の第4報の報告書は安田講師が担当です。他に原著論文を発表(新潟県立看護短期大学紀要第4巻、29-36, 1998)しています。今年も今までの住環境に関する勉強・研究をまとめて論文にしたいと計画しています。

快適住まい環境研究会のホームページを近く更新します。関谷教授から担当して頂いています。御期待下さい。ホームページアドレス：<http://www.niigata-cn.ac.jp/kaiteki>

#### お願い

車椅子で生活できる貸し住宅(バリアフリー住宅)を探しています。家族は3人です。上越市内が希望です。情報を住ま研事務局までお知らせ下さい。

#### オピニオン

##### 除雪車による道路除雪後の玄関先の雪

夜中に雪が降ると、朝早く除雪車の音がして眼がさめます。そしてスコップを持って家を出て除雪を始めます。道路の雪を除雪車は左右に押しつけて行きますから、各家庭に入る通路は雪で塞がれます。人も車も出入りできないため、どの家も自分の家の前の除雪をせざるを得ません。

雪の上越市ですから、各家庭では十分な雪対策を行なっています。対策の主な方法は地下水をくみ上げ、それで消雪します。従って各家庭の屋敷内の除雪は自己努力で何らかの対応をしています。しかし問題は各家庭と公共の道路の境目の雪が問題です。もっと正確に言えば、公共の道路の雪を各家庭の入り口に押し付けた雪が問題と思います。

除雪車が除雪した後の雪処理は、大変な肉体労働です。たいていのサラリーマンにとっても出勤前の大仕事です。この除雪作業は何歳まで続けられるのでしょうか。老夫婦2人の家が増えています。定年を迎えられた隣家の御夫婦は、消雪用井戸を2本用意され、自宅の消雪は万全なのですが、除雪車の後はやはりスコップを持って対応せざるを得ません。除雪車による除雪後の公道上の雪処理は自己努力の範囲外であります。しかし除雪車で除雪してもらわなければ車は使えず、日常生活が成り立ちません。従って今後除雪方法の見直しが必要に思います。公道の除雪が適正に行われないと、いくらバリアフリーの住宅を建てても、雪が降ったら家に閉じ込められます。

---

快適住まい環境研究会事務局

〒943-0147 上越市新南町 240 番地 新潟県立看護短期大学内 TEL: 0255-26-2811,

FAX: 0255-26-2815 E-mail: [sugita@niigata-cn.ac.jp](mailto:sugita@niigata-cn.ac.jp)

---

平成 11 年 8 月 31 日

発行：新潟県立看護短期大学内 「快適住まい環境研究会」

去る 8 月 2 日(月曜)、住ま研主催の見学会が行われました。見学会参加者一行 18 名は、記録的な猛暑の中、北陸自動車道を一路、富山県宇奈月町の特別養護老人ホーム「おらはうす宇奈月」を目指して、ひた走りました。

この施設は京都大学の外山 義先生の設計により、1994 年 6 月に竣工したもので、公私空間に特別の配慮がなされ、全国的に見てもきわめて特徴的な他に類のない施設です。昨年行われた住ま研の第 3 回フォーラムでその内容の一部が外山先生から紹介されました。そこで今回のニュースでは、見学者の皆さんから、その見学の感想を一言述べていただき、行けなかった人たちにも「施設のあり方」、「人としての生き方」について考える機会を……(関谷)

sumaken sumaken

## 「おらはうす宇奈月を観て」

新潟県立看護短期大学 杉田 収

見学に出かけるにあたって、「自分がそこで生活したいと思うか」を評価の視点にした。外山 義先生(京大工学部)が設計された特別養護老人ホーム「おらはうす宇奈月」の先進性は ① 我が国の厚生省が認める規格を越えた敷地面積であり、個室方式である、② 生活用具持ち込みの自由等がある、③ 自分の身の置き所を含む 4 つの生活空間がある、と考えられた。

「おらはうす」の掲げた理念は現代日本の最高レベルのホームである。しかし残念ながら私はそこに永住したいとは思えなかった。

姥捨て山を脱却して「おらが家」を理念どおり

に生活している人は何人もいないように見受けられた。ホームで見かけた人々には「残りの人生を楽しんでいる様子」は窺えなかった。

人間にはホームに適合できる人と、できない人がいて当たり前と思う。選択肢には「いつまでも自分の家で生きたい」があって良いだろう。それを支える住宅と社会体制が求められている。「生き生きと生きる」には家族や知人との絆が大事と考えた。



sumaken sumaken

## おらはうす見学を終えて

上越市西城町 草間 マサノ

高齢者になって家庭内の諸事情からホーム入所を余儀なくされた時、今までの生活、思い出、そして人間としてのほこりを捨てなければホームでの生活は出来ない、と思いつけていました。

今回の特養老人ホーム「おらはうす宇奈月」見学は、そんな思いを見事に覆されました。リゾートホテルと見まごうばかりの施設設備、しかしそれ以上に浴室のチェアーインバスのような羞恥心と安全性を考慮した機械の導入、個室の生活用具の持ち込みの自由等に見られるような人間の尊厳

を守った「おらはうす」=我が家でした。

ご紹介された入所者の居室はお二人の趣味の持ち方や人間性を反映したそれぞれの個性あふれるものであり、生命力あふれた笑顔がすてきでした。家族の中にあっても淋しさや孤独感は存在します。しかし職員では慰められない家族の愛がほしいのも事実です。町の中心地にあつて家族の面会率も多いことも魅力の一つでした。

昨年見学の特養老人ホーム「わらび園」の様子を思い浮かべながら帰途につきました。

## 「おらはうすを見学して」

長谷川興業株式会社 長谷川正道

自分の家を意識づける「おらはうす」と付けられた名前は越中おはら節の雰囲気も感じられ中々良いと思います。建物は京都大学の外山教授の設計で個室、小家族、小グループ、公共の四つの空間に分割され又融合し、どこからでも見通せる様に部屋が配置され、50床の規模にしては十分な余裕のある空間が広がって居り、今迄にない理想的な施設と思います。又個人の自由を尊重した運営もすばらしいと思います。

高齢に対する障害が人によって違いますので、このような公共施設を考えるに当たって標準をどこに置くかと言う事は大変むづかしい事と思います。トイレ一つを考えても手スリの位置、手スリの種類によって大変都合の良い人、場合によって

は障害になってしまう人、介護を必要とする場合あまり必要ない等、千差万別です。又住人の方々を見るとどこかさびしげな感じのする人も見受けられます。

これからの住まい造りには各人の違った障害に合わせうまく対応出来る様にするにはどのような準備をしておけば良いか皆様で智恵を出し合って、それを織り込んだ住まいの提供をして行く事により一日も長く家族と一緒に過ごせる事をめざし、出来ることなら施設での生活はなるべく短くならないものかと願って居ります。



sumaken sumaken sumaken sumaken sumaken sumaken sunaken

## 「おらはうす宇奈月」に見る理想と現実

ハート1級建築士事務所 磯田一裕

「おらはうす宇奈月」の入所者は、恵まれている。見学会に参加した私の素直な感想である。

実際、ここで生活する方々にとって本当に幸せかどうかは定かではないが、少なくとも介護に当たる職員の姿勢も、施設の内容も入所者にとって何が必要か? どのような空間が安らげるのかを一番に考えて接し又、建設されているように感じられた。そう感じさせる理想が、ここにはあった。

この施設の最大の目標(理想)は、従来の「老人ホーム」というイメージからの脱却であろう。すなわち、今までどうしても拭えなかった「老人の収容施設=姥捨」というイメージから、入所者1人1人にとっての「第2の自分の家=おらはうす」へ、生まれ変わろうとしている点である。

建築的見地から具体的に言うと、四段階の空間領域からなる生活空間の創出である。今まで多くのこれらの施設は、プライベート空間とセミパブリック空間しか存在しなかったが、ここではまず全室個室(①、プライベートゾーン)という画期的な決断を行った。そしていくつかの個室をグルーピングし、各個室の前空間(居間空間と呼んでいる)を設け、家族的領域(②、セミプライベート

ゾーン)を創り出した。更に、入所者共同空間である③、セミパブリックゾーンの外側に外部社会の人たちに開かれた④、パブリックゾーン(在宅介護支援センターや、デイサービスセンター)を付加している。この、より細やかな段階的空間構成が、自分の居場所をつくり、小グループ=家というコミュニティに発展していくことが、期待された。

しかし現実には、個室化による自分の居場所づくりには成功したが、各個室前の居間空間(セミ・プライベートゾーン)は、有効に利用されているとは言い難い。又、小グループ化による自発的コミュニティの形成も、未発達であった。

これは建築において全て解決できる問題ではなく、入所者自身の気持ちの持ち方や、施設運営のあり方などとも関連する問題で、建築の考え方が否定されるべきものではない。

今後、介護保険の導入に伴い、従来型の収容施設は淘汰されていくことは確実で、「おらはうす宇奈月」で目指した理想を現実とする為に、建築(ハード)と運営(ソフト)の融合が必要である。

平成11年11月4日

発行: 県立看護短大内「快適住環境研究会」

〒〒: 県立看護短大 青森

秋も深まり、ずいぶん冷え込む日も多くなってきました。だんだん冬が近づいてくるのだと思うと憂鬱に感じる今日この頃ですが、皆さまいかがお過ごしですか。

この10月より、介護保険制度がいよいよ動き出し、申請、認定審査がはじまりました。それを機に、『介護』が注目され、関心が高まっています。新聞でも介護について様々な特集記事が載っていました。今回の住ま研ニュースでは、その中で、気になった記事を中心にレポートします。

## ある新聞記事より

11/17の朝日新聞にショッキングな記事が載っていました。

事件の概要は、

『『死のうや』、寝たきりの母(88才)に息子(48才)は声をかけた。母は『いいよ』と言って目を閉じた。息子は母を絞殺し、自分も自殺しようとしたが決心できず、自首した。』というものでした。

事件は、今年1月に起きたもので、今回新聞に載っていたのは、その裁判の記事で、承諾殺人が適用されたというものでした。

毎日新聞にも関連記事が掲載されており、その事件の背景をレポートしていました。

息子は、4年前から病弱な母親と2人暮らしで、母親の面倒を見ながら働いていたが、母親の世話で、仕事も休みがちになり、リストラで職を失った。入浴サービスだけは受けていたが、その他の一切の介護、家事は息子が担っていた。母親の年金と自分の貯金を食いつぶしての生活には限界も見えた。職探しのため、母親を老人保健施設に預ける事が決まった矢先、母親が自宅で転倒してけがをしまい、再度の入所判定の結果、入所は見送られることになった。

その結果を息子は、どういう気持ちで受け止めたのか。その直後、事件は起きた。

… 息子は、裁判の中で、つぶやいたそうです。「おふくろにすまないことをした。介護を一人で抱え込まなければ、こんなことにはならなかった。」

過ぎてしまったことに、「～していれば、～だったら」はありませんが、「もし、職を失っていなかったら」「もっといろいろなサービスが利用できていたら」「転倒してけがさえしていなかったら」「老人保健施設に入所が認められていたら」など、考えずにはいられませんでした。

この事件は、ほんの一例で、その他にも「夫が寝たきりの妻を殺害」「障害を持つ子どもの将来を悲観して老母が息子を殺害」など、時々新聞記事を見かけます。新聞記事にはならないけれど、高齢者の虐待は、あちこちで起きているようです。

経済的な基盤、社会的サポートなしでは、介護は続けられないと思います。

いつまで続くかわからない介護をやりながら、生活(衣食住)していけるのか、という不安を抱えて、一人で介護を続けていくなんて…。この追い詰められた生活を想像できるでしょうか。

## ぼけ老人と家族への援助をすすめる 第15回全国研究集会に参加して

先日10/31に、上越市で行なわれた『呆け老人をかかえる家族の会』主催の全国研究集会に参加してきました。介護保険のことも話題になっていましたが、ある発表の中で、「今の高齢者はお金を持っていると、よくマスコミなどで報道されますが、自分は活動していて、それは一握りで、そんな実感は全くありませ

ん。要介護度5と判定されても、実際サービスを利用するときには、支払意志によって、自由にどうぞ。では、制度的にどうか。」とおっしゃっていました。その他、実際の活動を通しての介護保険の問題点も指摘されていました。

また、実際に痴呆・寝たきりのご両親を介護されている方の発表では、介護の過酷さ、身体的にも、精神的にも追い詰められていく現実を示されました。その中で、ご本人の気持ちを救い、支えとなっている家族の会をはじめとする周囲のサポートの存在の大きさを改めて感じました。

## 雑感

今、世間では、介護に関心が集まっていますが、本当に必要な人に光は当てられているのでしょうか。

障害を持ちながらも、積極的に、上手に社会福祉サービスを利用して、生き生きと生活されている高齢者、介護者がいらっしやる反面、介護を抱え込み、心身ともにギリギリの生活をしていらっしやる方もいます。

介護は、介護する方にもされる方にも、大なり小なり様々な、身体的・精神的・経済的負担・不安を生じさせます。

このような負担・不安を家族介護だけに強いるのではなく、社会全体で介護を支えていこうというのが介護保険の主旨ですが、その趣旨に反するような様々な問題が山積みのようです。

つい最近では、介護保険料の徴収凍結、家族介護手当支給の問題など、4月からの制度開始を揺るがすようなニュースが流れています。

介護保険を含め、日本の介護はこれからどうなっていくのでしょうか。

今回、10月分1ヶ月間の介護に関する新聞記事を3社分、ちょっと集めてみました。このニュースには、ぜんぜん書ききれませんが、日本の介護をめぐる現状、問題点が提起されていました。

介護こそ、明日はわが身です。『介護するとき、受けるとき』自分自身どうするか、社会全体ではどう支えていくか、一人一人が真剣に考えるときがきている、と思います。

## 県立看護短大 大学祭『桜桃祭』のご案内

来る、11月20日(土)に県立看護短大では、大学祭『桜桃祭』を開催します。  
『快適住まい環境研究会』では下記のような企画を致しました。皆さまお誘い合わせの上、ぜひお出かけください。

**桜桃祭 : 平成11年11月20日**  
**午前9:00 ~ 午後3:30まで**

[学生部]

### 『かつようして、いかして、ごらん』

をテーマに、介護保険を中心として、寝たきりにならないように、病気の予防や住みやすい家について考え、発表していきたいと思えます。毎年恒例(?)の劇も上演予定ですので、ぜひお越し下さい。

[全体]

- ・以前、住ま研ニュースでも紹介した、GPS(全地球測位システム)を用いた位置案内装置等の展示・デモンストレーションを行ないます。(新潟大学工学部の牧野先生らが来て下さいます。)
- ・上越地域の風土に合わせたバリアフリー住宅模型と設計図の展示  
(皆さまからのご意見もいただきたいと思っています。)
- ・医療福祉機器・介護用品の展示(福祉車両の展示・試乗、電動車いすの試乗、ドリップアイの展示等)
- ・ケアマネージメント・プランニングソフトの紹介(要介護度判定から介護サービスのプランニングまでできるソフト)

\* お待ちしています \*

初冬を迎え、日々肌寒く感じられる今日この頃ですが、寒気にも負けずに元気にお過ごしのことと思われます。ついては、年の瀬も押し迫り何かと気忙しく感じられる頃となり、又、このような折りに追い討ちを掛けるように今世紀最後の難関とも言うべき、『Y2K』コンピュータの西暦2000年問題の壁にぶつかる事になってしまいました。皆様もご存じの通り、マスコミ関係でも大きくその問題を取り上げているようですね。

さて、世間話しはこれくらいにして、私達が、日常生活の中であまり意識せずに捨てている『ゴミ』について話をさせていただきたいと思ひます。

私達を取り巻く環境の中には、種々様々、多種多様なものがただ単に『ゴミ』という一言でかたづけられているものが散在しているように思ひます。私達の「テーマ」でもあります『快適住まい環境研究』に於いても、その『ゴミ』を問題視しなければ、いくら“住まい”にこだわっていても生活環境が脅かされては、快適な居住空間は生まれ得ないのではないのでしょうか？

私達が知っている『ゴミ』にはどんなものがあるのかなあと思ひて、大きく分けてみますと、一般ゴミ（生活廃棄物）と産業廃棄物と呼ばれるゴミがあります。

まず、一般ゴミについて考えてみますと、「生ゴミ」やら「紙屑と呼ばれているもの」のような燃やせるゴミや、「ペットボトルのようなプラスチック製のもの」または、「発泡スチロールのような樹脂製のもの」などなど……他にも「空き缶類では、スチール製とかアルミ製の物と言われている金属製のもの」があり、それらは燃やせないゴミとして回収され、「リサイクル」というかたちで再生されて、姿を変えたり、変えずに私達の目の前に現れてきています。あ、そうそう「てんぷら油のような油性のもの」や「空き瓶のようなガラス製のもの」もそうですね。ただ、「乾電池のようなもの」はどうでしょう？ やはり危険物？ それとも。…！

このような事は、私達の誰もがみんな知っている事ですが、意外と意識せずに不要なゴミとしてゴミ箱の中にポイポイと捨ててはいないのでしょうか？ 又、“リサイクル”と言う点で考えてみても、私達は今まで何も考えずにゴミというだけで、捨ててきたために大きな社会問題『ゴミ問題』につながったのではないのでしょうか？ そういえば、リサイクルできるものが他にもまだまだたくさんあるように思ひますし、もっと『ゴミ』というものを意識し、種分けしてリサイクルにつながるよう努めたいと、私達は日々考えて行かなければならないと思ひます。先程前文に掲げました燃やせるゴミの『紙屑』なども「ダンボールや新聞紙」と同様に“再生紙”というかたちで既にリサイクルされておりましたね。…

さて次ぎは、今や大きな！多きな？『社会問題』となっています「産業廃棄物」という厄介な『ゴミ』についてですが、皆様はその言葉をどのように捉えていますか？

ただ、「産業廃棄物」といっても様々な廃棄物があります。おおまかではありますが、たとえば一般の家庭から出される“粗大ゴミ”といわれている家具やテレビ、冷蔵庫に洗濯機などがありますし、病院などから出される“医療用廃棄物”といわれているもの、他に、いろいろな会社から出される“企業廃棄物”といわれているものが、毎日のように吐き出され、処分されています。しかし、考えてみると、このような廃棄物はどこで、どのように処分されているのかと、最終処理をしているところを見たいという想いにかれます。今、世間で騒がれている“企業廃棄物”の中でも一番恐れられている、“放射性廃棄物”（核廃棄物）については、皆様、どのように、どんなふうに見え止められていますか？……。いくら話しても、つきない『ゴミ』の話ですが、こんなゴミが何気なく暮らしている私達の生活を脅かしているのではないかと思います。

このたびの話のまとめとして、動物も、植物も、そして私達人間も、生活を営んでいる以上、なんらかのかたちで何かを排出して生きているわけですから、『ゴミ』とは縁が切れないのは当然の事だと思いますが、昨今、人間の出すゴミは生態系をも揺るがす環境破壊につながっているといわれていることは、文明社会に生きている私達なら誰でも知っていること。私達に出来る事は、せめて一人ひとり、身のまわりから出てくるゴミを思い、考え、少なくするよう努力すべきではないでしょうか？「必ず出来るはず」と信じたいものですね。最後に、“より快適な住まい”は『よりよい環境から！』と思っています。皆様は『ゴミ』についてどう考えています？……。

#### 住宅見学のご案内

『人にやさしい住宅』が新築されました。是非、この機会に見に行かれてはいかがでしょうか。一見の価値はあると思います。皆で、おもいきり評価してみましょう。

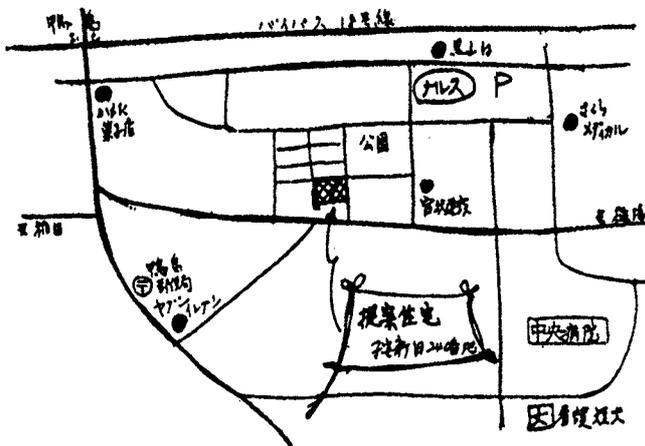
参加希望者 多いに募る！ 集まれ我友。

来たる 平成11年12月23日（木：天皇誕生日）祝日

午前10：00 ～ 午後4：00まで

集合場所：上越市子安新田240番地（県立看護短期大学 教授 杉田 収 宅）

#### 現地ご案内略図



お問い合わせ先

Tel : 26-8528 (杉田)

: 26-2811 (斉藤)

# 住ま研ニュース

Vol. 2 (6) 通巻13号  
平成12年2月7日

## 私自身の3年間のまとめ

快適住まい環境研究会学生部・前代表 青柳恵子  
(新潟県立看護短期大学3年)

県立看護短大に入って3年が過ぎようとしています。すま研に入ったのも入学してすぐでしたから同じくらい経ってしまいました。今はすま研学生部代表の座を退き、隠居生活を送っています。そこで、この3年間の振り返り、すま研と私について考えてみようと思います。

1年生。何もわからないまま放課後の空腹からお菓子につられ、いつのまにか入部した「快適住まい環境研究会学生部」。フォーラムやモデル住宅見学を通して徐々にすま研の偉大さを感じました。個性豊かな先輩との出会い、毎回の定例会が楽しみでした。

2年生。形の上では、サークル代表を務めました。3年生のサポートなくして、11月の文化祭は成功しなかったでしょう。1年のときは怖くて(?)近寄らなかった先生の研究室にも頻りに足を運ぶようになり、貴重なお話をうかがいました。

そして3年生。引き続きサークル代表を務めることになりました。4月から半年間続く病院実習と同時に文化祭の準備を進めていくのは至難の技でした。今考えるとどうやって乗り越えたのか不思議です。このことで、人間やる気になればなんでもできると思いました。

やはり、3年の文化祭が一番印象に残っています。「介護保険」をテーマに研究に取り組みました。学生部研究会員の努力の証として、介護保険制度についてまとめた「読んで見て帳ダイ」と言う冊子を残すことができました。冊子について反省点もたくさんありますが、今後のすま研に活かしてもらいたいと思っています。また、寸劇「介護保険とぶり大根」も成功におさめることができたように思います。劇は、すま研文化祭の恒例となりつつあるので、続けて欲しいと希望しています。

「『すま研』ってどんなことしているの?」これは、友人からよく聞かれます。すま研は、「快適住まい環境研究会」の略ですが、「スマップ研究会」(スマップは、アイドルグループ)といわれることがよくあります。実際、私も最初はもしかしたらと考えました。正式名称を答えるとだいたい友人はわかってくれますが、仲間に入ろうとしてくれませんでした。おかげで学生部のメンバーは、現在9人。1,2年生は、3人しかいません。仲間を増やしてすま研のすばらしさをわかって、広めて欲しいです。これが私の野望です。

すま研に入って、少なからずすま研は、私に影響を与え成長させてくれたと思います。すばらしい仲間と出会い、頼もしい先生と出会い、貴重な経験・体験もありました。住まい環境や福祉について学び、将来看護職に就いたときにも役に立つような知識も身につけることができました。何よりすま研に入ることで3年間の短大生活が有意義なものになったと思います。すま研本当にありがとう!!

最後に、私は3月で新潟県立看護短期大学看護学科を卒業します。そして4月、地域看護学専攻科に入学します。ということは…もう1年すま研学生部に在籍することになります。これからもよろしくお願いします。

隠居生活と言いながら2月のおわりには看護婦国家試験が待っています。さて、重い腰を上げ、ラストスパートでもかけるとしますか…。

新しい「すま研」のホームページが開設されます。(近日公開!!)

NEW アドレス: <http://www.niigata-cn.ac.jp/sumaken>

ぜひ、ご覧下さい。

## 平成 11 年度看護短大・大学祭「住ま研活動」報告

- 1、期日：平成 11 年 11 月 20 日
- 2、場所：新潟県立看護短期大学・食堂
- 3、行ったこと：
  - 1) 学生部の「読んでみて帳ダイ」の発行（25 ページの大作）
  - 2) 学生部の介護保険劇の上演
  - 3) 学生部・みんなで楽しむ音楽会用楽器づくり
  - 4) 住ま研提案住宅の模型展示とアンケート取り
  - 5) 牧野先生（新大・工学部）持ち込みの「位置案内装置」「視覚に障害のある人に便利な商品案内装置」「体外からコントロールできるペースメーカー」のデモ。「位置案内装置」は盲学校の関根先生と実際に外でやってみました。
  - 6) 介護用軽自動車 2 台の展示（ダイハツ、約 150 万円/1 台、車椅子のまま後ろから乗れる型と座席が回転して外に出てくる型の二機種）
  - 7) 点滴コントロール機器、24 時間対応の心電図モニター機器デモ
  - 8) 介護保険対応ソフト（日立）デモ
  - 9) 軽い電動車椅子と立ち上がると自動的にブレーキのかかる車椅子のデモ
- 10) 各種オムツ展示
- 11) 住まいに関わるナショナル（株）のカタログ展示

### 4、総括

- 1) 事前に何をやるかの宣伝が足りず、「見落としした」との意見があった
- 2) 牧野先生の展示内容をメールで送っては頂いたものの、最後まで実際の内容が理解できなかった。そのため「位置案内装置」のデモは電話回線が使えず、無線で対応して頂いた
- 3) 牧野先生の研究室から大勢来て頂き（7 人）、前日に歓迎会も持てて良かった
- 4) テーマを決め、展示内容をもっと絞った方が見る人に親切
- 5) 提案住宅の模型製作者である「長谷川興業提供」の文字提示を忘れた
- 6) 天気が良く、介護用軽自動車の展示では実際に乗り込みができて良かった

### 「住ま研」が提案した「これからの住宅」公開その後

公開当日（平成 11 年 12 月 23 日）は大勢の見学者がありました（約 200 名）。その後新潟市在住の方からも数名問い合わせがありました。今も事前に連絡があれば見学者を受け付けています。新井の水野・岩沢両研究員から貴重な意見をお聞きしました。この提案住宅の問題点等は担当の斎藤助手がまとめています。

### 「住ま研」研究報告

- 1、原著「トライハウスの模型作製の試み」関谷伸一他 6 名、県立看護短大紀要 5, 55-67, 1999
- 2、原著「上越地域でのこれからの住宅」杉田収他 9 名、県立看護短大紀要 5, 27-40, 1999
- 3、報告「快適住まい環境研究会報告 第 4 報、安田かつ子他 9 名、県立看護短大紀要 5, 103-109, 1999

別刷があります。必要な方は看護短大内「住ま研」事務局の杉田までご連絡下さい。文責：杉田

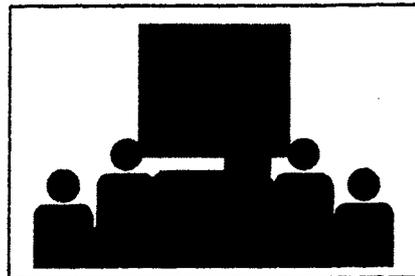
平成 12 年 4 月 24 日

発行：新潟県立看護短期大学内・「快適住まい環境研究会」

(文責：小林恵子)

## 第 5 回 快適住まい環境研究フォーラムのご案内

日時：平成 12 年 5 月 8 日 (月) 開学記念日  
午後 2 時 30 分～5 時  
会場：新潟県立看護短期大学 第一合同講義室  
テーマ：「安全で快適な住まいづくりに向けて



～高齢者の住宅改修のあり方～

講師：兵庫県立福祉のまちづくり工学研究所 阪東美智子さん

(講師略歴)

兵庫県立福祉のまちづくり工学研究所は兵庫県立リハビリテーション内にあり、障害者・高齢者の地域における生活支援に関連して、義手・義足製作、住宅改修・福祉機器の調査開発、コミュニケーション機器の開発、まちづくりや交通政策など、広範囲にわたる種々の研究活動を行っている。阪東さんは、住宅改修と福祉機器の調査研究を担当され、昨年度は、「身体障害者向け公営住宅の調査」と「段差・スロープの現行基準に関する評価実験」を実施された。

プライベートには、ホームレス問題に深い関心を持たれ、最近では NPO や市民団体と共同してセミナーやフォーラムを企画運営されている。また、半年前に日本住宅会議関西会議の有志で「介護保険と在宅ケア」研究会を組織し、介護保険という切り口から住宅問題を考える勉強会を開いておられる。(大阪生まれ。神戸大学大学院自然科学学研究所 (博士課程) 終了。工学博士。)

参加を希望される方は、当日、直接会場へお越しください (参加費無料)。

……………日ごろ、在宅療養者の方に家庭訪問をして思うこと……………

- ・療養している方の部屋が狭い→居室が 6 畳位だと、そこにベッドを置き、介護用品などを周りに置くと、訪問看護婦やホームヘルパーなど家族以外の者がお世話をするスペースが確保しにくいことがあります。これからの介護は家族以外の社会的サービスを活用することを前提とした居室の整備が必要となります。
- ・一人で外出できにくい→室内程度なら一人で移動可能な方が、高床式住宅や玄関に段差があるということで、何年も一人で家の外に出ていないという方がいらっしゃいます。介護者も本人も転倒などを心配して結局、一日自分の部屋から出ることはないという方もおられます。
- ・せっかく改修しても… →家族の方が、積極的に福祉機器を購入されたり、住宅改善やリフトを取り付けたりされても、実際あまり活用されていないこともあります。やはり、本人や家族の生活動作や意向を十分確認した上で、専門的なアドバイスを行っていくことの必要性を感じます。

……………4 月 21 日：新潟県住宅建設業共同組合の介護住宅研究会に参加して……………

記念講演の講師；長谷川美香さんの「建築を手がける方は、障害をもった当事者の気持ちとその人の自己資源 (残存能力) を聴く姿勢を…」という言葉が会場にとっても響きました。上記に感じたような問題を解決していくためにも、当事者を含め保健・医療・福祉と建築関係者で事例研究を重ねていくことの必要性を強く感じました。

ドキュメンタリー映画 「続『住民が選択した町の福祉』問題はこれからです」を見て…

あらすじ

舞台は福祉の町づくりとしてあまりにも有名になった秋田県北秋田郡鷹巣町。

(人口 22,658 人, 高齢化率 24.9%)

前作「住民が選択した町の福祉」(1997 年 1 月)は、福祉を公約にかかげて当選した若い町長が、住民に参加を呼びかけてつくったワーキンググループの活動に支えられて、町の福祉が変貌していくさまを描いた。

町ホームヘルパーの数は全国のトップレベルにあり、24 時間在宅ケアも行われている。だが、施設の整備は遅れていて、住宅複合型施設であるケアタウン構想が議会に提出されるが、反町長派が多数で否定される。何度かの町議会を経て、この構想は、一票の差でようやく議会を通過する。

—前回の映画はここで終わっている—

今回の映画では、やっと議会を通過したケアタウン構想は、ワーキンググループの住民の積極的な参加とともに、形になっていくありさまを、その後の町長の考え、議員や議会の反応、住民の活動、そして「ケアタウンたかのす」が機能するまでを追っている。今回はその間に、老人福祉にとって大きな問題となってきた介護保険に対する町の対応もとらえている。

福祉は今や地方自治体の政治のあり方を決定する大きなファクターである。鷹巣町は首長の強い意志によって、そのことに真っ向から取り組んだ自治体の一つである。いま鷹巣町は、日本ではハイレベルの福祉サービスを自治体として築き上げつつある。だが、町は将来とともにこの福祉を、日本の風土、国情のなかで、維持、発展させることができるだろうか。

前作「住民が選択した町の福祉」のラストで、ワーキンググループの一人が、やっとハードをつくる条件ができたが、「問題はこれからです」と言っている。同じことが、今の状況にもあてはまると、私は思っている。

(以上、演出をされた、羽田澄子さんの映画紹介文から抜粋)

上映会は4月初めの土曜日とあって、ユニゾンプラザの会場は満席。まわりの様子から、福祉に関する市民の切実な思いが伝わってきた。一昨年に前作を見てから、私も「その後の鷹巣町やケアタウンがどうなったか」気になっていた。映画ではケアタウン建設に関わる京都大学の外山義教授(2年前住ま研フォーラムで講演)の姿や北欧で介護を学習するケアタウンのスタッフや民生委員のいきいきとした姿があった。また、施設の洗面所の手すりをつけるに当たり、ワーキンググループが検討を重ねたものを、利用予定者の方に実際に何度も体験してもらい決定するという場面もとらえていた。この映画では町長のリーダーシップが話題を呼んでいるが、前回以上にパワーアップした住民一人一人の姿があった。これらのワーキンググループは福祉だけでなく、公共バスや教育、商店街の活性化などさまざまところで効果を上げている様子も映し出された。

住民と専門家と行政の手によって、福祉政策の一つ一つが丁寧かつ真剣に検討を加えられながら作り上げられていると感じた。建物はできた、スタッフの質と数はそろった、でも、これをどう維持・発展させていくのか、問題はこれからなんだろう。やはり、この町のその後が気になる。

演出の羽田さんの映画に出会ったのは10年位前、「安心して老いるために」というデンマーク、スウェーデンでの進んだ福祉を取り上げたものだった。当時は痴呆のお年寄りのグループホームなど、まだあまりなじみのないものであったが、今では身近に存在してきている。このように、数年後には、きっと第二、第三の鷹巣町が名乗りを上げるものと確信したい。

住ま研の研究活動への情報・意見募集(以下の研究について情報やご意見をお寄せください)

- ・上越地域の除雪に関する意見(雪で困った体験、除雪対策に関する要望など)。
- ・パーキンソンの方の住宅改善について相談を受け、研究会で検討しています。

平成12年7月7日

発行：新潟県立看護短期大学内・「快適住まい環境研究会」

(文責：杉田 収)

## 水戸美津子先生（山梨看護大学教授）

山梨で大活躍の水戸先生からの報告です。水戸先生は当「住ま研」の発足当時からの理論的中心的な研究者です。文章から「アメリカの今」が伝わります。住宅のこと、ボランティアのこと、自由と協調、学生のスタイルと勉強している感じ・・・。アメリカに行った気分で読んで下さい。

### アメリカ研修旅行から

水戸美津子

4月5日～16日までアメリカへ行く機会を得た。主目的は、本学（山梨県立看護大学）とアイオワ大学との国際交流の準備をしてくること。それ以外は自己研修を計画するようにとのことだった。そのためスケジュール的にはアメリカ西海岸から東海岸へそして中央部へと3つの時差を越えて移動するという大変厳しい結果となった。この小文では研修の主目的以外の体験から、特にバリエーションの視点を中心にしながら書かせていただいた。

**4月5日：**夕方の便で一人サンフランシスコへ。時差があるので再び5日の朝10時着。入国審査に並ぶと、電動車椅子で30・40歳代位の男性が隣の列に。周りの雰囲気から浮き上がっている様子がない。段差がほとんどないから自由に動けるのか？とちょっと感心。しかし、私は自分の入国審査で何を聞かれるのか、英語は大丈夫かと心配で、その後その人を見失ってしまった。迎えの人と空港駐車場へ。この間、段差はほとんどない。大きなスーツケースを運ぶのに何の苦労もなかった。この日は直ぐに視察に行くのは無理とのことで、サンフランシスコ市内を見学。時差は大丈夫と言いながら、結構疲れていたらしく移動中の車では眠ってばかりだったが、眠い目を何とかあけながら、街並を見る。家々の色がパステルカラーでとても美しい。2階建ての家もあるけれど平屋が多い。そしてどの家も庭が美しい。あちらこちらで、芝刈りしたりペンキを塗ったり、ガレージの中で何かを修理したり、という風景に出くわした。みんな家をよく手入れして長く使うのだという。3時を過ぎると道路が混雑するという。仕事は時間で終えて家路を急ぐのだという。家族の時間を大切にするという。私自身の日本での生活を反省させられる。この日はSナースの家に泊めていただく。平均的なアメリカの家ということで、平屋作り。周りもほとんど平屋。とてもゆったりしている。日本はせまい土地に二階建の家だから、屋内用のエレベーターが必要なのだ！とも思った。

**4月6日：**Santa Clara Valley Medical Center 内の Oncology & Hematology Clinic で Nurse Practitioner (以下NP) に会う。その待ち時間、廊下に60代くらいの車椅子で外来に来ていた黒人男性と遭遇。全身倦怠感が強そうな様子。しきりに頭をかかえている。しかし、付き添いはいない。一人で来たのだろうかと考えているうちにNPが現れた。この外来には輸液ポンプ付きリクライニングチェアのある化学療法室が5室ある。1日8-14人のがん患者が2-3時間の化学療法を受けて自宅に帰るのだという。日本では考えられない状況。また、NPが日本の研修医のような仕事をしている。病院経営上、医師の数を少なくしてNPを多くする病院がでてきているという話も聞いた。話を聞いているうちに、よく勉強しているなあと思った。Dr Room と NP Room があつた。病院からちょうど出るところで、先ほどの車椅子の黒人男性に偶然遭う。日本から来たナースだということ「人間は皆おんなじさ、がんばってください」といわれた言葉が印象に残った。

Stanford University Medical Center では、Bone Marrow Transplant Outpatient and Clinic で Nurse Manager から、やはり外来での化学療法について説明を受ける。ここでも化学療法の主体が外来であることに驚くとともに、感染に対する考え方の違いを感じた。病院にボランティアが大

勢いて、病院美化や売店の運営などはすべてボランティアの手によると聞いてただただ感心するばかりだった。

**4月7日**：Montereyの近く Hospice of The Central Coast へ。日本のホスピスのように病院で亡くなる人より、自宅に帰り亡くなる人が多いことを聞いて、アメリカのホスピスの流れには大きく2つあることがわかった。ここでも、図書室、自宅への送り迎え、治療が必要になったときの病院への送迎などはすべてボランティアがしているとのこと。動物の出入りも自由。話を聞くうちにここには自由な空間が用意されていると感じた。RNの「ただ、私達はその人の道に添って看護しているだけです」という言葉が印象的であった。サンフランシスコへの帰り道 Monterey へ寄った。日本の軽井沢のような避暑地とのこと。小さな画廊がたくさんある。その一つの画廊の入り口横に大きな車椅子の印の段差解消機があった。カメラを持っていなかったのがとても残念。

**4月8日**：ワシントン DC への移動日。飛行機に乗ると荷物を棚の上に上げる時に、他の人に手を貸す人の多いこと。なんて親切！男性のなんと頼もしく見えたことか！ダレス空港が雷と雨で視界不良で降りられず空港の周りを3旋回した、随分揺れた。アナウンスがあるが良く聞き取れない。機内の雰囲気がとても静かになること 20 数分だったろうか。アナウンスがあり着陸態勢に入り地上に着いた途端歓声と拍手。いやあー、これにもびっくり。日本的リアクションではないと思った。

**4月9日**：SUNRISE（ケア付き老人ホーム）へ。日本でいうと老人保健施設だろうか。設備やケアへの考えに感心した。痴呆の人が居るのに、何より自由。WOODBINE（リハビリテーション機能病院）へ。施設の作り方全体がリハビリテーション（人間回復）のために考えられているという感じ。この2施設を見学して、「個」が尊重されていると強く感じた。

**4月10日**：ワシントンDCで地下鉄に乗る。日本のように地下道が明るくない。薄暗い地下に長いエスカレーターで降りていくのはあまり気持ちのよいものではない。有色人種が多いことに気づく。地上に出てまずはホワイトハウスへ。次にアメリカ看護協会へ。閉館直前にスミソニアン博物館へ行く。入り口にたくさんの子供たちの集団。小学生、中学生、高校生と多種多様の子供たち。ここで、ふと、ジャージではない！ みんなそれぞれ自由な洋服を着ている！ 決して華美じゃない。どちらかというとな質素。日本では見学にくる時、皆同じ洋服（制服）が多い。ここに日本の高校生の集団がいたらすごく奇異だろうな、なんて想像して少しぞっとした。そういえば、ワシントン DC を歩いていて、圧底靴も、奇抜な格好の若者も見なかった。歩いている人で多かったのはスニーカー。スーツやワンピースを着ている人もスニーカーが多い。

**4月11日**：ワシントン DC からアイオワシティへ。シカゴ空港では飛行機が1時間遅れてアイオワシティ行きのに。搭乗口に車椅子が置いてあった。座席の窓からベルトコンベヤーで乗客の荷物を積み込んでいるのが見える。荷物を積み終わったのに、ベルトコンベヤーをはずさない。時間がとくに過ぎているのにどうしたのかなと思っていると、電動車椅子を簡単に梱包して乗せようとしている。さっき搭乗口にあった車椅子の持ち主のものかな。日本ではこんなことはあるのかなー。

**4月12日—15日**：アイオワ大学看護学部での meeting

大学の敷地が広大！。どこからが街で、どこからが大学？って感じ。ホテルから Nursing College まで歩くと川あり緑ありどっしりとした建物ありでうらやましくてため息ばかり。その中をスクールバスが走り、学生たちが闊歩している。皆、リュックを背負い、ラフなシャツとパンツスタイルにスニーカー。地味。道路にほとんど段差がないから車椅子の学生も通る。人種も様々。この4日間の meeting でも感じていたことだが学生がすごく勉強をしている様子。日本の学生とはずいぶん違うと思った。

**4月16日**：成田着

この12日間、電動車椅子で街を移動する人たち、街のつくり、家のつくり、そして他人にたやすく手を貸す状況にたびたび遭遇し、さらに「thank you」と「excuse me」という言葉がいつも回りで飛び交っていた。「危険で不道德なアメリカ」という私のとんでもない偏見はふっとんでしまった。「多様性」「実質性」「自由」という言葉が実感として感じられ、自分自身をもっと豊かにしたいと思うと同時に、さらに看護を深めたいと強く感じてこの研修を終えた。

## 今年度の「住ま研」施設見学研修

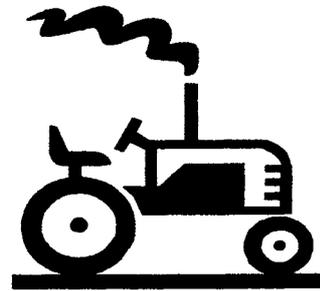
平成12年8月8日(火曜日)伊那路へ

見学施設：身体障害者養護施設・

ディサービスセンター **大萱の里**

長野県伊那市大字西箕輪 8038-4

TEL 0265-76-7151 FAX 0265-76-7152



大萱の里は重度の身体障害のため、常時介護を必要とする方々の施設で、入所者の人権尊重を運営方針に上げてあります。平成8年事業開始、定員50名

**集合日時と場所：平成12年8月8日 午前7時30分**

**上信越自動車道の妙高パーキング**

新潟市から北陸自動車道で来ますと、上越ICを通過した後、上信越自動車道に入り、高田南IC、中郷ICを通過後に妙高パーキングがあります。打ち合わせ後8時に出発します。

更埴JCTで長野自動車道に入り、岡谷JCTを経て伊那ICで下ります。伊那ICでは伊那の赤羽さんが出迎えてくれるそうです。そこから「みはらしファーム」(インターから約3Km、車で5分)に行き、昼食をとります。その後伊那インターに戻る途中で左折して大萱の里に着きます。午後1時に到着予定です。

2時間程の見学のあと、伊那ICから高速道に入り岡谷JCTに戻り、中央自動車道に入り諏訪ICで下りて**原田泰治美術館**(諏訪ICから車で10分程)に寄ります。入館料800円。今は**岡田清和**さん(新井市)の「はり絵の世界」が見られます。この美術館は車椅子で閲覧できるそうです。その後諏訪ICに戻って岡谷JCT方面に走って、すぐの諏訪湖SAに寄って夕食・温泉に入って帰ります。目的の「大萱の里」の見学の後は、いつ帰路につかれても結構です。その場合は水野幹事か草間幹事或いは杉田に一言「帰る」旨をお伝え下さい。

参加者はお名前と御自分の車で行かれるかどうか、誰かの車に同乗したいか、誰かを同乗させても良いかをお知らせ下さるようお願い致します。配車の調整がありますので、参加の場合は8月1日(火)までにお知らせ下さい。

**参加連絡先** 新潟県立看護短大 杉田、安田、斎藤 TEL 0255-26-2811  
FAX 0255-26-2815 E-mail sugita@niigata-cn.ac.jp

今回の施設見学研修は水野京子研究員と草間マサノ研究員から計画を立てて頂きました。(拍手)御二人には今回の幹事をお願いしました。よろしく申し上げます。

**見学内容の問い合わせ先**

水野京子 TEL 0255-72-2737 草間マサノ TEL 0255-23-6275, E-mail masano@avis.ne.jp

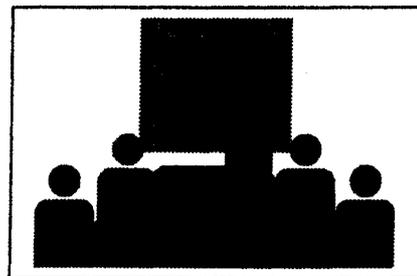
### 第5回 快適住まい環境研究フォーラム開催

**関係者 93名参加で合同講義室がほぼ満席**

日時：平成12年5月8日(月)開学記念日

午後2時30分～5時

会場：新潟県立看護短期大学 第一合同講義室



## テーマ：「安全で快適な住まいづくりに向けて ～高齢者の住宅改修のあり方～」

講師：兵庫県立福祉のまちづくり工学研究所 阪東美智子さん

兵庫県立福祉のまちづくり工学研究所は兵庫県立リハビリテーション内にあり、障害者・高齢者の地域における生活支援に関連して、義手・義足製作、住宅改修・福祉機器の調査開発、コミュニケーション機器の開発、まちづくりや交通政策など、広範囲にわたる種々の研究活動を行っています。阪東さんは、住宅改修と福祉機器の調査研究を担当され、昨年度は、「身体障害者向け公営住宅の調査」と「段差・スロープの現行基準に関する評価実験」を実施されました。（大阪生まれ、神戸大学大学院自然科学学研究所（博士課程）終了、工学博士。）

新潟日報（平成12年5月21日〔日〕）に「上越でバリアフリー住宅フォーラム」「安全な暮らし最優先」のタイトルで掲載されました。良くまとめられた記事です。

阪東さんの講演からは多くの示唆を得ました。高齢者と障害者の意識の違い、障害を負った人の医学的自立度と実際の自立度の多様性、ユニバーサルデザインの限界、つくり手と住み手の関係、住まいに関する科学的な研究方法等々です。

今回のフォーラムではカンパ金が11,600円集まりました。御協力ありがとうございました。フォーラム講師の薄謝と交通費、及び研究員の皆様に届ける郵送費（切手）と紙は県の研究費から頂いています。その他は近くの研究員のボランティアとカンパで当研究会は運営されています。会計は斎藤智子研究員（看護短大）が担当してくれています。

### 詩文集「難病から得たもの」紹介

進行性筋ジストロフィー患者さんの詩文集が発刊されました。新潟日報社説（平成12年4月19日）メールが開く難病青年の世界で紹介されています。1,000円です。杉田までご連絡頂ければ入手できます。新潟市在住の守岡勇二さん（28才）ですが、当看護短大の学生がお会いしたり、自宅車庫に昇降リフトを設置する相談を受けたこともあります。病を受容し「この病気のおかげで人生を圧縮して生きている」と書いておられます。



### グループハウス国府見学

さる4月27日に近くの研究員5名で見学しました。直江津海岸のすぐ側に建っています。施設の階段、一階廊下の巾、トイレはゆったりと造られていて申し分ありません。6畳の個室は荷物を入れたら少し狭いだろうと思われました。また健康な60才以上の方（自立生活ができる）が入居条件ですが、どのような健康状態になったら退去することになるのかは未定でした。安心して住める条件設定が必要に思われました。しかし老後の生き方の選択肢の1つを上越市が提供できたことは高く評価できると思います。

### 住宅改修相談

上越市在住のパーキンソン病患者さんとその御家族から、上越保健所の浅井保健婦さんと通じて、当「住ま研」に住宅改修相談がありました。4月21日（木）に看護短大に関係者12名（患者さんと家族、主治医、県担当保健婦、市PT、設計士、住ま研メンバー）が集まり、意見交換・検討会を持ちました。既に「住ま研」メンバーが数回お宅を訪問して詳しい対応を検討し設計図を提案しています。工事は9月の予定ですが、近くに本相談改修の中間報告書を関係者に配布予定です。

平成 12 年 8 月 30 日

発行：新潟県立看護短期大学・「快適住まい環境研究会学生部」

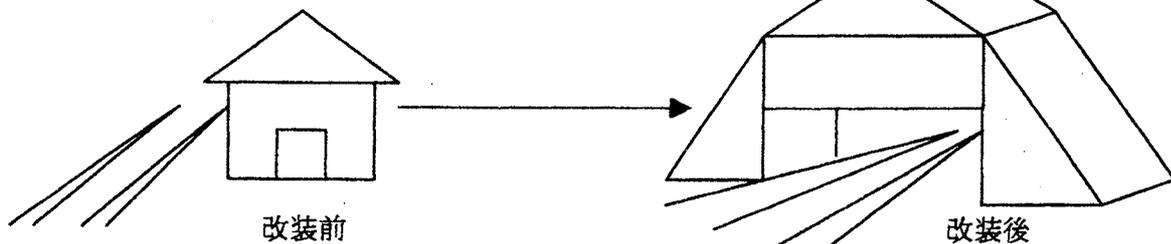
(文責代表：中田 まなみ)

## 直江津駅を見学して

6月18日に直江津駅が新しく建て直されたということで見学に行ってきました。参加人数は9名で、直江津駅の助役さんの説明付で行われました。建物は豪華客船「飛鳥」をモデルにとっても大きな駅に生まれ変わっていました。では建物の中の設備・環境はどうであったか？このことについて後日、学生部が見学を通して感じたこと、改善が必要ではないかなどの意見をまとめてみました。それを中心に、直江津駅の見学の報告をしたいと思います。見学した項目ごとに分けて報告します。

### 全体のつくり

直江津駅は今まで北口しかなかったため、線路を挟んだ南側は簡単には行けませんでした。それを南口をもうけ、交通を良くするために2階建てになり、線路を駅全体がまたぐ様な形になりました。



駅を利用する人はいったん二階まで登り、キップを購入しホームへ降りるようになっています。そのため、エスカレーターやエレベーターなどが備わるようになりました。

### トイレ

トイレは駅に1箇所しかありません。しかも改札を通りぬけ、ホーム側に入らないとありません。これは、新しくこの駅が出来た当初から新聞などに取り上げられて、大きな問題点として挙げられています。私達も見学時にトイレを随分探し、結局改札の駅員に尋ね、駅に一つしかないことを知りました。そして「トイレに行かせて下さい」と断って、改札を通してもらう経験をしました。このような経験をした人たちは沢山いると思います。また駅員に声をかけられない方や、どこかにあるはずと探しまわる方がいるはずでしょう。トイレが1箇所しかないのなら、ないなら、「トイレは改札口に設置してある」という表示を設けるなどの配慮がほしいと思われました。

続いてトイレそのものについて報告します。トイレは「多目的トイレ」と普通の「トイレ」がありました。「多目的トイレ」は赤ちゃん連れの方や障害を持った方、高齢者の方が使いやすいよう工夫したトイレであります。ここでまず、表示が見えにくいと言う声が上がりました。トイレの意味を示した表示が小さく、また上方についているため、車椅子の

方、高齢者の方などは視野に入りにくいのではと考えられるのです。ドアの開閉ボタンがある高さにも表示があつたら、随分と分かりやすいでしょう。また雰囲気で分かるかも知れませんが「多目的」では意味がピンと来ず、もっと分かりやすいマークをつけたら良いのではと意見が出ました。さらに開閉ボタンによってドアが動くのですが、文字の区別がしづらいとの意見も上がりました。次に内部に入って行きますと広々としたスペースが取られたトイレ空間が広がっていました。ここで問題としてあがったことはトイレットペーパーが備わっていないということでした。助役さんに尋ねると「JRはすべてトイレットペーパーは備えないことになっている」とのこと。経費上の問題などがあるそうです。よって利用者はトイレ近くにある販売機で購入することになります。しかしこの「多目的トイレ」には販売機が備わってなかったのです。探して見ると普通のトイレにのみ設置されていました。トイレットペーパーがなくて不便になるのは多目的トイレを利用する人も同様であり、むしろこちら側の方が必要性が高いように感じました。「トイレに入る前に販売機一台を設置してほしい」そんな要望が出ました。もう一つ気になったことは、具合が悪い時や緊急時の呼び出しベルの位置でした。呼び出しベルは手洗い場の近くにあるので、トイレから座った位置からは、とてもかけ離れていたのです。この場合ベルを必要とする際、すぐに鳴らすことは困難であろうと考えられました。

その他はベビーシートが備わっていたり、鏡が斜めになっていたり、手洗い場の高さも考慮してあり工夫が感じられました。

#### エレベーター

エレベーターは北口、南口に一つずつ設置され、改札口からは全ホームを結ぶようにエレベーターが設置されています。まず問題点として浮かび上がったのは、エレベーターの広さでした。北口は自転車の搭載やリクライニング式の車椅子も充分に対応できる広さの大型エレベーターが設置されているのですが、南口や改札とホームを結ぶものは、北口に比べ狭さが目立ちました。普通の車椅子と人が1~2人入るのが精一杯でした。

またエレベーターの設置場所がわかりづらいと言う意見が上がりました。ホームには、階段を降りてすぐの地面に小さく「エレベーター→」と欠いてあるだけで最初は気付きませんでした。きっと利用者が沢山いるときには、人の足に消されてしまって、なおさら分かりにくくなるように感じました。また設置場所は少し日影の奥まった、人の少ないところにあり、表示が小さいため分かりにくい状態です。また、一見すると一般用なのか、従業員用なのか迷ってしまうような経験をしました。また階段横のホームの通りは狭く、線路側に低い傾斜ぎみとなっており、凸凹になっているので、車輪が取られて、線路側に落ちて行きそうで少し怖さを感じました。

エレベーターの設置数的には問題はないようですが、「利用」となるといくつか問題点があるようです。幅広い利用者を考慮し、利用内容や方法を視野に入れて、より使いやすく、分かりやすくなればと感じました。

## キップ販売機について

電車を利用する私達は、キップを買うために自動券売機を使います。自動券売機は以前より機能が良くなり、また、使い易くなっていますが、まだまだ問題点はいくつかあります。自動券売機は高さが健常者用に出来ていたのですが、車椅子だとボタンに手が届かず、目的地のキップが買えませんでした。ボタンに手が届かない車椅子の利用者、また目の不自由な方のために、2台ほどテンキー付の自動券売機が設置してありましたが、操作方法が難しく、手軽に利用することはとても困難であると感じました。駅の方も使用方法が分かりにくいほど。また「何かあれば“呼び出しボタン”を押していただければ…」という説明が多かったように思います。操作が難しかったり、高い位置にあって、届かなかったり、見にくかったりすると、障害者の方たちは自分で購入することが出来ず、最終的には電車を利用するのが苦になったり、縁遠くなってしまいます。障害者だけでなく、高齢者、子供、健常者にとっても利用しやすいようにしなければなりません。

今回の直江津駅の自動券売機を利用して見て、どんな券売機が使いやすく、分かりやすいか考えてまとめてみました。

- ・車椅子の利用者や、子供が使いやすい高さの券売機を設置する。
- ・どんな状態の方でも使用できるよう、ボタンを上方、下方の2個所に設置する
- ・券売機の下方に、車椅子が入り易いよう、十分なスペースをあける
- ・入力が簡単にできる
- ・見やすい金額ボタンの設置                      など

## まとめ

今回の直江津駅の見学を通して、全体的には以前と比べ大変利用しやすくなっていると感じました。しかし、全ての利用者を使いやすさが行きわたっているのか、といえばそうは言えないような気がします。説明の中に、何かあったら呼び出しボタンや、声をかけていただければと言う言葉が聞かれました。しかし、それではバリアフリーの意味が半減、または意味をなしていないのではないのでしょうか。どんな状態の利用者でも、いつでも、気軽に、安心して利用できる様になるには、まだまだ問題点があり、遠いように感じたのが正直なところです。

公共の施設をより良くしていくのには、私達の意見が重要で必要であろうと感じます。これからも、スマ研メンバーで住み良い町とはどんなところか、様々な場所に行って、学び、意見を出し合い、思ったことを公表する場や機会をもうけ、今後の設置に役立てるような活動をして行ければと思っています。



住ま研ニュース文章・構成協力者：見田 喜代美、宮崎 喜子

# 「快適住まい環境研究会」施設見学研修・報告

身体障害者養護施設・サービスセンター

## 「大萱の里」を見学



長野県伊那市大字西箕輪 8038-4

TEL 0265-76-7151 FAX 0265-76-7152

集合日時 : 平成12年8月8日(火) 午前7時30分

(看護短大出発の方々は午前7時看護短大正面に集合)

集合場所 : 上信越自動車道の妙高パーキング

参加者数は14名で5台の自家用車に分乗しました。

水野さんと御知り合いの伊那の赤羽さんと工藤さんが伊那インターまで出迎えてくれました。上越から片道約200Kmでした。

「みはらしファーム」(インターから約3Km、車で5分)で昼食をとり、その後すぐ近くの「大萱の里」を見学しました。施設長の登内さんから丁寧な説明と施設を見せて頂き、午後3時過ぎに見学を終えました。そのあと、原田泰治美術館(諏訪ICから車で10分程)に寄り(入館料800円)岡田清和さん(新井市)の「はり絵の世界」を観て解散しました。

今回の幹事は水野京子研究員と草間マサノ研究員が引き受けてくれました。

### 見学感想記

「大萱の里」の施設紹介のパンフレットでは人権尊重を基本にした運営とありましたが、排泄、起床、朝食、就床のすべてに時間が決められていました。考えさせられたことは、「大萱の里」入所者の保護者会から出された、「夕方5時の夕食をもっと遅くして欲しい」、との要望について、入所者からは「慣れたから5時夕食を変えないで欲しい」との反対意見で、結局は変更しなかったとのことでした。外からみれば「慣らされた」人々による意志決定で、本当の意志決定であろうかと疑問に思いましたが、皆さんはいかがですか。

「大萱の里」は50名定員ですが、54名受け入れていますので、職員は頑張っています。全面介助が半数で、全員車椅子か寝たきりの方々です。個室は4室で他は2人部屋です。65才までが入所対象ですが、本人が希望すれば、65才以上になっても入所を続けることは可能とのことでした。入所者の経費は収入に応じて3.4万円から9万円とのこと。

新情報は平成15年から、入所する障害者に自治体或いは国から個人にお金が出て、その人が入所する施設にそのお金が入るシステムになるとのことです。現在は入所できる人は設立自治体住民が中心ですが、平成15年からは全国どこでも入所可能になるそうです。そうすると、多くの入所者が集まる施設と、そうでない施設とができることでしょうか。入所者の生活を第一に考えるか、職員の都合を第一に考えるかで、入所者数や施設の充実度に大きな差を生むことになるかと予想されますが、実際はどうなるのでしょうか。文責杉田

平成 12 年 10 月 31 日

発行：新潟県立看護短期大学内 「快適住まい環境研究会」

皆さんお元気ですか？

第 17 号住ま研ニュースをお届けします。最近の新築家屋では、バリアフリーは標準装備。エレベータを備えたり、ゆったりした間取りで快適に過ごせる家作りが進んでいるようです。しかし、それもすべて経済的に余裕があればの話で、現実はなかなか厳しいものがあります。それでも工夫次第で理想に近づくことも可能はずです。あきらめず、智恵をしぼって、理想目指して頑張りましょう。

さて本号は、最近実施した住宅見学会の報告と、作業療法士の長崎さんのお話、そして看護短大の大学祭の案内を掲載しました。  
(看護短大：関谷)

## 作業療法と住環境の改善

国立療養所犀潟病院附属リハビリテーション学院

作業療法学科 教官 長崎重信

私が身障者の住宅相談に関わるようになったのは作業療法士（以下OT）として更生相談所である東京都心身障害者福祉センターに勤めたことがきっかけでした。更生相談所には様々な相談業務がありますので、もともと建築に興味があったので、住宅相談を担当することにしました。東京都では昭和 50 年頃より毎週火曜日に住宅相談を開いており、当時のメンバーは日本大学理工学部の野村敏先生が中心になって、福祉局の建築士とセンターの理学療法士と私が加わって 4 名で行っていました。

当時の私は十分な建築の知識ありませんでしたが、相談業務を通じて様々な経験を積むことができました。相談と言いましても単に話を聞いてアドバイスするというものではなく、相談内容を検討し、実際に障害者の方の運動機能などの検査や家を訪ねての現地調査から改造案を図面にして手渡すというものでした。さらには、経済状況や家族の状況を考慮して、福祉機器の導入などの提案や給付、融資に関する情報の提供なども行っていました。工事が終わった後も調査に行くこともあ

りました。当時は全国でも身障者のための住宅相談を行っているところが少なく、他府県からの相談もあり、実際遠く京都や宮城などからも相談が持ち込まれていました。

住宅相談を通じて様々なことを学びました。住宅の改造を考えると、障害者本人の身体的・知的な能力、家族の状況、経済状況、家屋の状況の 4 つがそれぞれ影響していることが分かります。十分にこの 4 つの情報を収集し、それぞれの問題点とその解決策を検討し、その中で障害者、家族にとって最もよい方法を相談者に提示して決定していきます。

このような住宅相談では OT に家族を含めた高齢者・障害者の生活を想像するということが期待されます。すなわち、住環境を整備することによって、高齢者・障害者の生活がどのように変わるかをきちんと捉えることです。時には進行性の病気の場合、身体状況の変化に合わせて住環境や介護環境を変更できるように配慮しておかなくてはなりません。

ここで OT の仕事について話したいと思います。

ある所に自分では起きあがれない人がいる

とします。あまり知識のない人がこの人を何とかしてあげたいと思ったとき、たぶん、何からしてあげたらよいか困ってしまうでしょう。OTなら、まずは、ベットの上で両手が自由に使えるようにギャッジベットを少しずつ起こしていき、起きることができたら、テーブルを用意しそこで食事を自分で取れるように援助します。さらに1日の過ごし方に変化を持たせるために何か楽しみながらできる趣味的な活動を提案し、いっしょに作業をします。そして、体力や気力が上がってきたなら、介助しながらポータブル便器を用いたり、リフトなどを用いて自宅での入浴を経験してもらいます。家庭内での生活が落ち着いてきたら、家の外に目を向けて地域のデイケアセンターへ出かけられるようにし外出や他の人との交流の機会を増やし、心身両面の回復を促すようにします。

このように一日の生活から一週間の生活、1ヶ月の生活、四季の生活というように高齢者・障害者が生活を作っていくことをOTは援助します。

さらに作業療法 (Occupational Therapy) を住環境の整備との関連性から述べることにします。

作業療法の occupational の動詞である occupy は「占める」とか、「従事する」などの意味があります。この言葉は「時間を埋め

る」とか、「役割を担う」ということも意味します。

例えば、作業療法では病気や障害のために家庭や職場での役割を失ってしまった人々の役割の再獲得を援助したり、病気や障害のため生活リズムとしての遊び、労働、休息と睡眠という生活リズムのバランスの崩れた人の生活リズムの再構築を援助します。

具体的には、障害を持った女性に家事訓練を行い、家の台所や洗濯場を使いやすく改造することで、主婦としての役割を再獲得することを援助します。また、車椅子の障害者が仕事に就くときは、適性のある職種を選択するための援助や就職に向けた訓練を行い、仕事場の作業環境を整えたりや仕事で使う道具を改良するなどの援助をします。

この他に介護者などに対しても介護量の軽減や精神的な負担の軽減を考えて、住環境の改善を援助します。

いろいろ書きましたが、住環境の改善は物理的なことだけでなく、精神的、社会的な側面をトータルに考えていかななくてはなりません。OTだけができることではなく、住宅相談の相談者を含むスタッフ全員で作り上げていくものです。これから住宅相談に関わろうという方は是非幅広い見方を身につけてほしいと思います。

# Occupational Therapy

## Occupational Therapy

### Occupational Therapy

#### Occupational Therapy

OT  
OT  
OT  
OT

## .....住ま研 最近の活動から.....

- 10月12日(木曜)：住宅見学会「ハンドル式上下可動流し台」を装備したAさん宅見学
- 10月13日(金曜)：上越市市民セミナー「ITで変る私たちの暮らし」聴講
- 10月14日(土曜)：新潟市 日本エム・イー学会専門別研究会「在宅医療とME技術研究会」参加
- 10月21日(土曜)：犀潟リハビリテーション学院リハ祭講演会：上越教育大学 丸山芳郎教授「患者の目で見えた医療～頸髄損傷からの再生～」聴講



## ハンドル式上下可動流し台



平成 12 年 10 月 12 日に上越市在住の A さん宅の表記見学会を行いました。学生部員 5 名を含む 14 名で伺いました。同行者には上越市福祉課職員、設計士、車椅子生活研究員が含まれ、いろいろな視点で見学ができました。この工事の設計・施工担当の遠藤建築事務所 (TEL: 0255-32-2596) の遠藤さんと、日丹興業 (TEL: 0255-28-4866) の山崎さんが説明してくれました。手でハンドルを回すと、台所の水盤が上下して、車椅子での作業 (主に洗物) に適した高さに調節できます。全て手作りですので、市販の電動式より安価に出来、相談によっては材質を変えることで価格はかなり安くもできるとのことでした。またいつでも、どのようなメンテナンスにも対応できることが手作りの良さと話されました。実際に使用されている奥様のお話では「満足している」とのことでした。

A さん宅は高床式住宅ですが、あとづけでホームエレベーターを設置されました。そのために階段の位置等の変更がありましたが、全体にゆったりと造られ住宅のためにこのような改善が可能であったとの御主人のお話でした。

### 研究員の見学感想は

- ①車椅子での足が完全に水盤の奥まで入らないのは残念 (配管の都合で)、
  - ②水盤手前の横バーは不要ではないか、
  - ③ガスによる料理も車椅子で出来た方が良いのではないか、
- との意見が聞かれました。(看護短大: 杉田)

## 「在宅医療と ME 技術研究会」

日本エム・イー学会専門別研究会による表記研究会が、平成 12 年 10 月 14 日 (土) に新潟大学医学部で開催されました。住環境を考

える「住ま研」にも大いに関係し興味深い内容でした。以下研究会の概略を報告致します。

コーディネータ: 新大医検査診断 岡田正彦

1. 遠隔病理診断の運用経験 (新大医病理 梅津哉)
2. インターネットを介した内視鏡画像の病院間共有 (新大医医療情報部 羽柴正夫)
3. 病院内学校教育における臨場感体験型教育システム—実用的遠隔授業システムと通信技術の検討— (新大工情報工 牧野秀夫)
4. テレビ電話を使った病児保育支援システムの試み (いからし小児科アレルギークリニック 五十嵐隆夫)
5. 頭部動揺測定装置の臨床への応用—摂食嚥下時の姿勢について— (新大歯口腔生理 原澤陽二)
6. 重度障害者のためのコミュニケーション支援機器の開発 (信大医短 OT 千島亮)
7. ネットワークを利用した在宅歯科医療総合支援システム (新大歯一口腔外科 鈴木一郎)

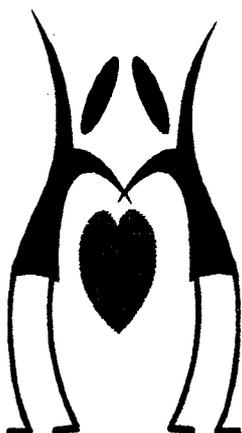
各演題の内容を簡単に紹介します。

演題 1. 佐渡総合病院における手術中の病理迅速診断を新潟大学で行っている様子が報告されました。手術を中断して 20~30 分待てば、悪性か良性か判定されます。演題 2. 内視鏡画像を広く関係者が共有することで、確かな診断ができるようです。その画像は患者の私物か、医師のものかが問題になりました。演題 3. 学校に行かない子供は遠隔授業なら喜んで受けるとのことです。演題 4. 小児科医の五十嵐先生は働く女性と子供の力強い味方です。先生はボランティアで毎日朝 10 時にテレビ電話で必要な園児 (加茂市立須田保育園) を診察されています。先生のホームページ URL は <http://www.ssquare.co.jp/ikarashi> です。演題 5. 頭部動揺測定装置を使うと、歯がどのように物を咀嚼しているかが分かります。演題 6. ALS 患者の意志疎通に眼球電図を使った報告でした。(看護短大: 杉田)

## 新潟県立看護短期大学 桜桃祭のご案内

# 桜桃祭

快適住まい環境研究会では、桜桃祭で様々な催しを予定しています。



### 先生方

融雪マット（遠赤外線を用いた）の展示  
提案住宅の紹介

### 福祉業者さんからの展示物

自動採尿器：ニュースカットクリーン  
紙おむつの展示などなど

### 学生部

- \*直江津駅を見学してきたことを発表します
- \*上越地区にある、デパートや公共施設のトイレ点検の発表
- \*ミニ劇場「スマ子のなるほどシャンプー」を上演
- \*介護保険サービスの福祉用具貸与や住宅改修についてのパンフレットを用意しています
- \*その他、クイズに答えてお菓子をもらえるコーナーもあります

日時：11月18日(土)  
AM9:00～PM3:30

場所：新潟県立看護短大



平成17年12月27日

発行: 県立看護短大内「快適住まい環境研究会」

〒〒: 県立看護短大 看護智学 学生部 中田まなみ

年の瀬を迎え、なにかと気ぜわしい今日この頃ですが、皆さまいかがお過ごしですか。

ずいぶん「未来」のことだと思っていた21世紀が、もうすぐそこまで迫っています。

21世紀の住まい環境が、誰もが快適に、暮しやすい環境になるよう、これからもこの住ま研の活動をコツコツと継続していきたいと思っていますので、来年以降も皆様のお力添えをよろしくおねがいします。

さて、今回のすま研ニュースでは、すま研としては初めて、全面的に相談から施行まで関わりを持った、パーキンソン病で在宅生活をされているK氏宅の住宅改修について報告します。また、去る11月18日に行なわれた、当短大の大学祭での学生部の取り組みとそのまとめについて学生部から報告します。

## 住宅改修への道のり

### K氏のプロフィール

H10年にパーキンソン病と診断される。現在は、薬によって症状は比較的コントロールされている。自宅の中では歩行器を押して歩いており、身の回りのこと、家事の一部などできることは行なっている。しかし、薬の効果が切れてくると体が動かなくなってしまう。

介護保険の要介護度は1と判定されている。主たる介護者は、長女。家族6人暮らし。

在宅改修を行なおうと思ったきっかけは、今の状態であれば、現在の住宅でなんとか生活できるが、病状が進行して車椅子生活になったりした時に、段差（高床式住宅でもある）やトイレが問題となる。そこで、介護される側も介護する側も負担が少ない状態で生活できるように早めに住宅改造したいと考えた。

### 住宅改修までの歩み

H12年4月中旬： 保健所保健婦と、すま研の室岡建築士（ハート1級建築士事務所）をはじめメンバー4人で、①ご本人の相談内容を詳細に聞く、②現在の住宅状況の確認を目的にK氏宅を訪問。

H12年4月下旬： 本人、家族、主治医、ケアマネジャー、担当保健婦、建築士、すま研メンバーが一堂に会し、「住宅改修に関する検討会」を行なった。

本人、家族の希望を再確認し、主治医、担当保健婦、ケアマネジャーらから、病状を踏まえた意見などをもらい、現在の住宅の問題点と今回取り組むべき改修点を整理した。

H12年5月下旬： 室岡建築士が作成したいくつかの基本設計案をもって再度訪問。1つの案でおおむね合意。

H12年6月： 室岡建築士による実施設計。

H12年7月～9月： K氏宅の事情により、具体的な動きはなし。

H12年10月中旬～： 施行。（実際に工事が始まってから、施行主への説明、細かい部分の調整のため室岡建築士が4回程度現場を訪れた。）

H12年11月下旬： 完成

※注 今回のスケジュールは、K氏宅の都合もありこのような日程になったが、もしスムーズに進めば、今回の事例だと設計期間として1～1.5ヵ月、施行に1ヵ月あればできる。

## 今回の住宅改修のポイント

- ① 高床式住宅のため、玄関に急な階段があり、外出に困難を感じている。緊急時のことや1人で外出（散歩など）しやすいこと等を考えた改造がしたい。
- ② トイレを本人の居室のできるだけ近くに設置したい。
- ③ 歩行器を押して移動しているため、敷居などちょっとした段差に引っかかりやすい。つまづきによる転倒の危険も大きいことから、屋内の段差をなくして欲しい。
- ④ 足元が冷える。居室に床暖房をつけて欲しい。



K氏の希望と検討会での話し合いの結果をもとに…

### ★ポーチ・玄関部分

- ① 階段の蹴上げの高さ、踏面寸法の調整
- ② 手すりの新設
- ③ スロープ（1/12～1/15 勾配）の新設

### ★廊下・食堂等の床面

- ① 床全体のかさあげ（畳床レベルに合わせた）→ 1階部分はすべてフラットに。

### ★本人の居室

- ① トイレの新設（シャワーつき洋式トイレ、手すり、パネルヒーター、汚物洗い）
- ② 床暖房設備の新設

※将来、車庫から直接本人の居室につながるエレベーターか段差解消機が設置できるように準備をした。

## 改修後の本人の感想

- ・ほぼ、思ったとおりの改修ができ、大変喜んでおられた。しかし、細かく見ていくと、満足した点、もう一步だった点がいくつか挙がった。
  - 良かった
    - ・本人の居室から廊下、台所、洗面所、居間という本人の生活スペースの段差が解消されたことにより、歩行器もスムーズに動くようになり、歩きやすくなった
    - ・床暖房が快適である
    - ・トイレが近くなった。トイレが大変使いやすく、汚物洗いが近くにあるだけで安心
  - もう一步
    - ・玄関につけた階段の手すりの部分が、3cm 低かった
    - ・階段の踏面が、あと 2cm 位広い方がよかった
    - ・歩行器を押して移動するので、スロープが怖く感じてしまう
    - ・居室内でトイレだけでなく洗面もできるようにすれば良かった

## 住宅改修の相談から施行の過程に関わって

この一連の相談過程に関わった感想と課題を室岡建築士さんのご意見も含めて述べていきたい。

### 相談開始～「検討会」の実施

☆ 今回の相談過程の中でかなり大きかったと思うことは、当事者、主治医、ケアマネジャー、保健所、すま研メンバーと、本人の住宅改修に関わる関係者が一堂に会した「検討会」を実施することができたことである。この話し合いにより、当事者の希望、病状、生活状況をトータルに捉えて、住宅改造についての検討をすることができた。本人・家族の自己決定という面から見ても、当事者と関係者が対等に話し合い、様々な案をもとに、自分の生活スタイル、今後どう暮らしたいかを考えながら、自分自身で選

択、決定していくという機会をもてたということは、本当に貴重であったと思う。

★ 建築士も検討会等をとおして医療面での情報を得ることにより、改修のポイント、注意点が明確になった。同じパーキンソン病でも、進行の程度や人によって現れる症状は異なる。建築士の立場では、病状と生活動作との関係が把握しにくいいため、そのあたりでの情報提供や相談ができたことは、この住宅改修での重要なポイントであった。住宅改修にあたって医療・保健サイドとの連携の必要性を強く感じた。

### 設計から施行

☆ 手すりや階段等の高さや寸法にの決定については、事前に何回か現地に足を運び、本人の立会いのもとその都度確認したが、完成してみるとわずかづつではあるが、「もう少し…」という部分があった。

確認の方法として、やはり通常的生活動作を実際に行なってみる、それを何度か繰り返すこと—今回の場合であれば、普段持つ杖を持って、階段を昇り降りする動作を実際にやりながら、手すりの高さや踏面の幅を決めるなどが重要であった。

人間の身体は、ふつうに立っているときと、その動作を実際に行なったときでは、重心の位置や体の角度は違ってくる。ふつうに立っている状態でちょうど良いものでも、実際に動作をした時には少しづつズレを感じるようになる。また、1回やってみて「いいかな」と思っても、それを日常的に繰り返し行なってみると、違和感をもつこともある。

しかし、実際に設計の段階でそこまで木目細かく確認することは困難な場合も多い。様々な場合に対応して、実際に使用して試してみることができる、『トライハウス』（すま研で、以前から構想として持っている）の必要性を強く感じた。（トライハウスではなくても、ちょっとそんなことができる施設はないでしょうか？）

★ このケースの場合、本人・家族の改修内容の希望が比較的はっきりしていたため、ポイントを絞りがやすかった、また工事内容と予算に大きなギャップがなかった、施工主の対応が良かった、などから、改修が比較的スムーズに進められた。建築士は、設計から施行までの間、トータルで10回程度現場に赴き、K氏、施行主と細かい打ち合わせや確認を行なった。

当事者と設計者、設計者と施工者が十分にコミュニケーションを図り、どんな些細なことでも言い合える関係づくりをすることによって、よりニードにあった住宅改修ができる。

☆ 今回は、新築ではなく改築であったため、トイレ等の設計をするときに比較する対象があった。『無』からのスタートではなく『比べてみるもの』があったことで、トイレのスペースや手すりの位置ぎめのやりやすさがあった。

### 最後に

すま研として、大変貴重な機会を与えていただいた。現在はまだ生活し始めたばかりで、K氏の満足度もかなり高いが、今後も継続して関わりを持ち、長期的な視点でこの住宅改修の評価をしていきたい。

今回強く感じたのは、『100点満点の改修にはなかなか得ない』ということである。しかし、このような事例を重ね、我々の知識・技術を蓄えていくことが、少しでも「100点の改修」に近づける道ではないかと感じている。

### ☆☆☆ 住ま研幹事のつぶやき ☆☆☆

住ま研もずいぶんネットワークが広がって、ニュースのお送り先も増えました。様々な職種、肩書きをお持ちの方がいて、皆様それぞれの立場から、住宅のこと、まちづくりのこと、環境のことなど取り組んでいるようにお聞きしています。

ぜひ皆さんの方からも「こんなことやっている！」とか「こんなことを考えている」などいろいろな情報をお寄せください。

住ま研ニュースやフォーラム、研修会などの機会に紹介したり、関係者をつないだりしていきます。

※ 連絡先は、ニュースの最後に掲載してあります。

## ～学園祭を通して～

11月18日に桜桃祭が行われました。私達スマ研学生部では、今まで行った活動の報告と介護の工夫をテーマに挙げ、様々な催しを行いました。

●活動の報告では、「直江津駅の調査」、「上越市周辺のやさしいトイレ（どんな人にも利用し易いトイレ）調査」をパネルにし紹介しました。私達は、この調査を通してたくさんのことを学ぶことが出来ました。

まず「やさしいトイレ調査」では、公共施設だけでなく、皆さんがよく利用されると思われるデパート（5社程度）を中心に調査をしようと試みました。しかし、デパートは公共施設と違い、許可を取ることが大変難しく、あまり良い返事が返ってこないという現実があり、私達は、「公共施設のみ調査にしようか」と話し合った事もあります。しかし、それでは調査の意味がないっ！という考えからデパートの調査を押し進めていった状況です。調査では、日にち、時間を指定し店員さんが立ち合いのもとで行われました。この様な出来事を通して公共施設と、企業の建物、考え方の違いを経験することが出来ました。

また調査することによって、まず共通点がとても多くあることに気づきました。便座の高さ、手すりの高さ、手すりの手すりの幅、洗面台の高さ、ドアの開閉法がほとんど同じであります。一方、相違点は、トイレトーパー、呼び出しボタン、流水ボタンの種類、高さ、位置でした。これは本当に様々で、トイレの数だけ違いがありました。この様な結果を、学園祭では写真や絵を添えて掲示しました。調査の結果はご覧になっていただけでしょうか？これらの共通点、相違点には規格があるのだらうと思われましたが、そこまで調べることが出来ませんでした。どなたか詳しい情報を持っておられる方は、是非教えていただきたいと思っています。

●介護の工夫では、介護保険の住宅改修と福祉用具の貸与サービスに焦点を当てたパンフレット、嚙下の難しい方への介護方法（「ペクシー」「トロミアップ」などを使っての実演）、自助具の展示を行いました。そして今年も恒例となりつつあるスマ研劇場を行いました。今年は「スマコのなるほどシャンプー」と題し、ベット上でも頭を洗える家庭での工夫・技術を実演しながら劇を交えてみました。今回は、お客様にも少しでも参加して頂けたらと考え、所々にクイズを設け番号札を上げてもらう（私達はみのもんた風と呼んでいるのですが…）かたちをとって楽しく行うことが出来ました。

●来年も学園祭では、スマ研学生部の集大成として、様々な催しものを計画したいと思います。そこで「こんなことを勉強するといよいよ」「こんなことが分からなくて困ってたよ」など情報提供していただけると私達も活動の方向性をつけて取り組むきっかけができ、学園祭でも良い企画が立つのではと思います。是非皆様からも、題材などを提供していただけたらと思っています。今回の学園祭も様々なスマ研の方からご協力を頂きました。無事に行うことがで、大成功に終ることができました。この場をお借りしてお礼申し上げます。有難うございました。

☆来年の学園祭では、「嚙下困難な方に対する介護法をもっと詳しく行おう」という計画がすでに挙がっています。他にも様々な計画を立てていこうと思っていますので、皆さん是非お越しください！！



快適住まい環境研究会へのご連絡・お問い合わせ先  
943-0807

上越市新南町 240 新潟県立看護短期大学

杉田 収 研究室

Tel : 0255-26-1170

Fax : 0255-26-2815

E-mail : [sugita@niigata-cn.ac.jp](mailto:sugita@niigata-cn.ac.jp)



平成13年2月20日

発行：新潟県立看護短期大学内・「快適住まい環境研究会」

(文責：佐々木美佐子)

新世紀の幕明けと少雪の予想が一転した大雪の1月、2月はいかがお過ごしでしたか。私は、朝晩、除雪車が通った後の、道路両脇の雪の山を眺めながら、市がいう「住みやすい町」とは程遠いな～、とため息をつきながら雪の片付けをした日々でした。雪対策をいろいろ考えさせられました

でも、桜の便りがきかれる3月が、すぐそこまで来ています。

第19号住ま研ニュースをお届けします。本号は、南館恵理さんに、住宅会議会報第51号に掲載された随想の転載をお願いしました。そして、融雪マットの使用実験結果、長谷川興業さん主催で開催された身障者住宅改修研修会や第6回快適住まい環境研究会フォーラムのご案内等を掲載しました。

## 南館さんよりのコメント

私は福島、神戸を拠点に、“地域居住政策”を探求していました。平たくいうと、住宅政策&都市計画の連携……住みたいところで安心して生き活きと住み続けられる地域づくりです。そしてこれからも、自分の体験を生かしながら何らかの形で“まちづくり”の実践にかかわっていきたくて希望しています。

## やわらかい物差し(1)

南館恵理

2年前から病気で四肢麻痺状態となり、私の生活は一変した。時間の流れも以前とは異なっている。以前の私は、居住継承問題を中心に地域居住システムについて考えていたつもりだったが、こうなって新たに気づいたり改めて感じたりすることも多い。

### ・人間・社会関係

もっとも強く感じるのは、一人の人格をもった人間として尊重してもらいたい、ということだ。日常動作に手助けを受けてはいても、何もできない人、かわいそうな人、自分のこともわかっていない人、ではなく、意志も感情ももった人間であることを忘れないでほしい。お互いの違いを認め合うこと、対等な関係でいること、案外これが難しい。選択権、決定権と自由があってこそ、“人間らしく”生きられるように思う。Take it easy!

できない側面よりもできる側面を大切にしたいと思っても、苛立ちを感じてしまう。その要因の一つが、人と接したり外出したりする機会、得られる情報の激減だ。28歳の私は、動いている社会や自然の中に身を置いて自分を感じたい、世界を広げたいという要望をもち続けている。しかし家の外に出たくても、通院を含めて週1、2回程度というのが現実なのだ。在宅サービスや友人の来訪、電子メールでのやりとりが“私”を支えてくれている。人は社会的存在なのだをつくづく感じる。

### ・一泊旅行の実現

敢行した。これが成功したのは、延べ数 10 人を超える方々からのサポート、老人福祉施設を利用できたことによるところが大きい。

数時間車椅子に乗っていると疲れるのだが、一旦外に出ると休憩場所が見つからず、外出を楽しむ際のネックになっている。ところが今回は、新しくできたケアハウス鈴懸のゲストルームのベッドで気兼ねなく休むことができた。また六日町駅で電車を降りた後の移動には、近くのデイサービスセンターの送迎車を利用させてもらった。車椅子ごと乗れる車で、介助者の負担、私の負担ともに少ない。

この地域では「ともに育つ会」の実践蓄積があり、ケアハウスも市民参加の形で立ち上げ運営されているという。誕生も成長も地域住民の手の中で遂げているからこそ、ゲストルームを誰にでも開放するという画期的な方針をはじめ交流の場への歩みを失わないのだろう。このように門戸を広げた福祉施設や様々な人の外出を可能にするサービスが増えてほしいと切に願う。

大勢に囲まれて、昼はクリスマスコンサート、夜は手作りパーティーと刺激的で充実した時間を過ごし、生き活きた気持ちを取り戻せた。これも、共感し共に動いてくれる仲間巡りに出会ったからだ。人と人との結びつきの大切さを再確認し感謝した収穫いっぱいの旅だった。お互いを尊重し合い、受け入れることの上に成り立つ“いい関係”を大切にしたい。

#### ・誰にも優しいまち

ハートビル法や交通バリアフリー法の施行とともに公共公益施設のバリアフリー化が徐々に進んでいるのは事実だが、それがすべての人にとって快適に利用できるものであるとは限らない。せっかく設置されたエレベーターが、普通の車椅子より長さがあるリクライニング式だと入りきらない広さしかない場合も多い。アメニティに配慮したタイル敷きの舗装や視覚障害者のために必要な点字ブロックが、車椅子のスムーズな通行や乗り心地を妨げる要因ともなる。

そんな時、通りすがりの方からのさりげない親切に助けられ嬉しかった。多様性を前提とするユニバーサルデザインと人の理解・サポートがかみ合ったら、どんなに優しいまちが実現することだろう。そのためにも、どんどん外に出かけたい。

#### ・バリア

全介助状態の私の行動にかかる制約が多いのは事実だ。しかしひとことでバリアといっても、そこには住宅の構造、都市基盤、制度、サービス、人手、意識、天候等様々な要素が重層している。これについて、次回以降で考えていきたい。 (「日本住宅会議会報第51号」から転載)

## 身障者住宅研修会に参加しました。

平成13年1月31日に新井ふれあい会館において、長谷川興業主催により開催された身障者住宅改修研修会に参加しました。参加者は建築関係者、介護支援専門員、住ま研研究員等約60名で会場は満杯でした。ミカユニバーサルデザインオフィス取締役社長の長谷川美香氏が、福祉住環境コーディネーターとして建設事業者と障害を持つ施主(K氏)との間に入って行った、住宅改修の経過と結果についての講演の後、改修に関わる問題点等を参加者で討論しました。

K氏、妻、長男の家族3人はそれぞれ障害をそれぞれ持っていますが、3人で自宅生活ができるこ

とを目標に、居室（K氏の寝室でもある）、台所、浴室、トイレを改修した事例でした。

- ・改修により、寝たきり生活から自立した自宅での生活が可能になった。
- ・自宅改修より、居室の整理整頓がなされ、来訪者が増え生活全体が明るくなった。
- ・障害者の住宅改修は、本人の要望を大切にしながら、医療関係者と連携して現状の評価と将来を予測して、造りすぎないように注意が必要。作り過ぎる危険がある。
- ・日常生活動作は、出来るだけ普段の生活を観察して判断しないと失敗する。

等学びました。当日の資料に詳細がありますので、出席者（杉田、佐々木、斎藤）が持っています。見たい方は連絡してください。

### 融雪マットの実験結果

杉田家：12月29日に20cmの積雪、そこで実験開始。マット上に降る雪は完全に融雪。しかし、除雪車が除雪した固い雪は、長時間マットに乗せていても融けないことが判明した。

関谷家：1月13日～15日の大雪時に車庫前で実験。13日朝から15日連続通電（晴れ間は除く）、周囲の積雪は1mであるが融雪マットは黒いゴムが露出した状態で大いに威力を発揮した。

#### \*結果から

- ・降り始めから通電して置けば、マット上の融雪は相当量の雪でも効果がある。
- ・降り始めをマットが感知し通電できる用になっているといい。
- ・高価であるので耐用年数が気になる。
- ・融雪能力をアップして除雪車が除雪した雪を融雪できないだろうか。

#### \*使用した融雪マット

- ・融雪テクノ株式会社製造の「通路用（CH-3000）」
- ・マットの大きさは、1m×3m×0.5cm
- ・価格は9.3万円、電気代は1時間約8.3円

## ソーラー発電

住ま研のモデル住宅に取り入れられている、「ソーラー発電」に関する新聞記事がありました。

### 1. 平成12年12月2日の朝日新聞

論壇に大阪学院大学教授が「ソーラー発電は経済的に見合う」と題した投稿されていました。要旨は、「政府は地球温暖化対策の決め手として2010年までに原子力発電を59%増強することを計画しているが、どうも現実的ではない。これは従来、ソーラー発電等の代替エネルギーのコストが高く普及の見通しが立たなかったためである。ここにきて、そのコストが近い将来急速に低下する見通しが定着してきた。生産規模次第でキロワット時当たりの電力コストは21円まで下がる。火力発電のコスト11円であり、両者の差はあるが、発電に際しての環境破壊度の差の範囲内に収まる。環境破壊コストは、ソーラー発電ではほぼ0に対して、火力発電はキロワット時当たり10円である。2010年以降は、ソーラー発電を更に拡充し、将来はドイツのように原子力発電を全廃することも考えられる。」でした。

## 2. 平成12年11月1日の新潟日報

上越市が市営賃貸住宅に初めてソーラー発電設備と雨水タンクを設置する方針を決めたと報じていました。「14階建ての35戸、2002年に完成予定、発電能力は10キロワットで共有部分の電気はほぼ賄える。家賃は8万円程度、と想定されている。雨水はタンクを地下に設置し、植木の水まき等に使うことで、電気・水道代の公共費の負担軽減にもなる」とのことでした。

### \*「チャリティ 少子高齢化の住まいのフォーラム」を後援しました。

建設業者の自主グループ、東北電力KK、電力ライフ・クリエイトさんの主催で開催されたフォーラムですが、「住ま研」が後援し、研究員佐々木が基調講演とフォーラムのコーディネイトを担当しました。

テーマは、「高齢者の介護と住宅改修を考える」。フォーラムは、福祉行政担当者、介護支援専門員、住宅改修の工事に係わる関係者がパネラーとなって、参加者と意見交換をし、在宅介護と住宅改修のあり方を考えました。このフォーラムは県北の新発田市コモプラザと県央の三条市総合福祉センターの2箇所で開催されました。新発田会場では70名、三条会場では180名の方々が参加、熱心な意見交換がありました。フォーラムを通して感じたこと・わかったことは、

- ・建設業者、一般市民とも介護保険の周知は十分ではない、まして住宅改修費の周知はまだまだ
- ・ケアプラン作成時、住宅改修の業者選定が難しい、適切な業者がわからない
- ・介護支援専門員が改修について相談できる適切な窓口がない
- ・介護保険給付の住宅改修の手続き、書類作成のフォーマット化が必要
- ・住宅改修内容によっては対象外になるおそれあり、必ず事前に担当者に相談が必要
- ・新潟県の福祉住環境コーディネーターのネットワーク（FJCN）ができた、目標は住ま研と同じ
- ・住宅改修事例の成功例と失敗例の集積が必要、FJCNでは例会等で実践中
- ・業界も物理的バリアと温熱環境のバリアの側面から在宅介護に高い関心を持っている

等でした。

## 第6回 快適住まい環境研究フォーラムのご案内

1. 平成13年5月8日（火）（新潟県立看護短期大学開学記念日） 午後
2. 新潟県立看護短期大学 第一合同講義室
3. 株式会社高齢者住環境研究所所長 溝口千恵子さん
4. テーマは現在講師と調整中

溝口さんは、日本女子大学で住居学を専攻。14人のうち男性は2人だけという設計・施工会社の社長さんで1級建築士。手すりの取り付けや段差の解消、トイレ、浴室、台所の改造など年700件以上を手がけている。大学卒業後百貨店の中の住宅相談所、医療施設を設計・施工する会社に勤めた後自ら設計事務所開設したが出産・育児のためやむなく閉鎖。8年後に復帰して、大手住宅メーカーを経て、福祉関係のシンクタンクに入り、特別養護老人ホーム等の設計、調査研究に関わった。また、女性ばかりの高齢者住まいの研究会を組織し、「高齢化社会にやさしい住宅関連機器」などの研究報告等で活動した。この活動がもとになって、1993年に研究会のメンバー5人で会社を設立されました。

詳細は次号の住ま研ニュースでお知らせします。

**上越市市民プラザで、平成13年2月24日（土）～25日（日）に「住まいづくりフォーラム」が開催されます。詳細は上越市建築住宅課（TEL0255-26-5511(337)）へお聞きください。**

2001年(平成13年)4月23日

発行：新潟県立看護短期大学内・「快適住まい環境研究会」

(文責：杉田 収)

瞬く間に桜の時期が通り過ぎました。新しい年度が始まり皆様いかがお過ごしでしょうか。快適住まい環境研究会も発足して5年が経過しました。どの程度社会に貢献できたものか、心もとない限りですが、とにかく大勢の研究員による協力で、ここまで続けてきたことを喜びたいと思います。

住ま研ニュース20号をお届けします。今回は新井市にお住まいの水野京子さんから寄稿して頂きました。水野さんは「住ま研」の最初からの研究員で、現在上越地区身障運転者協会会長を務められ、健康生きがづくりアドバイザーの肩書きをお持ちです。看護短大の学生の求めに応じて、短大でお話をして頂いたこともあります。

第6回「住ま研フォーラム」を5月8日に開催します。この日は県立看護短大の創立記念日です。「住ま研」学生部がフォーラムをお知らせするきれいなポスターを作ってくれました。カラーでお届けできないのが残念です。

## 演題とスケジュール決定

### 第6回 快適住まい環境研究会フォーラム

演題は「これからの高齢者の住環境整備について」に決まりました。

講師の溝口社長は東京都渋谷区代々木に本社を構え、板橋と品川に営業所を出しておられます。我々の研究テーマそのものの演題になりました。推薦して戴いた水戸先生に感謝申し上げます。溝口社長は当日11時53分に高田駅に到着されます。講演は14時10分から始まり、16時10分に終了予定です。その後看護短大の非常勤講師室で17時10分まで休憩して頂き、そのあと杉田の自家用車で直江津駅までお送りして「特急はくたか15号」越後湯沢行き18時10分に乗られます。例年の如く、講演後の休憩の1時間はお茶を飲みながらの雑談になります。研究員の方で質問等をお持ちでしたその場をご利用下さい。さらに直江津駅まで同行され、見送りの時間を利用されても結構です。**皆様のご参加をお待ちしています。**(フォーラムのポスターは4頁)



新井市 水野 京子

“住ま研”（快適住まい環境研究会）と出会って早5年がたちます。最初は“住ま研”のすまは、おすましのすまなのか、スマートのすまなのかと思ったものでした。しかし、一回目の説明会に参加してみて「なるほど」と納得しました。そこで腐れ縁のKさんと共に入会した次第です。以後だんだんとお付き合いが深まり、昨年はずいぶん年一度の施設見学の世話役というお鉢もまわってきました。喜んでさせていただきました。

“住ま研”のメンバーは、いつもにこにこのS教授をはじめ皆さん気持ちのいい方ばかりです。おすましなんて一人もいません。“住ま研”は住みよい住宅づくり、環境づくりを研究しながら集大成はトライハウスに挑戦と聞いております。この会の最もすばらしい点はメンバーの構成です。看護の道を志す若人たち、先生方、そして我々身障者、更に建築士の方々も大勢加わっておられることです。みんな熱心です。

私は今から7年前、自分の障害に合わせた専用住宅を建てました。雪深い山里です。一番重視したのはバリアフリー対策と雪対策のつもりだったのですが、結果は100点満点の60点ぐらいになってしまいました。完璧は無理としても、せめて90点ぐらいに行っていきたいのですが……。

どうしてそうなったかという、こちらの思いが十分に伝わらなかったように思います。建築界には建築界の決め事もあるのでしょう。押しきられた部分も多分にあります。和風住宅の場合、特に段差が多く取り入れられるようです。それらを打ち破る施主の奇想天外な発想にはおそらく戸惑われたことでしょう。けれども、我々身障者にとっては「たかが一段、されど一段」正真正正のバリアなのです。見てくれの良さより使い良さの方が助かるのです。

雪問題は井戸水が豊富だからということで勧められ、設備投資をしたところひと冬めにして水不足ということで、生かすことができません。

諸々のことを理解し合うには、双方じっくり話しあうしかないと思います。机上の理論ではなく固定観念を取り除き、生の声を聞いていただけたら幸いです。それには、いよいよという段階ではなく、日頃気楽な意見交換のできる場のあることが望ましいと思います。と、ということからすると「住ま研」グループの存在は大変貴重であります。「ひよこ」と称する看護大の生徒さんから、あたたかいお心も戴きました。また住宅のこれからの課題も皆さんからよいお知恵を拝借したいと思っております。これからもよろしく願いいたします。

**「住ま研」ホームページの改訂版ができました。**

アドレスは <http://www.niigata-cn.ac.jp/sumaken> です。関谷先生の力作です。開いて見て下さい。

「住ま研」共催 **住まいづくりフォーラム**（上越市）開催される

2001年（平成13年）2月24日～25日上越市市民プラザで開催されました。「住ま研」の幹事3名、学生部4名が参加し、上越市での太陽光発電の1年間の実績報告と今までの「住ま研」活動をまとめてパネルにしました。他業者の展示には新しい縦型の風力発電がありました。風を切る音がなく家庭用に将来有望です。地中熱・湖水熱利用の無散水融雪システムと上越市環境科学センターのホルムアルデヒド測定が注目されました。

## **関根先生（高田盲学校）の新築住宅設計検討会**

2001年（平成13年）3月29日、看護短大301研究室に設計や営業の関係者からお集まり頂き、設計図の検討会が持たれました。設計図は関根先生御夫婦がお二人の将来を考え、また太陽光発電装置を設置するなど環境を良く考慮されたものでした。完成が待ち遠しい住宅です。この検討会の経験からは、水野さんの寄稿文章のとおり、施主が頭の中で構想を練っている段階で、十分に時間をかけて福祉住環境コーディネーター、或いは我々「住ま研」メンバー等と気楽な意見交換をすることが大事と思いました。具体的な設計段階では重要なことの優先順位が既に明確でなければならないからです。皆さんお忙しく十分な時間をなかなか取れないのが実情ですが、そこが肝心と思いました。

### **「住ま研」からのお知らせ**



第13回  
第3回

# 快適住まい環境研究会「住まい」

## 議題 「これからの高齢者の住環境整備について」

講師 株式会社高齡者住環境研究所

溝口千恵子社長

日 時： 平成13年5月8日(火)  
会 場：新潟県立看護短期大学・第一合同講義室  
開場受付：13:30~14:00 【司会：住ま研・佐々木美佐子教授】  
開会挨拶：14:00~14:10 住ま研顧問・県立看護短大学長  
講 演：14:10~16:10 溝口千恵子社長  
主 催：快適住まい環境研究会（住ま研：県立看護短期大学内）



### ↓↓↓↓講師プロフィール↓↓↓↓

溝口社長は、日本女子大学で住居学を専攻。大学卒業後は、百貨店の住居相談所に勤務。当時女性が建設現場に行くと大工さんに塩をまかれた時代のなか、溝口社長は二級建設士、さらに一級建築士の資格を取得。その後、医療施設を設計・施工する会社に勤務。診療所など百件以上の建設を手がけられ、さらに、自らの手で設計事務所を開設。しかしその後、出産・育児のためにやむなく閉鎖。8年後に復帰して、大手住宅メーカーを経て福祉関係のシンクタンクに入る。そこでは、特別養護老人ホームや有料老人ホームの設計・調査研究に携わる。また、女性ばかりの高齡者住まい研究会を組織し、電話で高齡者の住宅相談や、「高齡化社会にやさしい住宅関連機器」などの研究報告をまとめる。この活動がもととなり1993年研究会のメンバー5人で会社を設立。手すりの取り付けや段差の解消、トイレ、浴室、台所の改造などリフォームを中心に年間700件以上手がけられている。14人の内男性は2人だけという設計・施工会社の社長を勤めている。



問い合わせ先：新潟県立看護短期大学

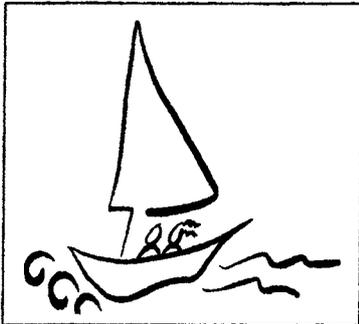
TEL: 0255-26-2811 FAX: 0255-26-2815 E-mail: sugita@niigata-cn.ac.jp

内線 301 杉田 収、内線 206 佐々木美佐子

平成 13 年 6 月 29 日

発行：新潟県立看護短期大学内・「快適住まい環境研究会」

(文責：小林恵子)



梅雨空の毎日、皆様いかがお過ごしですか。

今回は住宅改善の話題として、本人と介護者のQOL（その人らしさ、質を考えた人生）に焦点を当て、ソフト面の問題提起を中心に編集してみました。もちろん、住ま研の最近の活動報告も掲載してあります。皆様のご感想をお待ちしております。

「年を取っても、障害を持っても、『自分らしく』『快適に』『楽しく』生きていくには…。」

これは、6月24日（日）新潟市総合福祉会館で行われた「グループ築宅・第5回福祉住環境勉強会」テーマ『バリアフリーを考える』での講師：多賀啓子さんのメッセージです。

最近、建物のバリアフリー化は進んでいますが、その人の人生観、生活感を大切にしたい心（生活）のバリア（うまく表現できませんが）は埋まっていないように感じてなりません。

群馬県吉岡町「グループホーム 一番星」は、古い農家を改造し、まわりで畑作業もできるようになっておりました。痴呆の方もかつて得意だった農作業や収穫した野菜料理を率先して作ることで随分よくなっていったとテレビで報道されていました。上越市のコミュニティディホーム「となりぐみ」でも同様に、痴呆の進んだお年寄りが、普通の家庭で家族と共に昼食にコロッケをつくり、近所に住む一人暮らしの方におすそ分けをし、生き生きとした表情を取り戻している姿を見ると、その人の能力を引き出せる住まいづくり（暮しかた）とは一体何だろうかと思いつけていました。

今回の多賀さんのお話は5～6年前に義母を約1年間介護された経験や介護相談員等の実践をもとに在宅や施設での介護のあり方を探求させてくれるものでした。お話一つ一つが心の中にストンと落ちてくることばかりで、看護をする立場からなかなか理解できなかった介護者の心理状態を分かりやすく、かつ論理的にお話していただきました。今回はその講演会の概要をご紹介します。

### グループ築宅・第5回福祉住環境勉強会

テーマ：「バリアフリーを考える」－便利な家よりも「可能性のある家」を－

講師：多賀啓子さん（民生委員 介護相談員 老人保健施設の俳句指導ボランティア 「介護を語る会」世話役）義母の介護経験を「ブリコラージュ」「家族で介護みんなで介護」（ssc ムック）、「いきいきケアプラン作成マニュアルと実例集」（日本法令）に掲載。

5～6年前、76歳の義母が多発性脳梗塞と診断され、主治医から歩行困難、食事も自立は望めないと言われた。初めて介護する家族にとっては、この医師の言葉がすべてで歩行できるようになるとは考えもしなかった。やがて病状が安定し退院を告げられた時、介護態勢、生活環境を整えるに当たり、病院の生活をどう再現できるか、介護者にとっても楽な介護はどうあったらよいかについて考えた。まず、本屋で介護の本を3冊購入して読んだが、病院での介護はイメージできたが、在宅での介護は全くイメージできなかった。

住宅を見通しの立たない介護のために全面改築する気にもなれず、段差は自分でホームセンター等で材料を買い工夫した。

介護するに当たって、介護の目標を「朝、着替え、ベッドから居間まで車椅子で移動すること」と設定したが、着替えや、ベッドから車椅子に移乗させることがいかに大変かを実感し、介護と

は走り続ける急行列車に乗りながら、考えていかなければならないものであると感じた。

そんな時、サービスの介護職員、保健婦、「介護を語る会」の方々などいろいろな方からのサポートがあり、介護職員から紹介された雑誌「プリコラージュ」から介護の方法を学び、リハビリバーを購入し、約一週間で立たせることができた。

自分で立てたということにより、様々な効果があった。まず、足の浮腫は軽減し、車椅子からの移乗の際、自分で立位が支持でき介助も楽になった。そして、何より本人が「立てた」という自信からいろいろなことに挑戦するようになった。調理の一部（さやえんどうのすじむき）をしたり、雑誌やテレビの相撲などを見るようになった。

また、立てたことによりおむつからポータブルトイレが使えるようになった。ポータブルトイレを使うことにより、介護が楽になったことはもとより、残尿感が無くなり、排便もスムーズとなり、何よりも義母の表情が良くなり、寝たきりになる前の顔に戻った。

保健婦、訪問看護婦など、ポータブルトイレを勧める人は大勢いるが、家族が購入しないのは、そのことにより、介護が楽になったり、本人にどういう効果が現れるか分からないから。

後に、バリアとして残しておいた家の玄関の6段の階段を降りることが出来た時は「万歳！」と言って喜んだ。まさに、介護とは「共に泣いたり、笑ったりすること」と実感している。

#### 介護体験を通しての雑感

理想の住まいとして、人生のその時々（年齢・身体機能・家族構成など）に対応できる多様な家があるとよい。

- ・生活スタイルが変わったとしても廃材を出さない。
  - ・丈夫で美的センスを欠かず、組み替えた時、必要な空間が取れる。
- 例えば、手すりが家中について、そこに家具を置けないようなものはだめ。

#### 高齢者の住まいの実態とあり方

- ・高齢者は家をわざと狭くして、家具を手すり代りにしている。
- ・手を伸ばした時に用が足りるよう、自分に必要な物を必要な位置に置いている。
- ・前にテーブル、後ろに流しというような狭い台所だからこそ、そこで自分の体を支え、調理している高齢の方もいる。
- ・洗濯の物干しもいろいろな高さに設定、調整できると良い。

#### 施設について

- ・手すり・・・必要のない時はしまっておけて、必要な時のみ必要な位置に準備できる手すりはできないだろうか？
  - ・個室・・・個室とは言いながら、誰でもいつでも入れる・・・床はバリアフリーであるが、プライベートな空間にはなっていない。
  - ・自宅に帰る時にも許可が必要なのはどうして。
- 広くて、必要に応じて狭くて、プライベートな物も置いて、寂しくない…そんな施設があったらいい。

皆さん、いかがでしたか？伝える私の力量不足により、十分お伝えできないのが残念ですが、大変、示唆に富んだお話でした。

多賀さんがお話されたことですが、宅急便のように「そんなこと、とてもわがまま（贅沢）！！」と思えることに挑戦してみることで、新しいアイデアが開発されるのでしょうか。とかく、「介護の現場では、これが当たり前」と思い込んでしまっ、新しい可能性を潰してしまっているのは看護や介護の職業に就いている私達なのかも知れないと大いに反省しました。

\*\*\*\*\*

#### グループ築宅 の活動紹介：

福祉住環境コーディネーターの資格を持つ建築士の自主勉強会グループです。住まいや暮らしに関する相談をお受けしています。2か月に1回勉強会や意見交換会も行っております。

〒951-8131 新潟市白山浦1-618 TEL/FAX 060-3332-2112 e-mail: ticktack@ec.ocn.ne.jp

グループ築宅：事務局・代表 品田浩子

## 最近のすま研の活動経過

### I 第6回フォーラム開催（平成13年5月8日）：参加者数52名

#### 「これからの高齢者の住環境整備について」

講師 株式会社 高齢者住環境研究所 社長 溝口千恵子 氏

- 1 会社設立後4700件から4800件の改修を受け、介護保険開始からは1200件を受注した。これらをすべてカルテ記載、コンピューター入力しているので、今後有料情報として公開したい。
- 2 生活に根ざした住環境整備にもっと女性設計士が勉強せねばと毎月1回の勉強会をもち、4年間続けた後に著書を発行した（「実例でわかる福祉住環境—バリアフリー・デザイン・ガイドブッカー」サンワコーポレーション、2850円）。
- 3、住宅改修をコーディネートしても1銭にもならなかったが、今は2000円になった。
- 4、とにかく高額な改修見積もりをする業者が多いが、介護保険の改修費20万と補助機器費の10万の30万円で可能な改修工事を考えるべき。施主に提案する場合は、3案を用意し、低、中、高の費用とそれぞれの利点と欠点を文章で通知する。このやり方では中を選択する施主が多い。
- 5、工事は急ぐことにしている。高齢者は気が短いこともあるが、工事中に入院、死亡等がある。
- 6、改修工事には3種類ある。①建物のための改修 ②身体機能に合わせた改修 ③将来のための住環境整備
- 7、②の改修工事にはマニュアルはない。その人に合った工事のため、すべて異なる工事になる
- 8、一本の手すり、あるいはトイレだけの改修でも、その快適さが理解できると、次ぎは風呂、玄関等と広がり、外に出かける行動に繋がり、生活圏が拡大していく。
- 9、家族への配慮も大事、取り付けた手すりでも、たまにきた孫が頭を打って怪我をしたので、取り外した例がある。
- 10、人間40才までに体験しなかったことを高齢になって始めても対応できない（例：3枚の折りたたみ式ドア）。
- 11、風呂のスノコ掃除は高齢者には大変で、ヘルパーに頼んでも、それだけで時間の大半を消費してしまう。
- 12、家族が改修したい。当の高齢者本人は改修反対の意見不一致の場合は、とにかくやってみましょう。不都合なら明日でも取り外して、もとに戻します。と言って工事を行う。この方法で取り外した例はない。
- 13、ザ・シャワーは良い。6分間のシャワーは、7分間の風呂入浴よりあたたまる。
- 14、「おばあちゃんのキッチン」との商品名で天井据付の自動消化器があって、効果を発揮した例が出た。（文責：杉田 収）

### II 住宅見学：平成13年6月7日：研究員9名と学生

#### 事故(頸髄損傷)のため電動車椅子で生活されているM先生宅を見学

浴室については杉田研究員がまとめ、新潟日報（13.6.24付）に掲載。

今回は主に事故や社会復帰されるに当たっての先生のお気持ちを中心に掲載します。

#### 1 自宅の改修に当たって生じた問題

入院中「今後、どんな生活がやりたいか？道具はそれについていきます」と言われた。自分としては、そのとき「自分で移動でき、風呂に入れれば・・・」位しか考えられなかった。外出など想像もつかなかった。

#### 2 現在の生活の不便さ

##### (1) パソコン作業の問題

パソコンを起動させキーボードを叩くことはできるが、「プリンターの紙を受け取れない、

資料をめくることができない、頭部の補助装置？は2時間つけると頭が締め付けられる」という問題あり。

(2) 電話をこちらからかけることができない。

(3) 以前、痙攣により体が倒れ、そのまま姿勢を立て直すことができず、家族は外出中で2時間30分、倒れたままで苦しかった。

このように、緊急時、外部にSOSを伝える手段がない。手を使えない者が外に通報できるような手段はないだろうか？

### 3 大学での改修と生活

以前、一人車イスの学生がおり、その学生が使う教室のみバリアフリーになっていた。自分が復帰することで、行動範囲も広がるため、2階のみすべて車イスで行けるように改修した。最低限の行動はできるが逆に考えると2階以外には行けない。

20年前、大学建築時は構想としてあった車イス専用駐車場も改めて設置した。しかし、まだ周囲の認識は浅く、自転車や他の車が置いてあることも多い。しかし、自分が行動を起こすこと（車を駐車すること）で周囲の認識が変わると考えている。

自分のために数千万かけて改修することにとっても抵抗があった。しかし、周囲からそれで認識が変わったり、社会を変えていくことになるのだから・・・と説得された。

最近小学校へ行ってみても段差やバリアが気になる。中学校など3段の玄関があり、今後、児童・生徒や地域の方たちのためにも改善していかなければならない。

### 4 現在の気持ち

M先生の社会的立場からも障害者の前面に立って行動を起こすようまわりからも言われる。しかし、まだ、障害を乗り越えたという感じではない。職業柄、町には知人も多く、以前の自分のイメージとはあまりにも違い、町で顔を合わせても「見ない振り」をされると、ついこちらも「気がつかない振り」をしてしまう。そのようなことから、スーパーへ買い物に出かけても、「車の中で待ちたい」ということもある。

(M先生とのインタビューを終えての所感)

M先生にとって、その時点ではベストの改修だったのでしょうが、自分がどこまで可能性を秘めているのか、同病者の方などがどのようにされているか？情報を得たり（来訪は無理ならビデオや図面等）できるともっとイメージが沸いたのかも知れませんね。

障害に出会った時、障害を克服していく過程は大変なものだと思います。今、M先生が障害に立ち向かって一つ一つ悩んでいらっしゃるその姿こそ、私達の胸をうち、一緒に自分だったらどうしたらよいか・・・などを等身大で考える機会を与えてくれるものではないでしょうか。

私は、M先生には是非、一つ一つの悩み、羞恥心、こだわり・・・を大切にそれを私たちに伝えていただきたいと思いました。そこを、大切にすることこそ、共感を呼ぶ仲間が増え、私たちが一緒に成長していけるエネルギーが生じてくるものと思われまます。(文責：小林恵子)

## Ⅲ 夏期研修会のお知らせ …… 今年新潟市施設見学会 ……

### 城元建築事務所、介護福祉士の研修所、(からし種の家)、県民会館付近

今回の施設見学会のテーマは「住宅のハードと住み方のソフトの関係見直し」及び「快適なまちづくり例」です。期日は平成13年7月25日(水)、例年のように自家用車に分乗して行きます。参加希望者は7月13日までに下記「住ま研」まで御連絡ください。その際ご自分の自家用車を使われるか、その車に他研究員の同乗が可能かをお知らせください。なお交通費・土産代として一人：一般1000円、学生500円の参加費をお願いします。

快適住まい環境研究会 TEL0255-26-2811 (代) FAX0255-26-2815

E-mail [sugita@niigata-cn.ac.jp](mailto:sugita@niigata-cn.ac.jp) (見学会担当 杉田、小林(恵))

🏠 \_\_\_\_\_ 🏠 \_\_\_\_\_ 🏠 \_\_\_\_\_ 🏠 \_\_\_\_\_ 🏠 \_\_\_\_\_ (文責：見田喜代美 学生)

残暑お見舞い申し上げます。暑い日々が続きますが、いかかお過ごしでしょうか？私の今年の夏は就職活動におわれ、あっという間に夏休みも終わろうとしています。

今回の 22 号住ま研ニュースは、杉田先生の薦めで、私が今回住ま研のニュースを担当することになりました。ニュースを書くのは初めてで、何を書こうか迷いましたが、学生最後の夏休み！パーキンソン病の祖母と体験した夏の思い出を書きました。皆様に読んでいただけると嬉しいです。

また、7 月 25 日に行われた第 6 回「住ま研」夏の研修施設見学会の報告を、それぞれ見学された先生方・学生にお願いしました。こうやって今回の住ま研ニュースを発行できたのも先生方・学生の手助けがあったからだと思います。いろいろお忙しい中ありがとうございました。

🏠 \_\_\_\_\_ 🏠 \_\_\_\_\_ 🏠 \_\_\_\_\_ 🏠 \_\_\_\_\_ 🏠 \_\_\_\_\_ 🏠 \_\_\_\_\_

## 🍡 大好きなおばあちゃんとの夏の思い出 🍡

私には、パーキンソン病を持つ祖母がいます。祖母は、風邪もひかず健康で「家に閉じこまっていたら病気が悪くなる」と言って積極的に歩いたり、仕事の手伝い(自営業)などを行っています。そんな祖母も最近では、歩きが遅く小刻み歩きもみられ、また、静止時に手が振るえたり、口をがくがくさせる様子も見られます。(パーキンソン病が少しずつ進行しているのでしょうか...)

祖母は足が痛いと言うことが多く、少し腫れているのが観察できます。また、細かい動作をすることが難しいようで、自分でやろうと思ってもなかなか思うようにいきません。そのため、あきらめてしまうこともあり、無理をしてやろうとする姿を見てきました。そのような祖母を見て、私は少しでも祖母の役に立ちたいと思い、祖母が出来ないことを進んでやろうと思ってやっています。その一つは、爪切りです。特に足の爪切りが苦手なようで、足のマッサージもかねて行っています。その他に、お菓子の袋を開けたり、買い物にもついて行ったり、肩がこるようなので、マッサージなども行っています。

夏休みにも入り久しぶりに実家に帰り、祖母の様子が気になって仕方がなかったので会いに行きました。祖母は、いつものように私をとびっきりの笑顔で迎えてくれました。そんな祖母を見ると抱き締めたくなり、今回も抱き合ってしまった。(こんな年にもなって恥ずかしいですが...。ふによぶによぶにして気持ちいいのです。) その時です!! 「あれっ?何かおかしい...」祖母の髪型がいつもよりべっちゃんりして、髪は弾力性がなく固まってしまい、べとべとした状態であることに気がつきました。話をしていくうちに、頭を洗おうと思っても手が思うように動かなく、そのため、洗っていないことが分かりました。そのような祖母の状態を見て、髪を洗ってすっきりさせてあげたいと心に強く感じました。そして私は、祖母にその気持ちを伝え、初めて祖母の髪を洗う事になったのです。初め、祖母は、髪を洗うのを嫌がっていましたが「髪も染めて欲しい」と言い、白髪染めを持ってきました。

私は、どのようにしたら祖母の負担が軽く短時間でできるのか?考えましたが、なかなかいいアイデアが浮かばず、祖母との話し合いの中で、浴室でシャワーを用いて行うことにしました。





祖母の洗髪で一番心配だったことは、祖母は、前方に頭を出すことが難しく、頭を横に向けたりできません。そのため、シャンプーを洗い流す時に目に入るのではと思ったのです。祖母に「しっかり目をつぶっていてね。シャンプー目に入ると痛いから」といって注意を促し、目に入らないようにゆっくりと洗い流しました。そして、白髪染めを洗い流すときもシャワーでシャンプーを洗い流したように行いました。白髪染めは、目に入ったら大変なので、自分の手で祖母の額に手を当てて顔にかからないように流しました。洗髪が終わった後、祖母は、孫に髪を洗ってもらい、また、白髪が目立たなくなっていたため喜んでいました。しかし、自分自身これでよかったのか、祖母に本当に喜んでもらったのか、もっといい方法があったのではと反省をしました。祖母には、負担をかけてしまった所もあったと思いますが「気持ちよかったあ！ありがとう」という言葉が聞かれたのでよかったと思います。

私の実家は愛知県で、なかなか帰ることができません。そのため、祖母の生活が気になります。週に一度は祖母と電話で話し合ったりしますが、祖母が健康で頑張っているのか、生活に不自由していないかどうか気になります。私の学生生活も残り半年！それまでなかなか会うことができませんが、母や父に祖母がどんな生活をしているのか、様子はどうかかなど連絡を取っていきたいと思います。

私には祖母のほかに祖父もいます。頑固で融通のきかないところもあり、昔は喧嘩をしたりしましたが、私にとって祖父も祖母も空気のような存在です。空気がないと人間が生きていけないように、祖父・祖母がいないと私も死んでしまいます。小さい頃からかわいがられ、大切に育ててくれたことを忘れず、これからも、祖父・祖母のことを大切に思い、私にできることは進んでやりたいと思います。

これからも祖父・祖母が元気で健康に暮らせますように・・・おじいちゃん！おばあちゃん！大好き！！

私の祖父・祖母を紹介します！



\*\*\*\*\*

住ま研学生部《部長》見田 喜代美 新潟県立看護短期大学 看護学科3年  
E-mail:990043@niigata-cn.ac.jp

\*\*\*\*\*

## \*夏の「住ま研」研修 施設見学記\*



介護福祉士会研修所見学

佐々木美佐子



私たち 10 人は、平成 13 年 7 月 25 日に新潟市本馬越の住宅地にある新潟県介護福祉士会在宅介護研修センターで開催しているコミュニティ・ディサービスを見学しました。

この事業は、昨年結成された新潟県介護福祉士会のボランティア活動で、安田火災の研究助成としていただいた 30 万円を資金として実施しているのだそうです。ディサービスは、毎週水曜日（午前 10:00～15:00 位）に会員である周辺の住民が、参加したい時に参加するもので、5 月から開始して 2 か月経過しました。事業開始にあたっての住民への周知と参加の呼びかけ・近隣ボランティアの呼びかけなどは、研修センターに設置してある掲示板に掲載しただけでしたが現在会員は約 20 人だそうです。会場となっている研修センターは、空き家になった民家を借り受けているので、バリアフリーではなく玄関から居室まで段差は多いのですが、自立高齢者には特に問題はありません。しかし、歩行車を押して参加する高齢者のために、道路から庭に入るスロープも設置されています。

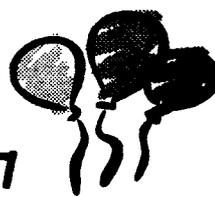
当日は、10 時前から高齢者の方々が見え始め 10 人の高齢者が参加していました。ボランティアは、介護福祉士会が岡田さんを含めて 5 人、近所の主婦が 8 人。ボランティアは、介護福祉士会の方は参加者のお話し相手、近所の主婦は昼食準備と当日の活動をリードする役割を分担していました。プログラムは、決まったものではなく毎回話し合いで決めるそうです。25 日の午前中は、歌を歌うこと、短歌と川柳をつくることに決定、ボランティアの主婦がリーダーとなってすすめられました。また、ボランティアとして参加している主婦も創作ダンスを披露して下さり、とても和やかで楽しいひとときでした。参加者は 80 歳、90 歳の高齢の方でしたが積極的、自主的な参加でびっくりしました。昼食の献立は会員やボランティアの得意料理、地域の郷土料理などから決めているそうですが、25 日はカレーライス・野菜サラダ・なす漬け・牛乳かんのデザートで、参加者、ボランティアと一緒に私たちもご馳走になりました。大変美味しくおかわりをした学生もいたようです。昼食後は会員の高齢者の方が色紙で花のプローチを創る特技を披露、みんなで作り方を教えて頂き、その花のプローチを 1 個ずつ頂戴して帰りました。

今、自立可能な高齢者に対する介護予防のための対策や高齢者を地域で支える体制づくりの必要性が叫ばれています。この事業のノウハウは、地域の実状に応じた規模でのディサービスを地域住民のボランティアと共同で実施する共助型福祉事業に活用できるのではないのでしょうか。



ちょっとひと休み！

### 住ま研学生部からのお知らせ・その 1



夏休みも終わると・・・秋の大イベント！！桜桃際(今年は、11 月 17 日 土曜日です！)が近くなってきています。今年は、どのようなことを発表しようか悩んでいます。もちろん毎年好例の学生部による劇もあります。去年の劇では、洗髪機を用いずに、家庭にあるもので簡単に洗髪ができることをクイズを交えて行いました。今年は、どのような内容で行うか検討中ですが、住まいに関係する劇をやりたいと思います。そして、見て頂いた方に楽しく「劇、よかったよ！」と言われるようにがんばりたいと思います。もし、学生部にこのような内容で劇をやってほしいなど、意見がありましたら E-mail:990043@niigata-cn.ac.jp 〈住ま研部長〉見田までよろしくお願ひします。



新潟市のユニゾンプラザは約54億円をかけて建設され、平成8年8月から開館しています。最初のハートビル法認定県立施設です。「住ま研」見学者は私も含めて7名でした。新潟県社会福祉協議会の倉田次長さんから当日(25日)の午後11時ころからお昼まで対応して頂きました。資料に沿った説明を先に頂き、次にユニゾンプラザの内部を見学しながら詳しく教えて頂きました。私達の関心事項は ①ユニゾンプラザの初期目的と現状との解離点 ②開館後に問題になって改修したところ ③現在の問題点でした。

### 1、初期目的と現状との解離点

利用率は77~78%で、満足のいく利用率であるので、初期目的は達せられているとのことでした。この原因は計画設計の段階で乳幼児を育てている若い女性や、障害者団体を始め、利用予定団体の意見が検討委員会を通して充分集約できたことだと総括されました。館内には至る所に乳幼児対策がなされ、高齢者、障害者に快適さを提供していました。

### 2、今までの改修

- 1) 玄関正面の誘導ブロックがガラスドアの直前で90度曲がっているために、目の不自由な方がドアに衝突することがあった。そのため音声の誘導位置を変更し、誘導ブロックどおりに進めるようにした。
- 2) 北入り口を自動ドアに変更した。
- 3) 館内図書情報ルーム入り口の重い鉄製ドアを自動ドアに変更した。

### 3、現在の問題点

- 1) 喫煙場所は場所指定しているものの、煙の拡散防止策がとられていない。
- 2) 北口の自動ドアの次に結構重い通常ドアがある。

### 4、館内での大発見

「住ま研」のトライハウスを実現させるに当たって、理論的にもっとも困難であった点は「小さな部屋空間から大きな部屋空間までの、さまざまな空間を簡単にすばやく造る方法」でした。そのヒントがユニゾンプラザにありました。2メートル四方のパネルを天井のどこにでも吊るせる工夫がありました。天井には何本もの直角に交叉する溝があって、そこにパネルが吊るされています。その溝をもし5センチ刻みにすれば、5センチ単位で広さを変えられる部屋ができます。床下は2メートル弱の作業空間を空け、パネルの下を床下で固定します。いかがでしょうか。

### 5、おわりに

私達はそこで昼食を摂り、次の城元建築事務所に向かいました。



## 「城元建築事務所」を訪ねて 関谷伸一

連日 30 度を越す真夏日が続いた今年の夏でしたが、その猛暑の中、すっかり恒例となった「住ま研 夏の施設見学会」が 7 月 25 日に行われました。総勢 17 名の住ま研会員らは、北陸自動車道をひた走り一路新潟市へ。午前には新潟県介護福祉士在宅研修センターを見学、集まったお年よりの皆さんとお話したり、昼食をともにしました。途中から 7 名の会員はユニソンプラザの見学に向かいました。午後は二手に分かれ「城元建築事務所」と「からしの家」を見学しました。

城元事務所では見学というより、社長の城元信久さんと懇談し、有意義なお話をたくさんうかがいました。城元さんは、身体障害者のための家屋改造を依頼されて、いままでに数多くの工事を手がけてきました。その延長線上に「高齢者のための家づくり」があるのだそうです。昭和 62 年に会社を設立し、個人住宅、各種の施設・病院等の設計・施工を請け負っておられます。現在は、設計士はもちろん介護福祉士やホームヘルパーをも社員として迎え、高齢者・身体障害者の在宅での日常生活の維持・向上のために、福祉相談から在宅サービス、福祉用品・機器の斡旋・販売、家屋改造まで、在宅福祉をトータルに支える事業を展開しています。この仕事を手がけた初期の頃は、福祉と建築の連携が周囲の人からなかなか理解されず、いろいろ大変だったようです。しかし、そこに居住する人の声に耳を傾け、その人の生活を第 1 に考えた家づくりを心がけてこられました。住宅改造で問題なのは、住む人と、相談にのってくれる人、そして改造する人、それらの間の意思疎通をいかにうまくやるか、ということです。居宅介護支援事業者として在宅サービスを、そして建築士として住宅改造を請け負うことにより、より快適な居住環境が提供できる新しい試みとして注目されます。(城元事務所のホームページは<http://www.ntcs.ne.jp/shiromotokentiku/>)

## グループホーム からし種の家 小林恵子

皆さんは自分が 70 歳代、80 歳代になったら、どこでどんなふうに暮らしたいですか？

私は現在、夫や 3 人の息子達があり、大学生の長男は別として、中学生と小学生の息子達は「お母さんが病気で寝たきりになったら、必ずぼくが面倒をみるから・・・。」とは言ってくれます。しかし、職業柄、寝たきりの介護等で家族の役割にとらわれ、疲れている家族の現実を見ると、これからの新しい家族の姿を模索せずにはいられません。私は、日ごろから、できれば家族の役割にとらわれず、気の合った仲間と楽しく交流しながら暮せ、より心豊かな人生の完成期を迎えることができれば・・・とっておりました。

その一つの選択肢として参考にしたいのが、「からし種の家」です。

「からし種の家」の基本方針は「高齢者が人間としての尊厳や権利を損なわず、その人らしく最後まで安心して暮らせるように、小規模な家庭的環境の中で、日常生活を援助することにより、高齢者の自立生活及びその家族の支援を行い、地域福祉の向上を目指す」ことです。山崎さん（代表）のお話を伺って、素晴らしいと思った主な内容です。

- ・ 大きな施設では一人一人のニーズを覚えきれない。
- ・ 一人一人を継続的に見ていく（予防からターミナルまで）からこそ、ターミナルの期間が短く、穏やかな死を迎えることができる。
- ・ 痴呆等が見られた場合も、その人が混乱しているものを取り除けば改善する。

実際、「からし種の家」では利用者一人一人の状況に合わせて、職員体制が流動的に生まれ、ケアの内容を変えながらその人に合わせたケアを提供しているそうです。また、そんな風に魅力ある施設だからこそ、学生をはじめとするボランティアも多いのでしょう。そして、そのボランティアの皆さんが新しい風や潤いをたくさん持ってきてくださっているのも、ちょっとした部屋の飾り付けなどから良く分かりました。

約 2 時間、訪れた私達がとてもくつろげ、住みたくなってしまうような家で、職員や入所者とも不思議なくらい自然に打ち解けることができました。これが、やはり「からし種の家」の魅力なのでしょうね。

「住ま研」夏の施設見学会において、最後に訪れたのは新潟市の白山駅近くの遊歩道であったが、私の記憶にある県民会館周辺の環境とは一変していた。新しく新潟市民芸術文化会館（りゅーとぴあ）と新潟市音楽文化会館が併設されて、その大きくて、デザイン性あふれる建築物とともに、整備された遊歩道は、私たちを驚かせた。「りゅーとぴあ」の屋上には美しい庭園が広がり、それを取り囲むように遊歩道とそれと調和した流水とが螺旋状に白山公園の駐車場まで続いていた。私は、そもそもここを訪れた目的も忘れて、ただひたすら楽しんでいたが、福祉住環境コーディネータでいらしゃる杉田さんは、川岸に下りる階段が、最も上り下りのしやすい設計であること、それとともに設置されているエレベータが車椅子専用ではなく誰にでも利用できものであることを指摘され、「ハッ」とした。確かにここは、あらゆる年齢層と健康レベルの人が楽しめるように考えられているように思われた。通常であれば車椅子専用のエレベータや専用通路といったように特定の人のみが利用する設備がほとんどのように思われるが、なにも障害者むけに設計される必要はなく、子供から高齢者まで全ての人が自由に利用できればよいのである。とかく障害者自身が障害を感じるのは、街のいたるところにある「バリア」だけではなく、こうした「特別扱い」にもあるのかもしれないと考えさせられた。まちづくりや住まいに関して、全ての人が快適に、かつ生活を楽しめる空間が理想であるならば、少なくともこの遊歩道は、現在私の住んでいる街や住まいと比較すると、それに近くなっているように感じられた。その意味で私がここで大いに楽しめた事はよいことであった。

## 住ま研学生部からのお知らせ・その2

上越市青年会議所8月1日発行の新聞《 MediaCommunity21 Vol.2『ファイトみんなの広場』 》に、住ま研学生部の記事が掲載されました。このように私たちのサークルが新聞に載ることは、とても素晴らしい事であると思います。そして、住ま研とは何なのか？どのような活動をしているのか？など、上越市の市民の方に少しですが、伝える事が出来たと思います。まだまだ住ま研について知られない事も多くあると思いますが、これからどんどん情報を提供できるように、今回の新聞をきっかけに頑張っていきたいと思っています。今後も活動していく中で、いろんな人との出会いがあると思いますが、その人たちとの出会いを大切に、誰にでも優しい住居とは・・・環境とは・・・を学生同士で考え意見を出し合い、住ま研をよりよいサークルにしていきたいと思っています。



# 住ま研ニュース

Vol.4(4) 通巻23号

2001年(平成13年)11月5日

発行：新潟県立看護短期大学内「快適住まい環境研究会」

(文責：杉田 収)

柿がおいしい時期になりました。おいしいものは周りの人と分け合って食べると、もっとおいしいと私達は教わってきました。富める国とそうでない国とのギャップが大きくなりすぎると、地震のような事態が発生するのではないのでしょうか。誰もが住み慣れた家で、まちで安心して、快適な生活が送れるようにとの趣旨で始まった私達の「快適住まい環境研究会」(住ま研)も、ひとたび「戦争」や「それに近い状態」になると、その活動どころか、家も快適な生活も、すべて木っ端みじんに碎かれることでしょう。平和を維持し続けることが大事と思います。

この号では11月17日(土曜日)に開催される新潟県立看護短大の大学祭(桜桃祭)での「住ま研学生部」の劇や研究報告の予告、また12月8日(土曜日)に開催予定の「第7回住ま研フォーラム」の内容を掲載しました。このフォーラムでは昨年から取り組み始めた「除雪・融雪」を考えます。さらに前号で掲載できなかった「住ま研学生部」の広田さん(県立看護短大2年生)の「夏の施設見学会」の感想文と「設計の専門家」として附属中学校の授業応援を行って頂いた室岡さんの感想文を載せました。

「住ま研」学生部

## 今年も劇をやります。観に来て下さい

新潟県立看護短期大学大学祭(桜桃祭)

平成13年11月17日午前9時から午後3時30分まで

上越市にお住まいの丸山先生(元上越教育大教授)宅を「住ま研学生部」は何度もお伺いして、大怪我をされてから現在までの経過をお聞きしてきました。奥様からもリフトを使った入浴法を教えてくださいました。怪我で車椅子の生活になっても快適に暮らせる。その様子を劇に仕立てて見せてくれます。

「住ま研学生部」は他に、これからの住宅についてパネルの用意をしています。ぜひ来て見てやって下さい。場所は例年のとおり、看護短大の食堂です。



## 第7回「住ま研フォーラム」

### テーマ：上越地域の無雪道路化を考える

「住ま研」の安田かづ子（元看護短大講師、現上教大大学院生）研究員が昨年上越地域住民に雪処理問題に関するアンケート調査を実施し、「除雪問題」が今後ますます大きな問題になることを指摘しました。その内容は「高齢社会での雪処理問題と今後の対応法」と題して原著論文として公表しました（別刷りがあります。読んでみたい方には御連絡頂ければ、無料で差し上げられます）。

上越地域での最大の住環境問題は「雪」です。専門家から雪の基礎知識と無雪道路化の方法を講演して頂きます。ぜひ御参集下さい。

期日と時間：平成13年12月8日（土曜日）

午後1時30分開場、2時 開始、4時30分終了

場所：新潟県立看護短期大学第一合同合議室

**講師：独立行政法人 防災科学技術研究所長岡雪氷防災研究所・所長（長岡市）**

**佐藤 篤司氏（50分）**

講演テーマ：雪を知り、雪と付き合う

プロフィール：1949年10月2日小千谷市に生まれ。北大大学院理学専攻科博士課程修了、モンタナ州立大学特別研究員、北大講師の後、科学技術庁防災科学技術研究所、今年4月より現職

**講師：融雪テクノ株式会社・代表取締役（長岡市）**

**水城 勇一郎氏（20分）**

講演テーマ：「遠赤外線と融雪」

プロフィール：1943年3月15日生まれ。福岡県出身、早稲田大学卒後松下電送株式会社、その後独立して、1987年 遠赤外線利用による融雪資材開発、実験、1995年 融雪テクノ株式会社設立、総合融雪メーカーとして今日に至る。

**講師：上越市道路課係長（上越市）**

**横田 晃一氏（20分）**

講演テーマ：地球にやさしく少子高齢化に対応した新たな消融雪施設の整備について

プロフィール：1955年上越市生まれ、1974年 上越市役所入所

土木課、農林水産課、下水道課、都市計画課、農村整備課、農政企画課を経て現在道路課雪対策係長

## 住ま研夏の見学会に参加して

新潟県立看護短期大学2年生 広田 愛

今回、グループホーム「からし種の家」を見学した。私自身、将来は友人との共同生活を考えており、興味を持って参加した。

高齢者の共同生活の場として、以前ケアハウスを見学したことがある。入居者の集まる部屋にはテレビが中心にあり、皆で何かをするというよりは、一人一人がテレビを見ているだけだった。スタッフと入居者は、世話をする、される関係が前面に出ていた。私はそこで、「共同生活」のメリットを見出すことはできなかった。

一方、「からし種の家」は、部屋の中心に会話があった。スタッフと入居者の間には、お互いのことを知っている、という対等な関係が感じ取れた。

「からし種の家」の代表者山崎さんは、自分の意見をもっている人がグループホームに合う、とおっしゃった。共同生活の良さは、意志のある人同士の集まりにより生まれるのだと感じた。

帰りの新幹線の中で、「からし種の家」という家庭を、一から作り上げた山崎さんの原動力はどこからくるのか、と考えた。動機の強さが人を動かす、といわれる。山崎さんが今まで経験した感動や、培ってきた価値観がその根底にあると思われる。

私の短大生活も、早いもので折り返し地点を迎えた。そろそろ将来のこと、自分が社会の中でできることを考え始めている。今後何ができるのか。その原動力は、学生のうちにどのくらい強い動機を持てるか、にかかっているのかもしれない。



## 附属中学校での応援授業

上越教育大学附属中学校技術家庭科授業のお手伝い

ハート1級建築士事務所・一級建築士 室岡 耕次

去る9月11日、上越教育大学附属中学校の技術家庭科百目鬼先生の依頼により、2

年生の技術家庭科授業で、「建物の環境と安全」というテーマでお話をさせていただきました。この授業は、生徒が建物の室内環境、特に一番身近な学校や住まいの室内環境を考えるとという授業の一環で行われたものです。最初は、どのような内容の話をしたらよいかよく分らなかったのですが、何度か杉田先生ご夫妻と共に打合せをさせていただいたなかで、要点を絞ることができ前出のテーマとして話をしたわけです。内容としては、1. 本来建物がもっている役割 2. 建物の環境 3. 建物の安全 4. 建物としての学校のあり方 5. 建物としての住まいのあり方 他にバリアフリーなどのことをまとめて話しました。生徒達は、メモを取ったりして一生懸命聞いてくれて、とても嬉しかったです。ただ、最後に質問の時間を作ってみたのですが、生徒からの質問が出なかったのが、少し寂しかったです。

今回のことで感じたのは、学校の授業で、建物や住まいのことを学ぶ（考える）ということが、未だに授業で必修になっているのではなく、担当の先生の考え（企画）次第ということになっているところが気になりました。少なくとも住まいについてくらは、きちんと学ぶ時間をとるべきだと考えますがいかがでしょうか。今回の授業を通じて、生徒達が自分の住まいや学校のことを考えるきっかけになれば幸いと思っています。

**除雪対策の希望が見えてきました。**

## **上越市冬期バリアフリー対策事業検討協議会立ちあがる**

上越市に住む中・高・短大生から、いくつかの町内会長さん、雪の専門家など総勢31名の上記協議会が発足しました。上越市の除雪対策をどうするか。無雪化道路まで視野に入れた根本的な対策を考えます。この協議会には「住ま研」メンバーの草間マサノ、新保明子、橋本克彦の各研究員とニュースを送付している大嶋画廊の大嶋さん、「住ま研学生部」の見田喜代美部長、それに代表の杉田が加わりました。高田の先人が残した、雪対策の画期的な見本である雁木に相応する、歴史に残る対策を考えましょう。

## **あらい雪シンポジウム開催される**

**01年10月10日、新井市ふれあい会館、主催：新井市と日本雪工学会上信越支部**

雪を共通のテーマに①ITを活用した雪国道路のあり方、②誰でも楽しめる雪国づくり、③雪国における快適なまちづくり、④これからの中山間地域を考える。の4セッションに分かれてのシンポジウムが生まれ、その第3セッションに杉田がシンポジストとして参加しました。

問合せ先：新潟県立看護短期大学内「快適住まい環境研究会」TEL 0255-26-2811

FAX 0255-26-2815 E-mail sugita@niigata-cn.ac.jp

2001年(平成13年)12月26日

発行：新潟県立看護短期大学内「快適住まい環境研究会」

(担当：関谷伸一)

## 「雪さえなければ……」



雪の季節がやってきました。雪は枯れ木に花を咲かせ、汚れのない純白の世界をくりだしてくれますが、市民生活にとっては大きなバリアでもあります。本格的な降雪を前に、住ま研では昨年に引き続き「雪問題」を取り上げました。雪の何がバリアなのか、どうしたいのか、どうすればいいのか、できるだけ多くの市民が、それぞれの立場から討論に参加して、雪バリアフリーの可能性を探っていききたいと思います。

問題の発端は、数年前の冬のこと、

1. ある豪雪の朝、子供たちの通学路が雪でふさがってしまい、危険であったので上越市に除雪の申し入れをした。しかし、除雪されたのは数日後であった。
2. バス停の前に雪が多く、危険であったのでバス会社に除雪を申し入れたら、会社は除雪には関係していないので近所の人たちでやってほしいといわれた。

このようなことは上越市民であれば誰もが経験していることだと思います。上記の問題はおそらく子供の父兄たちが協力して対応してきたと思います。しかしそれなら通学路以外の場所ではどうなっているのでしょうか。

「雪さえなければ……」というため息交じりの挨拶言葉をなくすにはどうすればいいのでしょうか？

\*\*\*\*\*

## 上越地域の無雪道路化を考える

### 第7回 住ま研 フォーラム、終了

去る12月8日(土曜)に、「上越地域の無雪道路化を考える」というテーマで、一般市民を含む約30名の参加を得て、新潟県立看護短期大学で開催されました。今回のテーマは直接の「住まい」ではなく、上越市民なら誰もが頭を悩ませている住まいを取り巻く「雪」でした。フォーラムに先立ち、雪問題に取り組んできている安田かづ子氏の言葉を紹介します。

#### 安田かづ子 (上越教育大学大学院学生)

快適住まい環境研究会では、どんな体の状況であっても、快適に安全にその人らしく暮らすために住まいと、環境のあり方が重要であると考え、平成8年に発足以来、主に住まいに関していろいろな提案をしてきました。その経過の中で、雪からのバリアフリーが、冬季間の生活の質を左右するのではないか、市民として、生活のレベルで何らかの発言をしていく事が雪対策の質を向上させるのではないかと考え、一昨年雪と生活に関する調査研究をおこないました。

この調査では、大雪の降った日に、具体的に除雪にどれくらい時間がかかり、生活に影響があったのはどのようなことかを、体の不自由な方も含めて、お聞きしました。

雪の調査で明らかになったのは、簡単な事が生活のバリアになっていることでした。除雪の後の、道路脇の堆雪がバリアになっていると、多くの方が訴えました。車道は除雪されているのに、肝心の車庫から車の出し入れが堆雪のためにすぐにできない、という状況があって、日常生活に支障が出ていました。その他、車椅子の方は、アパートには車庫が無く青空駐車をしているが、駐車場の雪は消雪装置で消えているのに、車に積もった雪をどけることができなくて、車を出せなかったと述べています。このように雪のために自分の住んでいる家の玄関と目的地が、いつも繋がっていることが保障されないという事は、不便である上に、いざという時に心配であると、生活に危機感をもたらしていました。

また屋根雪や家周りの除雪（雪堀）は、今はできるので問題ないという方が殆どでしたが、しかし、近所の困っている家に今後も助太刀ができるかと聞くと、とてもそこまで余力が持たないのではないかと述べています。今のままでは、今後いつまで自力で冬季間の自分の家の雪の始末ができるか心配、という高齢者が多いのです。

「今のままでは」今後が心配という、「今のまま」のなにをどのように変えれば、生活の中で積雪が大きなバリアとなるのを防ぐのか、ということをはっきりと示していくのが、住ま研の大きな課題となります。降雪期の自助、共助、公助がうまくミックスされていくために、今後どのようにすればよいのか、降雪期等の調査を通じて発信できればと思います。

## フォーラムの概略

まず佐藤篤司氏（長岡雪氷防災研究所・所長）が「雪を知り、雪と付き合う」という講演の中で、高田の雪が「積もるといっただけで大きな障害になる」世界でも稀に見る雪であると指摘されました。外国や北海道では積雪も少なく、乾燥した雪であるからです。雪の結晶からして違っているのです。そして「全ての雪を除去することは不可能であるが、どうしてもというところにはお金をかけてでもスポット的に除雪し、生活を快適にすることは可能である。その場所はどこか、ということをはっきりと話し合っていくしかない」と話されました。

次に水城勇一郎氏（融雪テクノ株式会社・代表取締役）が「遠赤外線と融雪」と題して、氷を溶かす実演も交え自社製品の融雪資材を紹介しました。まさにスポット的融雪を可能にする遠赤外線を用いた資材とその製品でした。

引き続き、上越市道路課係長の横田晃一氏が「地球にやさしく少子高齢化に対応した新たな消融雪施設の整備について」と題した、上越市の雪対策事業を紹介しました。消雪パイプによる地盤沈下を防止するために強力な監視システムを導入し、大幅な節水・省エネに成功したこと。川水あるいは高田城址のお堀の水をわざわざ温め、それを散水するという「河川水加温消雪パイプ」を、道路が狭くて除雪車がうまく稼働できない南城町の市道に実験的に設置したこと。そしてこのシステムを今後さらに延長していく計画が話されました。

その後、この上越市の消雪プロジェクトの実験場であった上越市南城町2丁目の町内会長小山源太郎氏が、河川水加温消雪システムの体験談を発表されました。町民からは「実験地域とそれ以外では天国と地獄のような差」とか、「私等ばかり恩恵をこうむって、悪いみたい」とか、多くの賛辞が寄せられたということです。

その後、質疑応答があり、最終的に感じられた全体の強い希望としては、上越市を中心に、このフォーラムの様な「産・学・官」が一体となった討論の場を数多く設け、もっと真剣に雪問題に取り組んでもらいたい、との意見であったと思われます。一朝一夕では解決できない問題であり、人知が立ち入るすべもないような自然現象であるが故に、我々には「あきらめ」の気持ちが強いようです。しかし今まで、皆で討論する場さえ設定してこなかったことは、大きな問題でしょう。このようなテーマでの討論は、ともすると単なる利害関係の衝突に終わりそうですが、具体的な問題を指摘し、知恵を出し合うこと、そして冷静に議論することが今必要となっているのではないのでしょうか。

\*\*\*\*\*

# 「CHU 融雪システム見学ツアー」のお知らせ

遠赤外線を利用して、低消費電力で融雪してしまう「融雪テクノ株式会社」開発の「CHU 融雪システム」の効果のほどを見学してみませんか？

住ま研では下記の要領で上記システムの見学ツアーを実施します。希望者は早めに申し込みください。

見学場所：長岡市の「融雪テクノ株式会社」とシステム設置施設

日時：平成14年1月26日（土）

費用：無料

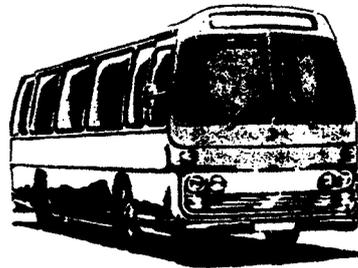
コース：朝9時 看護短大発 → JR高田駅 → 東北電力、関山変電所 → 高速長岡 → 融雪テクノ株式会社 → 昼食 → 越後丘陵公園 → 長岡ニュータウン朝日宅 → 石動地下横断歩道 → 北陸自動車道上越へ → 17時 看護短大着

申し込み先：新潟県立看護短期大学内「快適住まい環境研究会」

TEL：0255-26-2811

FAX：0255-26-2815

E-mail：[sugita@niigata-cn.ac.jp](mailto:sugita@niigata-cn.ac.jp)



\*\*\*\*\*

## CHU 融雪システムとは？

CHUとは、cut 分解、hydrogen 水素、union 結合体、の頭文字をとったもの。

雪は分子間に働く水素結合が強いので、その結合をエネルギーを使って分解してやると、水になる、つまり融雪。そのエネルギーに遠赤外線を用いるシステムのことである。

そこで遠赤外線を効率よく放射する遠赤素子（遠赤外線を発生する特殊カーボンを使用）を路面舗装材と、ケーブルに混ぜることで、放射効率を高め、省エネルギーで低コストな融雪を実現した。このシステムは従来の電熱方式に比べ大幅なコストダウンを可能にした。

また、街灯のように遠赤外線を照射して、照射された領域のみ融雪するという融雪放射システムも商品化され、横断歩道の一部や玄関先をスポット的に融雪するなど、効果をあげている。

（融雪テクノ株式会社のパンフレットをもとに、関谷が改変）

# 入浴介護ってなに？

## 「入浴介護リフトを用いた演劇で実演！」

### 新潟県立看護短期大学大学祭(桜桃祭)の報告

去る11月17日(土曜)に、新潟県立看護短期大学大学祭「桜桃祭」で、入浴介護リフトを用いて一人でも入浴介助ができる方法を、住ま研学生部の人たちが演劇を通して実演しました。

学生達は事前に上越市内の丸山芳郎さん(元上越教育大学教授)のお宅に何度もお邪魔して、実際の方法を学びました。丸山さんは交通事故による頸髄損傷により、電動車椅子の生活を余儀なくされましたが、奥様の介助により職場復帰をされ、本年めでたく退職されたばかりです。そして今回学生たちの演劇の主人公となりました。学生たちの汗まみれの熱演により、入浴もうまくいったようです。

## 学生の言葉です：

### 最後の桜桃際

見田 喜代美(県立看護短大、3年 住ま研学生部 部長)

毎年10月頃に入ると、快適住まい環境研究会学生部は、桜桃際に向けての活動が盛んになります。今年は、なかなかテーマが決まらず、毎年恒例の劇もどのような内容にするのか悩んでいました。桜桃際に向けての準備の進まず、悩みに悩んでいたところ、丸山先生のお宅に伺った日のことが、頭の中に浮かんできました。(丸山先生は、自宅で入浴介護リフトを用いての入浴を行っています。)

そして、丸山先生から教えて頂いたこと、学んだことを桜桃際で発表することはできないかと考え、今回の「入浴介護ってなに？」というテーマが決まり、誰もが安全で、快適な入浴ができる環境とは？入浴のための福祉用具・住宅改修とは何か？ということについて調べて発表することにしました。

「今年の住ま研の桜桃際は、何点？」と言われたら、自身をもって「100点満点！！大成功でした。」と言えます。本当に、住ま研メンバー全員が、勉強や実習で忙しい中、自分の考えやアイデアを生かし、がんばってくれました。一番心配であった劇も、みんながそれぞれの役にはまり(特にお母さん!)最後まで演じてくれました。今回は入浴介護リフトを用いて、介護者一人でも簡単にお風呂に立てるということを、劇で発表しました。劇の中で緊張のあまり台詞を忘れてしまった場面もありましたが、みんなが支えあってでき、最後は感動して涙が出そうになりました。本当に今年の劇は、よかったと思います。見て頂いた方から「入浴介護リフトがあれば、楽に入浴できるね」など、入浴介護リフトに興味を持って頂いた方や「劇よかったよ！たくさん練習したんでしょ？」と声を掛けてくれた人もいました。実を言うと…入浴介護リフトが前日にしか届かなかったため、前日まで未完成だったんです。入浴介護リフトを1日で操作を覚えて、劇を完成するには本当に大変だったんです。

劇も大変でしたが、展示物や部屋の飾りつけも大変でした。しかし、住ま研メンバーが一生懸命がんばった結果、このように成功させることができたと思います。来年も大変だと思いますが、それぞれ持ち味を生かして頑張ってもらいたいと思います。本当に、みんなありがとう！！

---

問合せ先：新潟県立看護短期大学内「快適住まい環境研究会」TEL：0255-26-2811

FAX：0255-26-2815 E-mail：sugita@niigata-cn.ac.jp

平成14年3月8日

発行：県立看護短大内「快適住環境研究会」

〒第：県立看護短大 青森智子

\*\*\*\*\*

年度末を迎え、なにかと気ぜわしい今日この頃ですが、皆さまいかがお過ごしですか。

当短大では、4月からの4年制大学に向け、準備も急ピッチで進んでいます。新棟も完成しましたが、新しい大学のキャンパスを「すま研」の視点でみると、どのように見えるのでしょうか？

皆さんも一度リニューアルされたキャンパスをぜひ見に来て下さい。

ところで、今年の冬は暖冬で昨年に比べ驚くほど雪が少ないですね。上越でも、いつドカッと雪が降るかドキドキしていましたが、昨年のような集中的な降雪はあまりなく、「雪の中に閉ざされた生活」は、何日もなかったように思いますが、皆さんはいかがでしたか？

雪国に住む者として、雪は生活障害をもたらす大きなバリアであることも実感しており、雪対策についてはすま研でも大きなテーマとして取り組んでいます。今年のような少雪にはホッとしているところですが、一方で「これも地球温暖化の影響かしら？」などと別のことが心配になったりもします。もう、春はすぐそこです。ここまでくればあとは、雪が解けるのを待つだけです。

さて、今回のすま研ニュースでは、去る1月26日（土）に行なわれた「すま研冬の施設・設備見学ツアー —CHU融雪システム実績見学ツアー—」の概要を中心に報告したいと思います。

\*\*\*\*\*

## すま研冬の施設・設備見学ツアー

### 『CHU融雪システム実績見学ツアー』報告

このツアーの開催は、先のすま研ニュース第24号でも報告したとおり、12月に行なわれた第7回すま研フォーラム「上越地域の無雪道路化を考える」で、(株)融雪テクノの水城氏から「CHU融雪システム」のお話と実際に商品化されたものについての紹介をしていただくことになったことがきっかけでした。

実際にどのように利用されているのか、またその効果を見、自分たちの雪対策を考える上での参考にしたいという目的で行なわれました。

今年は比較的少雪のため、見学会が近づいてきてもほとんど雪がなく、「このままでは、融雪の効果を見るができないのでは…」と心配していましたが、数日前に降雪があり、融雪システムの効果を実際に見て、体験することができました。

#### ツアーの概要

日時：平成14年1月26日（土）9：00～16：30

参加者：15名（すま研メンバー以外の一般の方の参加もありました。）

## 見学場所

### ①JR 高田駅前駐車場

高田駅前の立体駐車場出入口前に、この融雪システムが導入されていました。降雪と路面温度を察知するセンサーが取り付けられていて、自動的にスイッチが入切されるシステムになっていた。

### ②長岡市 一般の方の住宅でCHU融雪システムを導入している住宅 4軒



#### 玄関前に融雪システムを取り入れたK氏宅

2~3cm/h 程度の降雪であれば全て消えるが、7~10cm の集中的な降雪時には消えずに残ってしまうことも。電源は 100V の家庭用のもので対応。電気代は 6300 円/月程度 (1・2月が中心)

融雪システムを導入して「除雪の心配が少なくなり、心身ともに楽になった」と。



#### 車庫前に融雪システムを取り入れたY氏宅

広い車庫前スペースがきれいに融雪されていた。ただ、車庫と道路の境目の除雪車による堆雪の融雪は難しく、除雪の必要性があった。また、屋根と玄関の位置関係から屋根雪が玄関前に落雪してしまい、融雪システムを行なっても玄関前に雪が残るという問題点もあった。

### ③越後丘陵公園



国営越後丘陵公園では、公園内の一部(暖の館前の通路)に CHU 融雪システムが取り入れられていた。

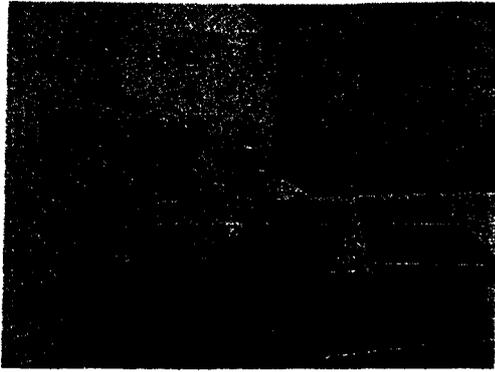
写真のとおり、その通路と周囲との差は歴然でした。車椅子でも楽々通ることができ、雪を気にせず自由に通ることができるのは、安心感につながる、という声もあった。

融雪テクノ本社では、CHU 融雪システムの概要を中心に説明を受けた。遠赤外線の利用に関して、人体への影響について参加者より質問があったが、「遠赤外線は医療用器具にも用いられており、人体への悪影響はない。ただし、商品によっては遠赤と言いつつ、近赤外線を発している場合もあり注意が必要」との話もあった。

現在、除雪車による堆雪を処理するための融雪層の実用化に向けた実験がされており、最近の除雪した雪を置くスペースの少ない住環境事情に合わせた商品の開発がさしていた。

### ④融雪テクノ社・本社





実用実験中の融雪槽。これを地中に埋め込み、融雪マットとの併用で雪を解かず仕組み。この融雪層の中に雪を投げ入れ、約1日かけてそれを解かす。

⑤石動地下横断歩道前



石動（イヌギ）の歩道橋前では、バスの中からの見学となりました。融雪が施されている歩道橋前は雪はない状態で、路面もほとんど乾いており、濡れた路面で滑るなどの危険も少ないように思った。

ただ、そこから続く歩道は融雪にはなっていないため、雪が少し残っていた。スポット的な融雪ももちろん効果はあるが、歩行の継続性（連続性？）を考えると、周辺の除雪・融雪が重要のように思った。

### <参加した学生からの感想>

1/26に行われた融雪システム見学に参加して、融雪テクノ株式会社様から業務内容と実際に行われている融雪のシステムについての説明を受けました。

私はどのような所に、どんな形でこれらの技術がいかされているのか知りたくて今回の見学会に参加したのです。

見学会で私たちが訪れた場所は、JR高田駅前立体駐車場、長岡のK氏邸、希望が丘Y氏邸、丘陵公園、長岡ニュータウン（A氏邸・M氏邸）融雪テクノ（株）本社、石動横断地下道です。

そのなかで興味深かったのは、サンライト川上邸です。こちらでは、玄関先に面状ヒーターが埋め込まれている形状の融雪システムでした。毎日雪の処理を考えると、心身共に楽だと話していた川上さんが印象的でした。

ところがY氏邸では、雪が自然落下する屋根の設計を考えに入れず、ヒーターを埋め込んだため、ヒーターの処理能力を超えた雪の塊が玄関先に残っているのを見ました。私たちすま研部員は、設計時の着眼点が甘かったのでは！？と意見が一致し、設置すればそれらに、冬場の生活が大きく依存する形になるので、そこに生活する人、特に家の設計とのかねあいを考えなければと強く感じました。

見学を終えて、私達は、どの様に融雪システムが設置されているのかが分かりました。

また、問題点も発見しました。

12/8に融雪のフォーラムが開かれた時に、水城さんのお話を頂いて、このシステムについての疑問（どの様に設置され、どんな成果が上がっているか）が今回の見学を通して直に学ぶことが出来たと思います。

このツアーの様子は、上越タイムス 2002.1.30にも掲載されました。当日の資料も少量ですがあまっておりますので、関心をお持ちの方は看護短大 斎藤までお問い合わせ下さい

今後も、このような住まい・住環境に関する施設や設備の見学会を行なって行きたいと考えています。皆さんからも、ご意見やご希望がありましたら、すま研までお知らせいただきたいと思います。

\*\*\*\*\*

すま研会員 南館恵理さんから、すま研あてに以下のような内容のメールが届きました。もし、皆さんの中で、情報をお持ちの方がいらっしゃいましたら、看護短大 すま研杉田教授までご連絡いただきたいと思います。(メールの内容は少し省略してあります)

今日は、音声認識ソフトなどについておうかがいします。

(1)音声認識ソフト「ViaVoice」(とくに、Mac版)

IBMから、「ViaVoice」という、一般向けの音声認識ソフトが発売されています。みなさんのお知り合いで、これを使っている方はいらっしゃいませんか(とくに、Mac版)。  
・認識率は?  
・文字入力だけでなく、アプリケーションやMacの操作も一通りできるのか?どの程度?  
・「Kenx」という入力支援装置との同時使用は可能か(コンフリクトを起こさないか)?  
などについて知りたいのです。

IBMのHPで調べたけれど、よくわからなくて、もし、わかれば、教えてください。

(中略)

私はMacを使っています(PowerBookG3/2000。USBポートあり。ちなみにOSは、MacOS9.04)。Macに「Kenx」という入力支援装置をつけて、あごのスイッチで操作しています。これでMacの操作が一通りできるんですが、とくに、カーソル操作と文字入力に、めっちゃめっちゃ時間がかかってしまう(スキャン入力で、1つのキー操作にたどり着くには4、5回スイッチを押す必要があるため)。よく使う言葉をATOKに単語登録したり、コピーペーストを多用したり、といった工夫はしているのですが。

メールでのやりとりをスムーズに、そして充実させたい。もちろん、メモや記録、人前に出す文書も書きたい。そのために、文字入力を楽にスピーディーにしたいのです(代筆一代打?—を頼むのではなく、自分で)。

それで、私は声は出せるんだから、音声認識ソフトは使えないかな、「ViaVoice」Mac版も登場してバージョンアップしているし、機能はどうなんだろう、と考えまして(Macで使える音声認識ソフトは、まだ、「ViaVoice」だけのはずです)。

それから、

(2)ダブルクリックすると、開いた窓のそばにカーソルが移動するソフト(の名称、機能、動作環境)

(3)「AutoBoot」という自動再起動ソフト(の機能、動作環境)

(いずれもMac対応)について、なにか情報をお持ちの方、ご連絡ください。

よろしく願いいたします。

～また、新しい年度が始まります。これからもすま研の活動にご支援とご協力をお願いします。～

問い合わせ先：新潟県立看護短期大学内 「快適住まい環境研究会」 TEL 0255-26-2811

FAX 0255-26-2815 E-mail [sugita@niigata-cn.ac.jp](mailto:sugita@niigata-cn.ac.jp)

2002年(平成14年)4月30日

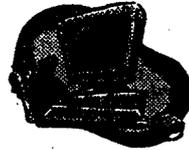
発行：新潟県立看護大学内「快適住まい環境研究会」

(文責：杉田 収)

新年度を向かえ快適住まい環境研究会々員の皆様も、新しい生活に入られたことと思います。「住ま研・学生部」の新部長に決まった広田 愛さんから、今年度の活動計画が寄せられました。また元「住ま研・学生部」部長の寺本希久枝さんから便りが届きましたので掲載しました。さらに新規に「住ま研」に加入して頂いたの二人の先生(看護大学)の御紹介と「住ま研」の近況報告、今年度の活動予定をお知らせします。

## 新潟県立看護大学開学

平成14年4月1日から新潟県立看護大学が開学しました。看護短大は現在の2年生が専攻科を修了する平成17年3月まで存続します。中島紀恵子新学長を始め、教員も51名に増員され、質の高い大学を目指して活動が開始されました。新たに着任された吉山直樹教授(病態学)と橋本明浩助教授(情報処理学)のお二人の先生から「住ま研」活動に御賛同頂きました。御紹介を兼ねて先生の経歴と挨拶文を掲載しました。両先生は「住ま研」の強力なエンジン役になって頂けます。



## よろしく お願いします 「住ま研」に新しく加入して戴いた先生の御紹介です。

吉山直樹教授(昭和20年生まれ、56歳)

東京医科歯科大学医学部卒業、同大学第二内科入局

人工腎臓治療と小型化研究、活性型ビタミンD(alfacalcidol)の腎性骨症治療の研究。

透析患者の異常乳汁分泌症候群について研究(特にプロラクチン分泌動態)。

人工生体材料であるアパタイトを利用した経皮端子の応用研究に従事し、腎不全実験犬の腹膜透析治療による世界最長生存記録を樹立。中心静脈栄養法に使用して画期的な感染防止法を確立。

診療行為について基礎的な単位を明らかにし、統計的手法の適用を可能とする診療行為の分類研究。

この3年は、大島町立北部診療所所長と上越地域医療センター内科医長を歴任、離島診療所および療養型病床での診療を通じて総合的な老人の医療・福祉の対応を実践し、その成果を公表した。数多くの在宅医療の症例への対応も自ら実施した。

【学会評議員】

日本成人病学会、日本腎臓学会、日本心療内科学会、日本プライマリ・ケア学会

【委員等】

昭和62年6月 WHOプライマリ・ケア医学教育研修終了(於シドニー、RTTC)

昭和62年10月 日本プライマリ・ケア学会 医学教育委員会委員、委員長(現在に至る)

橋本明浩助教授(ペンネーム：橋本明生浩先生)から

4月より千葉大学から情報処理担当教員として、県立看護大学に赴任してきました。杉田教授より住ま研を紹介され、素晴らしいプロジェクトだと思い早速入会を申請させていただきました。母の介護経験から、人にやさしい住居の必要性は痛感しております。是非、住ま研でお役に立てればと思っております。

私の専門は情報処理のデータサイエンスという新しい分野です。具体的には測定・観測されたデータから真理を引き出す学問です。まじめに実験測定されたデータには隠れた真理が潜んでいます。様々な角度から数値を眺め、探求し、真理を発見できた喜びは雪の中から福寿草を見つけるような喜びです。専門分野で、少しでも皆様のお役に立てればと考えております。

【橋本 明生浩、Email hash@niigata-cn.ac.jp TEL 0255-526-3110】

## ストレーター(住宅用昇降装置)見学会

平成14年2月28日、黒井駅前のFさん宅を橋本医科器械(株)の山崎さんの案内で見学させて頂きました。高床式住宅で床下の車庫から2階の「元は床の間であった空間」を上下するようにして設置されました。価格は170万円から200万円です。

## 勉強会「住宅性能を考える」に参加

県立新潟女子短での公開勉強会に「住ま研」から2名の研究員が参加しました。平成14年3月23日に開催され、山岸・坂口両先生の主催でした。住宅の断熱性能の勉強と密閉性の実技実験に参加しました。

## 省エネ調査住宅に参加します

「調査住宅」に杉田の住宅を応募することにしました。13戸募集していました。新潟大工学部の赤林先生と山岸先生が、過日予備調査に来られました。住宅内の消費エネルギーを全て記録します。1年半の長い調査期間です。

## 研究論文

### 降雪地域における環境共生住宅—建築後1年を経過した提案住宅の評価—

新潟県立看護短期大学紀要、第7巻、45-53頁、2001年

斉藤智子、杉田 収、関谷伸一、安田かづ子、小林恵子、佐々木美佐子、室岡耕次、長谷川正道

「住ま研」では平成11年に提案住宅を建築しましたが、1年間の生活実体験と各種の測定結果を評価しました。アプローチと玄関、太陽光発電の発電量、気密性・断熱性の測定結果、外気温・湿度と各住宅内の気温・湿度調査、ホルムアルデヒド量の測定値等が記載されています。別刷りがありますので、斉藤研究員(新潟県立看護大学)まで申し出下さい。

## 「住ま研」活動報告

### 快適住まい環境研究会報告 第6報—当事者主体の住宅改修を考える—

新潟県立看護短期大学紀要、第7巻、105-111頁、2001年

斉藤智子、杉田 収、小林恵子、安田かづ子、関谷伸一、佐々木美佐子、西脇洋子、室岡耕次、水戸美津子

平成12年度の「住ま研」活動をまとめた報告書です。パーキンソン病の在宅療養中の方から住宅改修の相談を受けてからの経緯が記録されています。当短期大学に本人・家族、主治医、ケアマネージャー、保健婦、理学療法士(PT)、建築士が集まり、そこに「住ま研」メンバーが加わり、対応策を相談し、何回かその住宅を訪問して改修工事を行ないました。他にフォーラムでの阪東氏の講演や見学会が掲載されています。こちらも別刷りがあります。斉藤研究員まで申し出下さい。

## 平成14年度住ま研・主な活動予定

### フォーラム

今年の5月8日の「住ま研フォーラム」は、看護大学の開学記念行事が行なわれず、遅れて実施予定です。予定が立ちましたらお知らせします。

### 夏の施設見学

諏訪方面(施設)、富山小矢部鴨島方面(ベンチャー企業)、山梨方面(山梨看護大学と施設)の

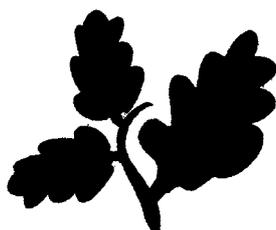
案がでています。希望・意見をお寄せ下さい。

### 活動記録編纂

「住ま研」の活動開始は平成8年2月ですので、6年が経過しました。残った様々な活動記録・提案等を整理する時期のように思います。思いきって書籍に編集したらどうかとの意見もあり検討中です。

### NPOの立ち上げ案

住宅建築・改修相談とそれらの評価窓口として、NPOを組織してはどうかとの意見が寄せられています。平成14年5月9日(木) 17:30から看護大学317研究室の「住ま研」勉強会で、活動記録のまとめ方と共に、この案も討議します。関心を持たれた研究員はお集まり下さい。



## 住ま研学生部 今年度の活動計画

新潟県立看護短期大学3年・住ま研・学生部部长 広田 愛

4月に入り新しい先生方と新入生を迎え、校内は一気に賑やかになりました。住ま研学生部も本格的に活動を始めたところです。今回この場を借りて、今年度の学生部の活動内容を報告したいと思います。

今年度の学生部のモットーは、「学生主体で活動する」です。今までの活動を振り返ると、先生方が計画する見学会やフォーラムのお手伝いをするのが活動の主流を占めていました。しかし、大切なことは学生部が何を問題とし、何をし、何を感じるかなのだと思います。そのために私たちは、継続できて、また私たちが主体となることができる活動を考えるため、話し合いを重ねてきました。

その結果、インターネットの「バリアフリータウン」(全国のバリアフリーの施設を紹介するNPO主催のホームページ)に上越周辺の施設(レストランや宿泊場、公共施設など)を登録する、ということを決めた活動をしました。方法は、私たちが興味を持った施設と連絡をとり、実際にその施設を訪ねて利用してみます。そこで得た情報をバリアフリータウンに登録し、また別紙に私たちの活動記録としてまとめます。

活動の第一回目として、去る4月21日、上越市内のイタリアレストランを探索してきました。レストランの店長さんに突然話をもちかけたので、受け入れてもらえるのか不安もあったのですが、快く受け入れて下さいました。お店側としても、折角設備が整っているのに車椅子の方の利用が少ないということが悩みの種だということでした。今回は、車椅子の方と高齢の方に対するバリアフリーということを視点としました(実際に車椅子に乗り、高齢体験キットを装着して行きました)。駐車場からのスロープ、出入り口、トイレ、レジ、テーブルが実際に利用できるかどうかを確かめ、必要な部分の計測を行いました。また、店長さんにバリアフリーを意識したお店作りの理由など、お店側の生の声を伺うことができました。

私たちの生活にとって、「情報の多さ」ということは、住みやすい環境を左右する大きな因子だと思います。バリアフリータウンへの登録を通して、多くの方に情報提供できることに、この活動の意義を見出したところです。

### 雪情報

#### 上越市冬期バリアフリー対策モデル事業とおる

上越市道路課雪対策室から平成14年3月28日付けで国土交通省から表記事業の同意が得られたとの情報が入りました。この事業は雪国上越市の冬の変化を画期的な一大事業になります。除雪車が入りにくい生活道路を無雪化する事業です。国土交通省との関係で、市民からの要望、提案の基盤情報提供のために、「住ま研学生部」の見田さん、「住ま研会員」の草間さん、新保さん、

橋本さん、横山さん、それに杉田の6名が「上越市冬期バリアフリー対策事業検討協議会」のメンバー（検討協議会メンバーは31名）として関わりました。

## 「木陰」～介護老人保健施設に就職して～

介護老人保健施設 インターコート藤（長野県）寺本 希久枝

新潟県立看護短期大学を卒業して3年が過ぎました。沢山の皆さんにご心配をおかけしましたが、この4月より地元長野に戻り介護老人保健施設で看護職として勤務しております。1年半、住ま研メンバーでもあり短大時代の恩師であります水戸美津子先生のもとで老年看護を学ばせていただき、もう一度臨床に戻ろうという思いを得ることができました。

就職しました介護老人保健施設（以下老健）は、150床の入所数で県内でも大規模な老健です。その150床をADL・痴呆の程度などで3チームに分け、1チーム50床でケアを行っています。就職を決めた理由に150床の全室を平屋の建物に配置しているという施設のハードの面があります。私が勤務しています痴呆棟（痴呆の高齢者が中心というのみで痴呆加算棟ではありません。）はその真ん中に位置しています。「棟」と言いますが、他の2チームと建物上の境はありません。

まだ勤めて2週間が過ぎたところですが、ひとりの高齢者と接してきて少しずつわかってきたことがあります。その高齢者は毎日、杖をついては自宅を探して歩いています。ひとりで懸命に歩いているときは声をかけても無駄なのです。用事がある姿を探し、話し掛けても会話は二言三言で終わってしまいます。そしてまた歩き出します。しばらくして、また出向くと今度はサービスステーションからは全くの死角となる廊下のベンチで座っています。表情も穏やかに、行き交う車椅子に乗った高齢者を眺めていました。まるで散歩にでかけた高齢者が木陰で休んでいるような感じでした。またしばらくすると他の高齢者と最も賑やかなダイニングで話をしていました。私はこの高齢者は単に「回廊」を徘徊するのではなく、「町並み」の違う風景を見ながら歩いているのではないか、また時にはひとりの空間を、時には人とのふれあいを求めて歩いているのではないか、そんな気がしました。

しかし、施設が大きくなればなるほど「町並み」は増えても、今まで生活してきた住まいである「住宅」からかけ離れた存在であることには変わりありません。そのギャップを埋めるものは施設を運用していく「ケア」ではないかと思えます。この「住宅」ではない「施設」という環境でできる限り「その人らしく」生活をしていくためにはどうしたらよいかを考え、実践していくことが自身の課題だと思っています。

臨床を離れて2年近くが経ちました。今はまだ高齢者のことと仕事の流れを覚えことで精一杯です。その中でこの課題に対し、どのようにしたら良いかを考えていきたいと思えます。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

最後に、高齢者にとっての穏やかに過ごせる「木陰」が今後もっと増えますように。

【参考文献／外山 義：生活空間論 生活のみなもと②,看護教育,42(2),2001,pp.86～89】



当ニュースは「住ま研」学外研究会員及び関係者に83通、学内研究会員及び学生部に20部を配布しました。その他宣伝のために学内の先生方・事務局にも約50部配布しました。

問合せ先：新潟県立看護大学内「快適住まい環境研究会」TEL 0255-26-2811  
FAX 0255-26-2815 E-mail sugita@niigata-cn.ac.jp

# 住ま研ニュース

Vol.5(2) 通巻第27号

平成14年6月20日

発行：新潟県立看護大学内・「快適住まい環境研究会」

(文責：佐々木美佐子)

通巻26号でお知らせしたとおり、新しい大学教員の参加を得て新たな出発をした本研究会ですが、まずは順調に進んでいます。早いもので、大学の教育開始からはや2か月です。学内の雰囲気も大分変わったように感じます。どうぞ、機会をつくってお訪ねください。

「住ま研ニュース」第27号をお届けします。

## 「住ま研」がNPO?

先号の「住ま研ニュース」でNPO立ち上げ案を御案内したところ、大勢の関係者から御意見が寄せられました。そこで平成14年5月9日(木)から毎週関係者に看護大学に御集まり頂き翌月の6日までの5回、午後5時30分から8時30分頃まで熱心な討議が行われました。討議に参加された関係者は建築士会役員、PT、医師会職員、上越市市職、福祉住環境コーディネーター、本学「住ま研」メンバーの約10名です。

議論のなかで、関係する組織との意見調整が必要とされ、上越市障害者生活支援センターかなやの宮越亮室長さん、上越市健康福祉部健康づくり推進課の金子課長さん、NPO「スキップ」の丸山先生の御意見をお聞きしました。NPOにする案と共に、別の案も提案され、それぞれの案のメリット、デメリットが討議されました。様々な議論の結果、「NPO立ち上げに必要な資金・経済的基盤、専従スタッフ、代表者が定まらないので、しばらくの間、NPO立ち上げは先延ばしにする」ことになりました。

そこで今後2年間程度の間「住ま研」活動をさらに進展させ、研究の質を確かなものにする方向性が確認されました。「住ま研」の研究方向とNPOのミッション(使命)に関連して議論は以下にまとめられます。

- 1) 住まいに関する研究は、建築、保健、福祉、医療、精神、エネルギー、風土、環境、地域コミュニティ、等様々な側面を持っているが、現代社会が要請する住まい研究は、「自分が今住んでいる住宅に、一人暮らしになっても、体が不自由になっても、住み続けられるためにはどうしたら良いか」の間に、幾通りの答えが用意できるか、である。
- 2) 多くの市民は、進化しつつある住宅と福祉機器で、様々な身体的不自由があっても、それを感じないで生活できる可能性を知らないために、将来の不安を抱えている。またそれを知り得た少数の市民は、近い将来を考え自宅を改修しようとしても、地域の大工さんや工務店は従来工法どおりの方法、考え方で対応するために、満足のいく改修例は少ない。
- 3) 介護保険制度の発足以来、20万円を限度にした自宅改修例は少なく、また改修後に必要以上の改修による高額な費用を要求されたトラブルも報道されている。これらは正しい情報の伝達と改修後の確かな評価が行われなかったためである。
- 4) 地球環境やエネルギー消費の抑制を考慮しながら、健康の維持と地域コミュニティを考えた住宅は

どうあるべきか。さらに社会資本となり得る良質な住宅を増やす施策提案等、これらの今までになかった新しい複合分野は誰が担当すべきなのであろうか。大学工学部の建築科ではダム、橋、大型ビルなどの建築を対象にしており、卒業生は住宅の設計はできないとのことである。

5) 私達は、様々な分野の仲間と共に、この社会的要請に応えたいと思っている。

(看護大学 杉田収)

## \* 住宅改修で、身体も心もいきいき！～住宅改修を行ったK氏宅を訪問して～

平成12年に介護保険制度を一部活用し住宅改修を行なったK氏宅(すま研ニュース18号で紹介)に、改修後の生活の様子を伺いに、先日、看護大学のすま研メンバー2名で訪問させていただきました。

住宅改修後、パーキンソン病の病状が進行し、薬の効果が短くなっている、とのことでしたが、身の回りのこと、家事などご自分のできることは続けられていました。

主な改修箇所では、玄関部分の階段、床全体のかさあげによる床面のバリアフリー化、ご本人の居室へのトイレの新設がありましたが、どの点についても「動きやすくなった」と喜ばれていました。特にトイレは、パーキンソン病という病気の特徴から、どうしても薬の効果が切れてくる夜間や朝方は体の動きが悪くなるようですが、夜間トイレに行く際に「自室にトイレがあるおかげで、一人でもどうにか行くことができる、気がねなく行けるのが良い」と改修の効果を実感されていました。

そして、住宅改修をしたご自分の経験を「他の患者さんにも、介護保険を利用してこんなことができるということを知ってもらいたい！」と文章にまとめ、ある会報に載せ紹介されていました。「病気のことばかりに気持ちがいつてしまうけれど、ちょっと視点を変えて、明るい、希望が持てる話題を提供したかった。」と、気持ちも前向きになられたように感じました。

またK氏より、「本当にちょうどいい時期に改修を行うことができた。病状が進行してからでは、工事するのも大変だし、気持ちも萎えてしまっていたかもしれない。動ける時に改修を行なうほうが良いと実感した。」とのお話がありました。現在の生活がより広がったり、また維持するためには、早めの改修が効果的であると感じました。

また、住宅改修というと「日常生活動作の改善・維持」や「介護負担の軽減」など、身体的な面への効果が注目されがちですが、住宅改修に主体的に関わってほぼ満足いく改修ができたことが自信となったり、生活する上での安心感につながったりするなど、気持ちの面での効果も大きいのではないかと思います。

訪問した私達も元気と勇気をいただいたような、そんな訪問でした。

上越保健所保健師さんの紹介を受け、すま研がコーディネーター役となり、当事者・さまざまな専門職種が関わって住宅改修に至った事例でしたが、このようにして関わる意義・効果を実感し、またこのような活動をもっと広げることの重要性を再認識しました。

(看護大学 斎藤智子)

- \* 今年の「住ま研」夏の研修会（施設見学会）は富山県と山梨県の2か所の計画です。  
参加希望者は7月10日までに、杉田先生まで申し込んで下さい。

1. 介護ロボット会社と高齢者や障害者に使いやすい家具の製作所の見学

場所：日本ロジックマシン——富山県小矢部市鴨島 108、TEL 076-452-2663  
つくし工房——富山市中沖 150-3 TEL 076-436-0911

期日：平成14年7月20日（土）

時間：朝8時、看護大学正面玄関前に集合、17時大学に戻る予定

10:30頃からロボット会社見学予定、見学終了後昼食、13:30頃からつくし工房見学

参加費：高速道路料金として1人2000円、おやつや昼食は自己負担です。

2. 山梨県立看護大学等の見学

場所：山梨県立看護大学——甲府市池田 1-6-1 TEL 055-253-7780  
その他老人保健施設と福祉プラザの見学

期日：平成14年7月23日（火）

時間：看護大学朝8時出発、帰りは20時頃の予定

参加費：高速道路料金として1人2000円、おやつや昼食は自己負担です。

- \* 「グループ築宅」研究会主催の第8回福祉住環境研究会に  
小林恵子研究員が講師として参加しました。

- 1) テーマ：「地域看護と福祉住環境」
- 2) 日時：2002.2.24（日）午後1:30から4:30
- 3) 場所：新潟市総合福祉会館
- 4) 内容：

依頼された講義内容は「快適な住まいとは」「地域保健の立場からみた住まいのあり方」などです。

しかし、事前に代表の品田浩子さんから「介護保険についてわかりやすく教えて欲しい」「介護保険」というと暗いイメージが大きいので（私はなるほど、そういう風に一般の住民の方とはとらえているのか？と意外な発見がありました）、うまく活用すれば明るく暮らせるということを協調して欲しい」「できるだけ専門用語をさげ、どのような人にも分かりやすい話をして欲しい」というような私にとってはたくさんの難題？を提示されました。

そのような中で私が講義内容として、今まで地域保健活動をして大切だと感じている次の3点に絞って話しました。

① 人間の健康に影響を与える住まい

地域で病気や寝たきりの方の家庭訪問をして、室内の温度差からくる高血圧の方の脳卒中発作を心配したり、寝たきりになって布団から立ち上がれなくなってしまった方の住環境の改善の必要性を感じたり、高床式住宅の階段が雪ですべってしまい、なかなか訪問先の玄関先までたどり着けなかったことなどを例に住まい環境の大切さ。

## ② 介護問題と家族機能、社会的介護への考え方

家族が本来持っている機能やそれを補う意味でも社会的介護の考え方が浸透してきたこと。また、実際に数年前に行った介護負担感の調査で介護者が男性であったり、実子である場合に介護への負担感があり、他からのサポートが十分ではないこと。また、最近、学生の実習で聞き取りをした介護保険サービスを実際に活用されて介護されている方の生活実態や思い。

## ③ 「住ま研」研究員の多職種が協力したK宅の住宅改修例

Kさん宅の住宅改修の相談から改修後の感想。

参加者は約30名で遠くは長野県からで参加者の顔ぶれも建築士、看護婦、障害者など様々。やはり、皆さんが関心のあった内容は介護保険の具体的なサービスの中身と問題点（例えば入浴サービスにしても排水の場所や居室の階によっては利用しにくいこと）が上げられました。また、改修例についてもたくさんの質問が出され、改めて住宅が健康に与える影響の大きさと参加者の関心の高さを実感しました。また、2002.5.11 グループ築宅：第9回 福祉住環境勉強会にも出席し、築宅がかかわった「自立生活支援センター新潟」の建物を見学してきました。コンセプトを大切にしたい15人の最大公約数の結果である手すりや床の高さ、トイレトーパーホルダーの工夫など女性建築士ならではの細部に渡った工夫がみられました。参加者のニーズに合わせて、今も現在進行形で住宅改善がされています。

(看護大学 小林恵子)

## \* 第8回 快適住まい環境研究会フォーラムのお知らせ

例年短期大学の開学記念日に実施していましたが、今年のフォーラムは9月です。そして、遠方からの講師の先生はお呼びしませんが、研究会の活動や研究員の日常の生活から住宅問題を考えてみる会にしたいと思います。ぜひご参集ください。

### テーマ：「地域看護からみた住環境」

ねらい：自立とQOLの向上を目標とする地域看護の視点から住宅の位置づけと健康生活のための住環境等について具体的な事例に基づいて考える。

日時：平成14年9月21日〔土〕 13:30～15:30

会場：看護大学 第1ホール

内容：

#### 1. フォーラム

##### 「住宅改修とQOL」

コーディネーター 小林恵子 研究員

パネラー

- ・ 当事者、保健師、改修担当者、「住ま研」研究員

#### 2. 在宅ケアと住宅

— 「住ま研」研究員の体験からの問題提起 —

平成 14 年 8 月 30 日

発行：新潟県立看護大学内・「快適住まい環境研究会」

(担当：関谷伸一)

例年になく猛暑もようやく終了かと思ったのですが、厳しい残暑が続きます。それでも頸城平野はすっかり秋の気配が漂い、田園が黄金色に色づき始めました。暗いニュースが多い昨今ですが、住ま研メンバーはそれらにめげず、活動しています。最近の話題をお届けします。

## 9月1日から**住まい相談の受付**を開始します。

### パンフレットができました

研究運動体として「快適住まい環境研究会」(住ま研)が多くの関係者から御協力を頂き、少しずつ成果を積み上げてきました。6年間継続できましたことに、ここで改めて感謝申し上げます。看護大学が開学し、研究の質、研究体制、予算配分等も、より大学らしくなりました。住ま研の活動もそれに伴って発展・進化が求められているように思います。以前から議論されてきたことですが、そろそろ研究運動体としての存在意義に賛同して頂く研究員からは会費を頂き、経済的にも自立した組織を目指さなければならない時期のように思います。また社会福祉事業活動として開始される継続的な「住まい相談」「住まいの評価」は、実践部隊として組織される必要があります。実践なくして研究はあり得ませんので、両者は一体ではありますが、しかし両者はそれぞれ自立した組織が望まれます。

この考えに沿って、住ま研では「住まい相談」「住まいの評価」のNPOの立ち上げが検討されています。しかし他の捨てがたい「案」も提案されていて、さらに検討が必要な段階です。こんな状態から正しい解決策を得るために、「住まい相談」「住まいの評価」の活動を開始してみることになりました。幸い看護大学からこの為の予算配分を頂戴しました。1年半の期限付きですが、将来につなげる成果を約束しての研究です。

こんな流れがあって「住まい相談」「住まいの評価」を平成14年9月から開始します。そのパンフレットができました。

「住まい相談」の趣旨は

- ① たくさん存在する「住まい相談窓口」のネットワーク化
- ② 時代に合った「住まい相談」受付(依頼者ではなく私達の方が動く)
- ③ 相談の趣旨に最も合った組織(今のところ8組織)が対応する
- ④ 新築・改築を考える段階から一緒に考えてくれる公平な組織になる
- ⑤ その人に本当に合った住まいを提供する
- ⑥ 今後の高齢社会を乗り切る良質な住宅を増やす

(文責 杉田 収)

## 「住ま研」夏の研修会(施設見学会)報告

今年は以下のように富山県と山梨県の2か所を訪問しました。

### 1. 介護ロボットの見学

梅雨明けと同時に猛暑が始まったまさに夏の初日の7月20日、前上越副市長の藤原満喜子さんをはじめ総勢24名の団体が、富山県を目指して車をとばしました。最初は富山県小矢部市鴨島108の「日本ロジックマシン」を訪ね、開発真っ只中の「介護ロボット」を見学しました。引き続き午後からは「つくし工房」を訪ねました。以下は参加者からの報告と学生の感想です。

・・・ヒト型ロボット産業が日本の未来を救うか?・・・

一 介護型ロボット制作会社を訪問して 新潟県立看護大学 吉山直樹

はじめに 平成14年7月20日(土)朝8時に看護大学に集合し、富山県小矢部市にある「日本ロジックマシン」を訪問しました(取締役社長:森川淳夫さん)。見学した内容は、

1. 介護支援ロボット Care Robot: Regina (レジーナ)
2. 段差解消リフト付電動車椅子(セリナ)
3. 自動検温システム

などで、改良型の Regina-Jr (レジーナ・ジュニア)は貸し出し中のため見学出来ませんでした。

**開発の動機** 森川さんが、この介護(支援)型ロボットを開発し始めた動機は、7年前、森川さんの息子さんがまだ幼稚園に通っているとき、ご子息の友達のお母さんが腰を痛めて入院されたことがきっかけです。このお母さんの仕事は老人専門病院のヘルパーさんでした。小柄な方でしたが毎日自分より重い寝たきり老人の介護をしていたそうです。長い間入院し、ようやく回復した後、前に勤めていた病院へ行ったのですが、体力の無い人は使えないと断られたそうで、この話を聞いた森川さんは何とかしなくては、と思い自分に出来る事をずっと考えてきたそうです。

自分の力で動けない人が生きてゆくためには人の手助けが必要で、しかもその手助けをしてくれる人はほとんどの場合女性であり、一般に女性が不得意とする事の一つが力仕事です。介護の場合、その不得意な力が強要されます。福祉という言葉を何か美的な感覚で捕らえる風潮があり、こういった女性が現実の福祉に携わる現場では理想とかけ離れた重労働の日々が待ち構えています。若い人たちが勇気と情熱をかかえてこの世界に入ってきてても、この現実挫折する人も少なくありません。

森川さんは、工学部卒業のプロ意識と経営する町工場の機能の一部を投入して、この介護型ロボットの開発に挑戦し始めたのです。

**レジーナの印象** 正直、その図体の大きさに驚きました。家庭で導入できるサイズではなく、当初から施設利用を考えているとのことでした。見学できなかったジュニアがかなり小型化されている、とのことなので期待されます。

ロボットは、安全面での考慮がされているようでしたが、部分的に身体の一部が挟まったりぶつかったりしないような工夫がさらに一段とリファインされて細工されれば、安心感があると感じました。

また、安全のためにスローな動きになっていますが、医療や介護の現場で利用した時にこのロボットによる処理能力がコストに引き合うものなのか、検討が必要と考えました(職員の腰痛症によるトラブルに係る費用との見合いになります)。これからの活動(開発)に期待します。

医療福祉分野でのロボットについて 分類すると次のような範疇になります。

1. 介護型ロボット

- ① クライアントの要求に応じて自動で軽い補助動作をおこなうもの。  
(例:郵便物の受け取り、食飲料の運搬)
- ② クライアントの身体介助、ないしその補助。(例:見学したレジーナ)。

2. 癒し型ロボット

- ① 動物型をしており、所作が類似している。(例:AIBO)
- ② 動物型とはいえないが、人工知能を持ち音声によって応答。
- ③ 動物型で、人工知能を持ち音声によって応答。→未開発

3. ヒト型ロボット

1と2の機能を備えた万能型ロボット。いわば来年誕生日を迎える「鉄腕アトム」です。究極の目標ですが、現在はASIMOのような自立歩行が実現したレベルであり、これからの課題です。

「ナノ・テクノロジー」とともに、この「ヒト型ロボット」の開発が工業国家日本の未来への生き残りのキーワードになっているそうです。皆様方は、如何お感じでしょうか。

(参考)「日本ロジックマシン」ホームページ: <http://www.nsknet.or.jp/morix-am>

E-mail: [morix-am@nsknet.or.jp](mailto:morix-am@nsknet.or.jp)

## ・・・参加した学生の感想・・・

新潟県立看護短大2年 土田泰子

今年の住ま研夏の見学会の第1段として、富山県にある介護用ロボットを作成しているベンチャー企業である「日本ロッジクマシン」と車椅子のオーダーメイドを行なっている「つくし工房」に見学に行ってきました。最近、新聞などで、食事介助をしてくれる介護ロボットが登場し、いよいよ介護にもロボットが、使用されるようになってきたのだと感じており、今回の見学で見てきたロボットも興味深いものでした。今回の見学で見てきたのは、ベットからの移送や、入浴時に使用するリフト付きの介護ロボットで、主に病院や介護施設での利用を目的に開発されているとのことでした。印象としては、作業強度と人数の軽減はもちろん、ロボット自体に可動性と回転性があり、備え付けのリフトから比べるととても自由度が高いという利点が、考えられました。しかし、ロボット自体がかなり大きく、狭い施設や小回りを必要とする部屋に対しては、不利な面があると思われました。また段差を乗り越えたり、座面を高くすることのできる多機能電動車椅子も見せてもらい、ロボットや機械の技術による様々なバリア克服の可能性を感じました。

「つくし工房」では、主に障害のある小児を対象に、個人に合わせるため、座りやすい座面をクッションなどで工夫した車椅子や、作業がしやすい机などをみせていただきました。その作製には、約3ヶ月かかるそうで、作製者だけでなく、使用者とその家族、医師や、PT・OTといった医療関係者、車椅子作製に関わる様々なメーカーの人といった多くの異なる専門性を持つ職業の方々が、その個人には、どのような車椅子が、最も適しているのかを、その児の発育も含めて考えられていました。つくし工房の代表の方で、もともと、仏像や、家具を作っていた与島秀則さんは、「まったく違った業種の方が集まると、思いもよらないアイデアや、発見があり、刺激になる」と言われ、一見、車椅子とは関係のないような業種の方々も含めて、様々な専門性が、その個人のためだけの1つの車椅子作りに、向けられていることに感心しました。

今回見学した2つは、介護者と使用者の両者それぞれの立場を考えている面で、対照的にも感じられました。しかし、つくし工房の方が、それぞれの専門性を追求していくことは、悪いことではないと言われたように、重要なのは、他の違った業種の専門性を、お互いに交換し合うことであると思いました。今までの枠にとらわれない、もっと広い異業種間の連携が、看護・介護を考えるうえで必要であると感じました。

## 2. 山梨県の介護老人保健施設見学

2つ目の見学では、「山梨県立看護大学」と介護老人保健施設 医療法人「甲州ケア・ホーム」を訪問しました。この日も猛暑の中、高速道をひた走り、山梨県の甲府市を目指しました。

### ・・・安心を保障したケア・ホーム・・・

—520km 山梨まで走って得たこと— 新潟県立看護大学 杉田 収

平成14年7月23日(火曜日)朝7時、看護大学を車を出発、妙高パーキングで水野さんグループと合流。住ま研(快適住まい環境研究会)学生5名、住ま研メンバー5名の10名が2台の車で山梨に向かった。甲府市は35度の猛暑、甲府昭和ICで迷子になって、11時過ぎに山梨看護大学に到着。住ま研メンバーの水戸美津子教授が出迎えてくれ、彼女の冷房の効いた科長室に案内され、冷たい飲物を頂いた。科長室のある研究棟は昔のしっかりした建物のリニューアル。それゆえ階段と段差の見事なバリア構造。

大学院修士課程の2領域(地域生活看護学領域と臨床実践看護学領域、地域生活看護学領域には地域活動看護学と地域老年看護学の2つの専門分野。臨床実践看護学領域には感染看護学、成人・老人臨床看護学、母性看護学、周産期母子臨床看護学の4つの専門分野)に入学定員10名(2年の修業年限で、収容定員20名)。大学院の学生には5つの大きな研究室が用意されていて、十分なスペース環境。水戸先生が苦勞して立ち上げられただけの研究室であった。

夏休みに入ったであろう学内の学生食堂は学生で満員。そこをかき分け、住ま研勢11名が420円の定食を食べた。水戸教授は初めて食べたとの学食、同行の藤原元上越市副市長さんには良く耐えて頂いたと感謝。

介護老人保健施設 医療法人甲州ケア・ホームでは秋山小枝子課長さん（看護師・介護支援専門員）から施設を案内して頂いた。ここで最も注目されたことはケア・ホームの家庭への復帰という第一義を見事に実現していることであった。平成12年度の統計では、平均在所日数は45.2日、在宅に戻った率は約86%、職員63名、入所者94名。自宅に戻せるのはなぜかを考えると、

- ① 簡単な診断書ではあるが、入所者・家族と充分に話し合い、適合者のみを入所させる、
- ② 同一敷地内に関連した16事業所があり、有料老人ホーム、リハ病院、特老、デイサービスセンター、居宅介護支援事業所、訪問リハ、通所リハ、訪問看護ステーション等があり、もっとも適合する選択肢が用意されている、
- ③ 島津寿秀グループ会長の手腕で、各施設がそれぞれの目的意識で補い合っている、
- ④ 職員にはプロのプライドを感じられた、などが大きな要因と思われた。

地域住民は自分の状況に合った施設に、すぐに入所できるため、安心であろうと推測された。実際この施設に46回もの入所・退所を繰り返した方もおられるとのこと。また入所されている利用者の方々の表情が暗くないのも印象的であった。実習生を加えたスタッフの数が他施設より多く、スタッフの声かけが良いように感じられた。

午後4時頃から福祉プラザにある山梨県社会福祉協議会・山梨県立介護実習普及センター水口利美所長さんから施設説明を受けた。福祉プラザ内の展示物も多く、それらに貸与、購入、20万円程度の改修などは、それぞれ色カードで表示されていた。この表示は利用者にはとても良い方法と思われた。

・・・山梨の見学会に参加して・・・ 新潟県立看護短大 2年 味田智子

私が、今回の見学会に参加してあらためて感じたのは、すみよい環境というのは、人がつくるといことです。その場所で生活する人にとって生活しやすい環境をつくるには、どのようにしたらよいのかをその人の立場に立って考え、かたちになった所が甲州ケア・ホームであると思いました。私も、甲州ケア・ホームで働く職員の人たちのように、明るくて、住みよい環境を自らつくることのできるようになりたいと思います。

## \* 第8回 快適住まい環境研究会フォーラムのお知らせ

例年短期大学の開学記念日に実施していましたが、今年のフォーラムは9月です。そして、遠方からの講師の先生は呼びませんが、研究会の活動や研究員の体験等を基にして、参加者皆さんで住宅問題を考えてみたいと思っています。ぜひご参集ください。なお、当日、資料代500円を頂戴いたします。

### テーマ：「地域看護からみた住環境」

ねらい：自立とQOLの向上を目標とする地域看護の視点から、住宅の位置づけと健康生活のための住環境等について具体的な事例に基づいて考える。

日時：平成14年9月21日〔土〕 13:30～15:30

会場：新潟県立看護大学 第1ホール

内容：1. フォーラム 「住宅改修とQOL」 13:35～14:45

コーディネーター 新潟県立看護大学 小林恵子

パネラー

・当事者の立場から	上越市 鹿住恒子
・保健師の立場から	上越保健福祉環境事務所 浅井正子
・設計士の立場から	ハート1級建築士事務所 室岡耕二
・「住ま研」研究員の立場から	新潟県立看護大学 斎藤智子

2. 在宅ケアにおける住宅改修の課題 14:45～15:30

問題提起 新潟県立看護大学 佐々木美佐子

問合先：〒943-0147 上越市新南町 240, 新潟県立看護大学内 「快適住まい環境研究会」代表：杉田 収

電話：025-526-2811(内 317) Fax：025-526-2815、E-mail：sugita@niigata-cn.ac.jp

平成14年11月5日

発行：新潟県立看護大学内・「快適住まい環境研究会」

(文責：小林恵子)

つい先日まで半袖姿の日もあったのに、早くも紅葉の便りと共に雪の便りも聞こえてきました。

また、半年間、雪というバリアと闘う日々が始まるのですね。

今回は9月21日(土)に本学で開催したフォーラムの様子、国際福祉機器展についての情報、今月開催される大学祭での住ま研学生部の取組みの話題をお届けします。

## 第8回 快適住まい環境研究会フォーラム 「地域看護からみた住環境」

### テーマI 「住宅改修とQOL」

今回のフォーラムでは平成12年に快適住まい環境研究会(住ま研)が中心となって、住宅の改修相談に取り組んだ事例について紹介しながら、「その人の健康を維持・増進させると同時に、より豊かな広がりやQOLの向上を目指した住宅改修を進めていくにはどうしたらよいか」ということについて意見交換しました。以下、それぞれの発表要旨を掲載します(コーディネーター：小林恵子)。

#### 「改修工事を行ったいきさつ」 鹿住恒子 (当事者の立場から)

平成10年、新潟大学医学部附属病院でパーキンソン病と診断され、自宅療養となりました。

改築する前は、玄関、台所、茶の間等の生活スペースから離れた奥の和室まで声が届かないこと、室内の移動は歩行器を使用しているため、家の段差が多く歩きにくいこと、もし車椅子生活になれば介護の負担も大きくなることから、せめて部屋を改造して、毎日の生活をリハビリに変えて体力・筋力を維持していくために動きやすいようにしなければと家族に言われ、担当の浅井保健師に相談しました。

浅井保健師から「快適住まい環境研究会」を紹介いただき、我が家を見に来ていただいたり、看護短期大学で検討会を開き、主治医からも出席していただきました。私も参加し意見を3点挙げました。

1. 玄関の上り下りを楽にして欲しい。
2. 足が冷えると動きが鈍いので、床暖房にして欲しい。
3. 自室にトイレを付け、洗い槽を付けて欲しい。

これらの要望にそれぞれの専門的な意見も取入れ、改修して2年近くが経ちますが、この間に症状も進んだことを考えると、ちょうど良い時期に改修を行い、本当に良かったと思っています。

障害者、特にパーキンソンは日常の住まいがリハビリの場です。人それぞれの障害にあった動きやすい住まいを家族共々考えていただいて、少しでも気持ちに明るさを持ちたいと思います。

#### 「住宅改修とQOL」 浅井正子 (保健師の立場から)

鹿住さんから住宅改修の相談にのって欲しいと頼まれ、あちこちで情報を集めた結果「住ま研」に声をかけました。

さて、改修を終えて新しい部屋に訪れた時の、鹿住さんのにこやかな顔は、病人の面影も消えてしまうほどのものでした。最初に出会ったときに、食事でもベッドで食べている鹿住さんから障害と上手に付き合いながら自分らしく生活する鹿住さんへと大きく気持ちが変化していました。

今回の改修から鹿住さんが得たと思われるものは次の3つです。

1. 障害の進行という将来を見つめると共に、それを支えてくれる家族や専門職の存在を認識できたこと。
2. 障害をカバーしてくれる快適な(自分で動け、過ごしやすい)空間を手に入れることができたこと。
3. 改修のプロセスをとおして、自分らしさが見つかり、自信につながったこと。

### 「鹿住さん宅の住宅改修に関わって」 室岡耕次（設計士の立場から）

今回の改修で一番学んだことは「住宅改修に標準はない」ということです。

たとえ同じ病名であっても、その症状は一人ひとり違うということです。住宅改修をする場合は、まず、当人の症状をどこまで理解できるか（探れるか）ということが最重要だと思います。以上のことは頭では理解していましたが、いざ実践となると頭での理解に行動がついていきませんでした。

今回は、事前に保健師の浅井さんが鹿住さんの症状を詳しく説明してくれたおかげと鹿住さんご自身がご自分の症状をしっかりと理解されていて、どういう改修が必要かを自分なりに整理されていたことでした

今回は職種の異なる複数の専門家に関わりましたが、これが本来あるべき姿であることをつくづく感じています。

### 「住宅改修に関わって」 斎藤智子（住ま研研究員の立場から）

住ま研メンバーとして住宅改修に関わって感じたこととして次の3点があります。

1. 住宅に関する相談窓口の必要性
2. 当事者の主体的参加及び医療・保健・福祉・建築の連携の重要性
3. 今後の課題

- ① 実際にトライしてみる（トライハウス）が必要である。
- ② 住宅改修に関わったそれぞれの立場で評価し、効果や課題を共有する。

最後に、改修を終えて明るく話される鹿住さんに接し、住宅改修は日常生活行動の改善・維持・安全性の確保などはもちろんのこと、心理面への効果も大きいということが分かりました。

### テーマII「在宅ケアにおける住宅改修の課題」(問題提起：佐々木美佐子)

在宅ケアにおける住宅改修プロセスと課題として、次の3点があります。

1. 日常生活上の問題の発見と住宅改修への動機づけ—誰が、何時するの—  
→ 生活動作を冷静に観察して本人や家族が認識できないニーズを発見し、本人と家族のデマンドに転化させる支援者が必要
2. 生活目標の設定と改善点（課題）の検討と提示—誰が、誰にするか—  
→ 本人と家族の意思を確認後、住宅改修が必要な点を整理する
3. 質の良い業者の選択—どこに、誰に相談するの—  
→ 介護保険での住宅改修には業者の指定制は取られておらず誰でも可能であるため、住宅改修のトラブルが続出している。自治体で事前相談や訪問調査を実施しているところもある。

以上がフォーラムの概要ですが、参加した学生から次のような感想が寄せられました。

介護保険制度がはじまってから、住宅改修を行う人が増えたと聞きます。しかし、いい加減な業者に頼んでしまったために以前よりも危険度が増してしまったり、必要のない工事まで契約させられてしまうなど、トラブルも増えているようです。

今回の鹿住さん宅の場合、住ま研という、営利を目的としない団体が中心となり、さまざまな専門家が集まって、実際に鹿住さんのお宅でいろいろな視点から検討し、改修したところがすごいと思いました。改修した後、少し違和感のあるところがでてきて、それについては今後の課題とのことでしたが、これだけ当事者のことを思ってやっているところはあまりないのではないかと思います。そして、フォーラムでしっかりと話ししていらっしゃる鹿住さんの姿からは想像できませんでしたが、改修前は一日の大半をベッドで過ごしていらっしゃったのに、改修後、表情が明るくなり、活動的になったとき、ますますこのようなしくみの必要性を感じました。現在、住ま研では住まいの相談を始めたと聞きました。多くの人に知ってもらいたいと思いました。(住ま研学生部 和久井君江)

私が住んでいる家にも、ここは改修したらもっと便利なのだと思う所があります。

今は、親も元気で何の心配もなく生活していますが、これから体の変化も著しくなって来ます。そんな不安がある中、今回のフォーラムが行われ、とても興味深く、勉強になったことが沢山ありました。今回学んだことを、私の家にも活かしていきたいと感じました。(住ま研学生部 武田 愛)

## 第29回 国際福祉機器展に参加して

福祉住環境コーディネーター 杉田 靖子

第29回 国際福祉機器展が去る9月10日(火)～12日(木)、東京国際展示場「東京ビッグサイト」東展示ホールでありました。出展社数は619社(日本企業536社、海外企業83社)で6つのホール毎に日常生活用品、ベッド・入浴用品、建築・住宅・施設用設備、トイレ・排泄用品やコミュニケーション機器・情報システム、移動機器(車椅子・リフト)、福祉車両が展示されました。入場無料で、保健・福祉施設、介護職、建築、研究職関係者などの他、障害者やその家族とサポーター、介護者と本人など一般市民が多数訪れ、ごったがえしていました。高齢者のための料理教室や、インターネット講座などもあったようです。

私は長谷川興業の建築士さんから案内をしてもらい、半日の限られた時間であるため 1. 使い勝手のよい簡易スロープや段差解消機はないか。 2. ユニバーサルなデザインの手摺りはないか(家族の状況で可変可能なもの) 3. 福祉車両や車移乗用機器にどんなものがあるかを中心に見て回りました。

身近な展示室やカタログでしか見ていなかった私にとって、まず、その多種多様さに驚きました。まさに「百聞は一見にしかず」で、とても興味深く、試したり触ったり、動かしたりして、その効用を分りたいという欲求を駆り立てられました。中でも在宅用に使用できる床走行リフト「ステデー」は心に明かりを灯してくれた気がしました。1992年にイギリスの全ての病院で看護職のリスクを防ぐための専任ナース制度が設けられて以来、ヨーロッパ、アメリカ、カナダでは看護婦が25kg以上のものを持ち上げることが禁止されたという情報は驚きでした。商品名「ステデー」はそうして開発されたアクティブ用リフトの1つで、コンパクトで、ベッドから車椅子を使用しないで直接トイレへの移動ができます。軽く腰掛けながらの捉まり立ちの姿勢で移動し、電源は使用しない、アルミ製の走行リフトです。対面で移動できること、臀部が開閉するので、便座や浴室の椅子への移乗にお互いに無理の無いことがとてもよく、介護保険でリースしてくれたら「絶対に使うぞッ!」と思いました。病院・施設での使用は、介護者の労働改善に大きく貢献すると考えられます。こういうことにお金をかけて欲しいと思わずにはいられませんでした。

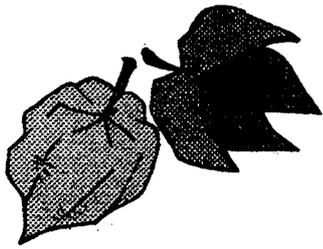
折りたたみ用の片手でヒョイと持てるタイプのスロープがあり、段差解消機も設置条件に応じて様々なタイプがあり、価格も安くなっているようです。公共の施設や病院等に(リハビリのため)設備としてあったなら、身近に目に触れ、利用経験を積むことが出来るので、歩行困難になっても、悲観の度合いが軽くなりQOLの向上に繋がるのにと思いました。勿論 障害者や介護保険適用の住宅改修に対しての規制の緩和や助成がなされていくことが肝要であることは言うまでもありません。

また玄関や階段の上がり口、トイレ、浴室等、上下動作が多い部分に適すると思われる升目状のデザイン的にもカラフルで、旧来の手摺りのイメージを全く持たない手摺りがありました。可動式の手摺り、戸などの開口部に取り付ける取り外し自由の手摺りや材質も様々な手摺りを見ることが出来、インテリアとして、違和感なく同居家族にも受け入れ易いものになってきているなどという実感を持ちました。

日頃、通院などの外出のための移送に関わっている者として、自家用車の改造をしないで、車椅子の方を楽に移乗できる小型のリフトを見つけられたのは嬉しいことでした。介護リフトの一種で支柱やアーム、電装品の取り外しが出来るもので車内に付けます。価格はスリングシートとも40万円弱です。東京では、NPO活動の一環の(確認せず)「貴方にあったように改造します」という会社があり、パネル展示をしていました。ダイハツ、トヨタ、ホンダ等が独自の介護車のデモンストレーションをしていました。地元でも開催してくれたらと思いました。

次回の機会には、複数で手分けして見て回り検討会が持てたら、個々の経験がより効果的に生かされるのではないかと思います。

---



# 桜桃祭

11月16日(土)

**すま研学生部は今年も劇をやります。  
見に来てください。**

## 劇名『すま研ステーション』

目の不自由な方のために、昨年から上越市に導入された「歩行者情報支援システム」のデモンストレーションを、ニュース番組風に仕上げました！

会場 新潟県立看護大学 食堂

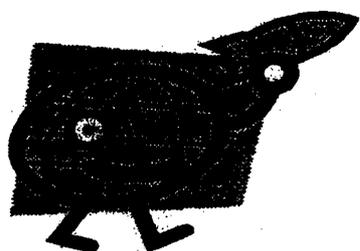
上演時間 午前10時30分 と 午後1時30分 (2回予定)

劇の上演後、「歩行者情報支援システム」の体験コーナーを設けたいと思います。

ぜひ、ご参加ください。

また、今年度の学生部の活動報告として、「バリアフリー・タウン」に掲載した施設の展示を併せて行いますので、ぜひご来場ください。

# 住ま研ニュース



平成14年12月16日

発行：新潟県立看護大学内・「快適住まい環境研究会」

(文責：学生 広田愛)

---

一晩で車が雪に埋まってしまった朝。学校へ行くためにアパート共同のさびたスコップで一生懸命雪かきをしていたら、見兼ねたお向かいの奥さんが便利なママさんダンプを貸してくださいました。寒い冬、人の温かさが一層身にしみみます。

さて、今回の住ま研ニュースは、学生部の土田康子さんから学祭の感想文、一級建築士室岡耕次さんから12月7日に行われた住宅改修の見学の報告、杉田先生から住ま研の会則原案を寄せて頂きました。

---

## 桜桃祭の感想

新潟県立看護短期大学2年生 土田泰子

今年、住ま研学生部は、主に上越市内にあるバリアフリーを発掘しようという取り組みをしました。実際に、学生が飲食店や、ホテルなどを見学に行き、看護学生としての視点から評価しようというものです。1年間の期間がありましたが、普段の授業や、実習でなかなか時間は、空きませんでした。その中で、土曜日を利用して、実際に飲食店などに連絡を取り、見学に行きました。看護という視点からも、車椅子を持ち込んだり、高齢者体験セット（関節の動きや、視界が悪くなる）をつけて行くことで、少しでも使う人の気持ちになって体験しようと思いました。実際、見学に行けたのは、飲食店2件、ホテル、スーパーマーケット1件ずつと限られた場所ではありましたが、NPOのホームページである「バリアフリータウン」に掲載したり、桜桃祭での展示・冊子による紹介につなげることができました。ただ、この掲載がどれほど役に立つものにしたのか、桜桃祭では見学者も少なかったことを考えると、必ずしも大成功だったとは言えないかもしれません。しかし、杉田教授をはじめとする、教員の先生や、市役所の平原さんや三菱プレジジョンの石川さん（信号補助装置の展示にご協力いただいた）など様々な方の助けを借りながらも、学生が企画から外部交渉、見学し、桜桃祭での発表につなげることができたことは、学生の自信につながりました。住ま研学生部の活動に際して、ご協力して下さった方々に感謝したいと思います。また、部長として忙しい中、学生をもりたててくれた広田愛さんにも感謝したいと思います。お疲れ様でした。

## Kさん、Oさんの住宅改修を見学して

(有)ハート1級建築士事務所 室岡耕次

12月7日(土)に新井市内の2件の住宅改修を見学させていただきました。このことについて報告をさせていただきます。2件の住宅はいずれも、長谷川美香さん((有)ミカユニバーサルデザインオフィス取締役社長)の指導協力のもとに長谷川興業㈱さんで工事をされたものです。

### Kさんの場合

Kさんの住まいは、市街地に近く比較的住宅も密集しているところです。Kさんの症状等は詳しく聞いていませんので、説明は省略します。改修前のKさんは、ほとんど寝たきりだったそうです。住まいが(部屋が)狭いためベッドを置くと他に物もあるために、動けるような空間が確保できず、寝たきりでしか居ることができないような状態だったとのことでした。

そこでまず行われたのは、2室続きの部屋(和室)の仕切りを取除き1室にし、さらに廊下との壁も撤去することで、2室+廊下だった間取りをゆとりのあるワンルーム化としたことでした。それにより、改修前は廊下で分けられていたトイレと浴室が、廊下をなくすることで部屋から直接アプローチできるようになっています。また、台所の仕切り壁もなくすることで、どこにいても家族の気配が感じられる空間になっていました。この改修によりKさんが、寝たきりだった状態から起き上がり、車椅子を利用することで、ご自分で動く意欲と元気を取り戻したそうです。

当初の改修では、外部とのバリアー解消まではしていなかったとのことでしたが、Kさんが積極的に外に出ることを希望するまでに元気になったことで、玄関に段差解消機を新たに設置し外部とのバリアーも解消してありました。

さらに足が不自由な息子さんのために、2階に上がる階段に階段昇降機を設け、ご家族が安全に住み続けられるような家に改修されました。

### Oさんの場合

Oさんの住まいは、市街地から離れた山間地で降雪量も多いところです。Oさんは脳梗塞による右上肢不自由で室内の移動は、T字杖と家族の介助でかろうじて可能ということです。また、浴室は、浴槽のふちが高すぎてOさんがまたいで入ることが出来ず、洗い場で椅子に座ってお湯をかけてもらう入浴方法だったそうです。奥さんは、変形関節症と骨粗しょう症のため夫の介助は限られていましたが、幸いにも娘さん夫婦が同居されているため、娘さんが主に介護の中心になっています。しかし実の娘さんであっても体力は勿論、精神的にも随分負担が多くなっていたとのことでした。

1. 改修に当たっては、予算のこともあり必要最小限にするということで、トイレへの廊下の段差をなくし、手すりを設置する。
2. ホールと玄関土間との段差が60cmあるのでゆるい階段を設ける。
3. 浴室をユニットバスで改修し、シャワー浴の装置(商品名:座シャワー)を設ける。

以上を改修項目としたとのことでした。

改修により今まで不自由だった、入浴やトイレが改善され、Oさんは、涙を流して喜ばれたそうです。

以上が2件の住宅改修の内容ですが、当人やご家族からお話を聞いて感じたのは、

1. 適切な住宅改修は、当人の気持ちを向上させ、機能回復までも助けるということ。
2. 適切な住宅改修は、当人だけでなく介助する人をも幸せにするということ。

でした。しかし、改修すれば全て解決するかというと必ずしもそうではなく、特に進行性の疾病の場合、その後はどうするかまで考えておく必要もあるかと思えます。

しかし、適切な住宅改修の効果・意義がいかに大きいかを実感することができた見学でした。私も元気をいただいた気がしました。



## 快適住まい環境研究会の会則原案

平成8年より活動してきました「住ま研」は、新潟県立看護短大の共同研究事業の一つとして、かかる費用の補助を受けてきました。その費用で講師の招聘、ニュースの発行、研究論文の報告がなされてきました。その他、施設見学、研究会開催等は御存知のとおり、参加者の手弁当で運営してきました。

今年（平成14年）から看護大学になりましたので、自立した研究グループとして、費用の面でも自主的な運営が望まれています。自立した「住ま研」を目指して以下の会則原案を御提案致します。「住ま研」の行事を従来どおり実行できる費用で、もっとも安い金額を会費として提案しました。御意見・御希望を事務局までお知らせ下さい。会費振り込みは郵便局を利用する予定です。

### 快適住まい環境研究会 会則

20021202案

#### 第1条（目的）

- 1、本会は、誰もが安心して暮せる住環境をめざし、福祉・看護・介護の原点は住まいであるという観点にたち、住環境に関する研究を推進し、それをもって社会に貢献することを目的とする

#### 第2条（性格）

- 1、本会は住環境に関する地域住民に開かれた学際的研究組織である
- 2、本会は研究組織であると共に、住環境を改善する市民の活動組織でもある
- 3、本会は特定の政党・営利団体からは独立した存在である

#### 第3条（活動）

- 1、工夫された住宅・施設等の見学学習
- 2、住環境の実態調査
- 3、情報交流と情報提供

- 4、住環境に関する提言
- 5、その他本会の目的を達成するための活動

#### **第4条 (事業)**

- 1、研究会、フォーラム等の開催
- 2、住ま研ニュースの発行やホームページ等による情報発信
- 3、住宅や施設等の見学会
- 4、学術雑誌への論文、報告、総説等の投稿
- 5、その他本会の目的を達成するための事業

#### **第5条 (会員)**

- 1、会員は本会の主旨に賛同する個人・団体とする
- 2、個人会員 (入会金1,000円、年会費2,000円) は本会の全ての行事に参加でき、ニュース等の配布が受けられる
- 3、団体会員 (入会金1,000円、年会費一口4,000円) は本会の全ての行事に参加でき、ニュース等の配布が受けられる
- 4、会員は本会の主旨に違反した場合、或いは会費を1年以上滞納した場合に、その資格を失う

#### **第6条 (役員)**

- 1、会長 1名
- 2、副会長 1名
- 3、会計幹事 1名
- 4、幹事 若干名
- 5、監査 1名
- 3、顧問 若干名

#### **第7条 (役員選出)**

- 1、会長、会計幹事、監査は会員の中から選出する
- 2、副会長、幹事は会長が会員の中から選ぶ
- 3、顧問は幹事会が選出する

#### **第8条 (役員職務権限と任期)**

- 1、会長は本会を代表し、会務を統括する
- 2、副会長は会長を補佐し、会務を分担すると共に、会長に事故あるときは、その職務を代行する
- 3、会計幹事は本会の会計を担当する
- 4、幹事は本会の具体的な運営の執行を分担する
- 5、監査は本会の運営及び会計を監査する
- 6、役員任期は2年とし、再任を妨げない

#### **第9条 (総会と幹事会)**

- 1、総会は2年1回開催し、本会の活動・事業等の方針を決定する
- 2、幹事会は必要に応じて随時開催し、本会の具体的な活動・事業等を決定する
- 3、総会・幹事会の決議は出席者の過半数以上で決定する

#### **第10条 (会計・事務局)**

- 1、本会の経費は、会費、寄付金、その他の収入をもってあてる
- 2、会計年度は4月1日に始まり、翌年の3月31日で終わる

#### 第11条 (雑則)

- 1、本会は「住ま研」と略し、英文名は The Society for Suitable Housing Environment とする
- 2、事務局は当分の間、上越市新南町240番地 新潟県立看護大学 杉田研究室内に置く

#### 第12条 (会則変更)

- 1、この会則は総会の決議で変更できる

付則

この会則は平成 年 (        年) 月 日から実施する

#### 快速住まい環境研究会

〒943-0147 上越市新南町240

新潟県立看護大学内 快速住まい環境研究会

杉田 収 (代表) TEL 025-526-2811 FAX 025-526-2815

E-mail sugita@niigata-cn.ac.jp

---

### 外山 義先生(京都大学大学院工学研究科教授)が52歳で急逝

平成14年11月6日、就寝中の突然死のようです。平成10年5月8日、新潟県立看護短大合同講義室で開催された第3回「住ま研フォーラム」で、「最後まで自分の足で歩み続けるために」のタイトルで御講演頂きました。この講演で「今後の高齢者施設はいかにあるべきか」「研究調査のやり方」を教えて頂き、先生が設計された全室個室型特別養護老人ホーム「おらはうす宇奈月」(富山県)を見学しました。

山梨県立看護大学の水戸美津子教授(住ま研メンバー)から「高齢者ケアの分野では、老人ホームの個室化やグループホーム、身体拘束廃止などの分野で、国を動かす力をお持ちの先生でしたので、残念で、残念でなりません」とのお話が届いています。

同じく「住ま研」メンバーで外山先生と大学同級の高橋伸矢さん(中央設計、上越市西城町)からお寄せ頂いた葬儀の模様とTV放送情報をお知らせ致します。葬儀は東京の日本基督教団信濃町教会で平成14年11月15日に行われました。以下は喪主の外山真理様(奥様)のことばです。

悲しんではられません。

本人には両親から受けた話すこと、と

本人自身の表現し形にすることができるという能力を授かりました。

いろんな方と関わりを持ち、役に立てていただいている事に

満足していることでしょう。

どうぞ悲しまないで下さい。

なお、平成15年1月5日(日)NHK教育TV 14:00~15:00

「こころの時代」—もうひとつの家を— 外山 義先生へのインタビュー番組の再放送があります。

# 住ま研ニュース

vol5(6) 通巻第31号

平成15年3月17日

発行: 県立看護大学内「快適住まい環境研究会」

文責: 斎藤智子

年度末を迎え、なにかと気ぜわしい今日この頃ですが、皆さまいかがお過ごしですか。

今年住ま研は、これまでの活動をまとめた活動集の発行、会費による自主運営への転換などさまざまな動きがあり、転換期を迎えています。

今回のニュースでは、住ま研への入会手続について、住ま研研究活動集の紹介、学生部前部長からのメッセージ、最近の住ま研の活動の報告をします。

4月からは、新たな「住ま研」のスタートとなります。この研究会がさらに充実し、社会に還元できるものとなるように、活動を発展させていけたらよいと思います。

## 「住ま研」が手作りの本を作りました！

住ま研が活動を開始してから7年が経過しました。ここで今までの活動を振り返り、今後の活動を確かなものにするために、住ま研の活動・研究をまとめることになりました。

本の題名と目次、担当執筆者を御知らせします。看護大学所属教員と学生、さらに近くにお住まいの住ま研幹事が分担執筆し、これからコピーして作成します。資料にまとめました住ま研ニュースは、今までに発行された1号から今回号の31号まで、また快適住まい環境研究会報告と原著論文は新潟県立看護短期大学紀要に掲載されたもの、さらに住ま研関連報道は拾えた範囲での住ま研関連記事です。200ページ程度で完成は6月頃の予定です。

主な内容は、次ページの目次のようになっています。

皆様に読んでいただいて、ご感想・ご意見、今後の活動へのご示唆等いただければと思っています。

つきましてはこの本を希望される方に実費でお送りします。送料込みで1冊2,000円です。

送付を希望される方は、別紙2「研究活動集送付申込み書」に必要事項をご記入の上、同封の返信用封筒で下記までご返送ください。代金は、同封の振込み用紙により、郵便局で納入してください。(金額はご自分でご記入ください。)

住ま研に入会をされる、されないに関わらず、読んでみたい方には2,000円でお送りします。平成15年3月31日までに事務局に届きますように手続きを御願ひ致します。

申し込み

〒943-0147 上越市新南町240番地

新潟県立看護大学内 「快適住まい環境研究会」

・杉田 収 または 斎藤智子まで

# 上越地域における快適で安心な住まい環境に関する研究

—快適住まい環境研究会 7年間の歩み—

## 目次

はじめに	杉田 収
I、快適住まい環境研究会（住ま研）活動の歩み	
1、住ま研フォーラム	佐々木美佐子
2、研究会	関谷伸一
3、住まいの改修	室岡耕次
4、住宅評価	杉田 収
5、施設見学会	小林恵子、杉田 収
6、住宅見学会	斎藤智子、関谷伸一
7、研究会を支えた仲間達	杉田 収
II、上越地域における快適で安心な住まい環境	
III、住ま研学生部の歩み	水嶋和美、市橋美菜他
IV、資料	
1、住ま研ニュース 第1号～第31号	
2、快適住まい環境研究会報告	
1) 第1報 —自立応援をめざして—	杉田 収他
2) 第2報 —バリアフリーモデルハウスと住宅改修事例の検討から—	水戸美津子他
3) 第3報 —住宅改修の問題点—	関谷伸一他
4) 第4報 —住むことから「住居」を考える—	安田かづ子他
5) 第5報 —高齢者のための施設と上越地域の住宅を考える—	杉田 収他
6) 第6報 —当事者主体の住宅改修を考える—	斎藤智子他
7) 第7報 —住む人のQOL（生活の質）を高める住まい方とは—	小林恵子他
3、原著論文	
1) 高齢社会に対応した住居と住環境—トライハウスの基本構想の提案—	杉田 収他
2) トライハウスの模型作成の試み	関谷伸一他
3) 上越地域でのこれからの住宅	杉田 収他
4) 高齢社会での雪処理問題と今後の対応法—豪雪地で暮らし続ける為に—	安田かづ子他
5) 降雪地域における環境共生住宅 —建築後1年を経過した提案住宅の評価—	斎藤智子他
4、住ま研関連報道	
おわりに	水戸美津子

## 「快適住まい環境研究会」の会員募集と入会方法について

前回(30号)のニュースでも皆様にお知らせしましたとおり、「快適住まい環境研究会」がより自立した研究会として活動していくために、会費による自主運営を基本とした研究会への転換を図ることにいたしました。

会則については、前回のニュースで、原案を提案し、別紙のとおり作成しました。今後は、この会則に基づき会を運営していきます。

ぜひ、皆様から引き続き、会員となつていただき、住ま研の活動にご参加・応援いただくと大変ありがたいと思っています。

皆様のご入会をお待ちしています。よろしくお願ひします。

入会にあたって・・・

入会金 1000円(入会時のみ)

年会費 2000円(年1回)

の納入をお願いします。

今後の活動内容としては・・・

- 1 研究会、フォーラム等の開催
- 2 隔月の住ま研ニュースの発行
- 3 住宅や施設等の見学会
- 4 住宅・住環境に関する共同研究の実施

等を行っていく予定です。

### 入会手続について

1. 別紙1の入会申込書に必要事項をご記入の上、同封した返信用封筒にてご返送ください。
2. メールでお返事を下さる方は、申込書の必要事項を記入の上、ファイル添付で送っていただくか、メール内に必要事項を直接お書きいただき、[sugita@niigata-cn.ac.jp](mailto:sugita@niigata-cn.ac.jp)、または[tomokos@niigata-cn.ac.jp](mailto:tomokos@niigata-cn.ac.jp)までお送りください。
3. 入会金(1,000円)、年会費(2,000円)の合計3,000円を、同封した振込用紙にて郵便局で納入してください。(金額欄はご自分でご記入ください。振込み手数料はかかりません)
4. 同時に「研究活動集」の送付もご希望の方は、入会申込書を送っていただく際に、別紙2の「住ま研活動集申込書」に記入の上、一緒にご返送ください。  
「活動集」の実費(1冊2,000円)については、入会金等を振り込まれる際に同じ振込用紙で、入会金・年会費(3,000円)と活動集代(1冊2,000円)をあわせて、振込みをお願いします。(金額欄はご自分でご記入ください)
4. 申し込みは、3月中にお願いします。

## 最近の住ま研活動報告

### ～第五回全国健康住宅サミット越後雪国大会に参加～

平成 15 年 2 月 22 日～23 日 三条市の地場産センターで開催されました第五回全国健康住宅サミット越後雪国大会に、「住ま研」から佐々木教授が「人」福祉の立場から見た健康住宅のパネラーとして参加されました。

また同じくその大会のパネルディスカッション「健康住宅について考える」にパネラーとして杉田が参加しました。

### ～住宅評価の取り組み～

平成 15 年 1 月には新築住宅の SH 氏宅評価（2 回目）、退院指導住宅の IY 氏宅の調査同行、同 2 月には OT 氏宅、OC 宅、KM 氏宅（新井市）（3 回目）改修評価、同 3 月は OT 氏、OC 氏宅 2 回目の改修評価を行いました。

介護保険関連住宅改修の問題点が指摘されるなか、最近住ま研が始めた「住まいの評価」には相当な手応えを感じています。

住み手、作り手の両者の間に我々の研究グループが入り、成功点と問題点（失敗点）を討議しながら、それぞれを文書で明確化し、失敗点の原因とそれを補う方法を討議し、住み手に提示しています。関係する三者が気持ち良く合意できて意義ある評価になるよう、その作法を整理し論文として世に問う予定です。

今のところ、我々が誠意を持って時間をかけて対応するならば、意義ある評価の集積ができるようです。またこの作業に参加した作り手の工務店関係者を始め、大勢の関係者が、真剣に自らを高める研修の場にもなっています。

これらの評価作業に参加して頂いた住ま研評価チームの建築士の室岡耕次氏と理学療法士の 大竹 朗氏、保健師の水嶋和美氏、福祉住環境コーディネーターの杉田靖子氏の努力に感謝します。今後もこの評価作業は続けますので、ぜひ大勢の研究員の参加を御願い致します。

（文責 杉田 収）

## 学生部より

去る 3 月 7 日、新潟県立看護短期大学の卒業式が行われました。

卒業を迎えた学生部前部長、広田愛さんより、3 年間の活動・出会いを通して感じたことを寄せていただきました。

「おせっかい」のススメ —E さんとの出会いを通して感じたこと—

新潟県立看護短期大学 3 年生 広田愛

\*今回は、直接すま研の活動とは関係ありませんが、杉田先生から紹介していただき知り合った、E さん（30 代の女性、神経難病のために四肢が不自由）との関わりを通して感じたことを書きたいと思います。

「Eさんという神経難病の女性が自宅療養となり、同世代の話し相手を探している」、という話を杉田先生から伺って、二つ返事で会いに行ったのは、短大1年生の秋だった。はじめて会ったときのEさんの印象は、目が大きくてきれいで、そしてとてもおしゃべりな人。勢いづいていたものの、何を話せばいいんだろう、と心配していたはずの私が、はじめて会った日から2～3時間も話し込んで、また会う約束をして帰ってきた。

そのときは、しばらくしたら、また連絡して会いに行けばいい、と思っていた。しかし、Eさんの話を当時上越教育大学2年生だった姉に話したところ、「Eさんとしては、人の手があって困るということはないのだろうし、いろいろやりたいこともあるのだろうから、週に1日はEさんのために時間をあけておくことにすれば？そんなに気が合うのは何かの縁じゃないの」と提案された。確かに、学生の私には自由になる時間がたくさんある。土日は完全に休みだし、週に一日に数時間Eさんのお手伝いするのもよいかも、と思った。しかし一方で、この提案、とてもおせっかいなことなのではないかと気おくれを感じていたのも確かだ。

おせっかいを承知で、Eさんに私たちの提案を話したところ、非常に喜んでくれた。その後、金曜の夜の電話で、「今週はどうする？」が私たちの合言葉になり、土日に、姉と私が一日ずつ交代でEさんに会いに行くことになった。

Eさんの体調が良いときは、車で遠出をしたり、レストランへいったり、電車に乗って、一泊旅行兼クリスマスコンサートへ行ったこともあった。四肢が不自由なEさんの外出の介助となると、着替えからはじまり、ベットから車椅子への移動、食事、車椅子での移動など、看護技術が必要な場面ばかりである。看護学生といっても、一回学校でかじっただけの看護技術を、私は冷や汗をかきながら行った。私がどうしてよいのか困っていると、Eさんがベット上から「こうするといいかもよー」と介護ポイントを教えてくれたものだ。

外出がないときは、お昼をめがけて会いに行き、昼食介助をしながら(私もお昼を食べながら)、家族のこと、大学での生活のこと、将来のこと、恋愛のことと、いろいろな話をして、正味2時間ほどで帰ってくる、という日々だった。

この二年半、私はEさんのもとで、本当によく遊び、よく学び、よくしゃべった。

Eさんとの「週に一回」の関係は、私が4月から上越を離れることで、とりあえず終わりとなる。しかし、今後もEさんとはずっと連絡を取り合って、そのつどお互いの近況報告ができるのだろうなと思うと、とてもうれしい。

出会ったとき、あのおせっかいな申し出をしていなかったなら、今の関係はなかったのかもしれない。そう思うと、「週に一回」のおせっかいをして、本当に良かったな、と思う。私のような小心者の人間にとって、おせっかいをやくのは非常に勇気がいるのだ。でも、この人は、と思う人に出会ったら、できるだけたくさん会って、話をしておいた方がいい。私はできるだけおせっかいをやいて、おせっかいをやいてもらえる人間になりたいのだ。

### 編集後記

今回は、大変盛りだくさんの内容になりました。第31号ニュースに原稿を投稿してくださった方々、ありがとうございました。

本来は、2月末に発行予定でしたが、皆様にご入会いただくにあたり、こちらの準備を整えるのに時間がかかり、発行が遅くなりました。

日々が、あっという間に過ぎていくのには、本当に驚いてしまいます。もう、平成15年も1/4が終わったのですね……。もうすこし、ゆっくりしたペースで流れることはできないのかと時間に間いたい気分です。

(斎藤)

快適住まい環境研究会